戦間期郷土研究の地方的展開

―柳田民俗学のネットワーク形成―

課題番号　１８５２０５１６

平成１８・１９年度科学研究費補助金　基盤研究（C）
研究成果報告書

平成２０年３月

研究代表者　鶴見太郎（早稲田大学文学学術院准教授）

目次

報告書作成にあたって……1
研究経費・研究発表……4

Ⅰ　日記の部

「肥前五島遊記」解説……6
「肥前五島遊記」本文……8
「１９３４　日記」解説……43
「１９３４　日記」本文……46

Ⅱ　書簡の部

書簡　解説……93
書簡　本文（すべて橋浦泰雄宛）
久保清（三通）、胡桃澤勘内（一三通）、池上隆祐（一通）、矢ケ崎栄次郎（七通）……96

報告書作成にあたって

研究代表者　鶴見太郎

日本民俗学の組織化という観点から見た時、戦間期にあたる一九二〇年代から三〇年代初頭とは、研究史上さほど大きな位置付けを与えられては来なかった。最大の理由は、「民間伝承の会」（一九三五年結成）に見合う全国規模での研究体制がこの時期、いまだ確立されていなかったことが挙げられる。たしかに一九二五年、柳田国男はみずから『民族』を主宰することによって、全国の郷土史家への組織網を拡大しようと試みた。しかし、同誌に集った岡正雄をはじめとする若手・文化人類学者との編集をめぐる確執は、わずか四年のうちに同誌に休刊を余儀なくさせることとなった。これを境に柳田はしばらく、いくつかの小規模な研究会に参加するほかは、民俗学にかかわる学会への参加を控え、『明治大正史　世相篇』（一九三一年）、『郷土生活の研究法』（一九三四年）、そして連続講義「民間伝承論」の開催（一九三三年）に代表されるように、すぐれて方法的なそして概論的な著述に力を注ぐ。一九三五年の「民間伝承の会」誕生は、その背景に柳田がこうした「手引書」を特に地方の研究者を想定して公刊していたことが挙げられる。

そのことを起点に考えると、戦間期とは郷土研究がいまだ全国的な組織によって統合されていない、あるいは地方在住の郷土史家が民俗学の概論書、手引書によって組織化されていない時代であると位置付けることができ

る。つまり、柳田によって、あるべき郷土史家の像が定まっていなかっただけ、そこに登場する地方在住の研究者の個性が反映されていた時代ともいえるだろう。

本報告書では、当該の時期を示す上で有効な資料として「橋浦泰雄関係文書」（以下、「文書」）所収の「肥前五島遊記」、「１９３４年　日記」そして郷土史家から橋浦に宛てられた書簡を釈読したものを紹介する。これらの資料を残した橋浦泰雄については、既に平成一六年度・一七年度科研成果報告書『昭和十年代における郷土研究の体制化』の中で言及したが、社会主義者としての思想・運動遍歴の中で原始共産制の遺制発掘を志して一九二五年、柳田国男に師事し、以後、組織面において柳田民俗学を支えた人物として知られる。昭和初年、学界的に孤立の道を選んだ柳田に終始付き添い、『明治大正史　世相篇』の執筆を助けた人物であるほか、大正末より絶えず地方を踏査し、在地の研究者との交換を密にした点で、文字通り戦間期民俗学の組織化を考える上で、中央と地方の結節点となった人物でもある。

柳田民俗学の体制化を担った人物が、なぜ郷土史家の個性を引き出す資料を残したのか、という疑問も当然、生じてくる。その答えのひとつとして、橋浦が行く先々の地方で誠実に地元の研究者に対したことが挙げられる。「文書」に含まれるおびただしい地方史家からの書簡が示す通り、橋浦と地元史家との交流は民俗採集が終われば途端に関係が希薄になるものではなかった。そこには明らかに資料保管者に対する敬意があり、地元史家もそのことを的確に読み取って長期にわたる交遊を続けたといえよう。

これらの資料を分析して判明するのは、橋浦が数回にわたって赴いた調査地には、誠実かつ柔軟な態度をもって外からの研究者を迎える郷土史家がおり、その人物がやがて昭和一〇年代以降、組織化されるに到る柳田民俗学の地方における橋頭堡となったという点である。本報告書が中心的に取り上げる五島福江の久保清、そして信州松本の胡桃澤勘内を中心とする民俗談話会「話をきく会」は、その様相を伝える重要な資料である。

なお、資料の読解にあたっては、一部を早稲田大学大学院文学研究科日本史学演習（9）に参加した院生の方々の御世話になった。また、それらの打ち込み作業については、博士課程三年の広木尚氏の手を煩わせた。記して感謝する。

二〇〇八年四月

平成一八・一九年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書

研究課題　戦間期郷土研究の地方的展開―柳田民俗学のネットワーク形成―

研究番号　１８５２０５１６

研究代表者　鶴見太郎（早稲田大学文学学術院）

研究経費　平成１８年度　九〇〇，〇〇〇円（直接経費）　〇円（間接経費）　計　九〇〇，〇〇〇円

平成１９年度　七〇〇，〇〇〇円（直接経費）　二一〇，〇〇〇円（間接経費）　計　九一〇，〇〇〇円

総　計　一，六〇〇，〇〇〇円（直接経費）　二二〇，〇〇〇円（間接経費）　計　一，八二〇，〇〇〇円

研究発表

（1）出版物

鶴見太郎　「男性像を記録したひとびと―「追想」としての民間伝承―」（阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史１　男たちの近代』　日本経済評論社　二〇〇六年一二月）　七七頁～一〇一頁

〃　「戦時下の柳田民俗学―“モヤヒ”の思考」（『環』二六号　二〇〇六年夏号　藤原書店）　二六二頁～二七一頁

〃　『想像力』への回帰―柳田国男『海上の道』の位置付けをめぐって―」（海老澤衷編『講座　水稲文化研究Ⅲ　ジャポニカの起源と伝播　伊予国弓削島荘の調査』　早稲田大学　水稲文化研究所　二〇〇七年三月）　三三頁～四〇頁

（2）口頭発表

Taro Tsurumi “The Legacy of Shibusawa Keizo and His Family of Folklorists”

The 18th Japan Anthropology Workshop(JAWS), March15th, 2007, University of Oslo

鶴見太郎　「方法として見る民俗学者の人生」　第六三回歴博フォーラム「民俗学の行方」　二〇〇七年一二月一日

東京大学本郷キャンパス　主催・国立歴史民俗博物館　後援・文化資源学会

表紙に「１９２８・１」と記してある通り、昭和三年初春、橋浦泰雄が行った長崎県五島旅行記である。訪問の切っ掛けとなったのは、地元の郷土史家であり、『五島合同新聞』社長をつとめる久保清から五島の旧正月を見に来るよう、誘われたことにあった。日付の欄に通常の日付とともに、旧正月に即した日付が記載してあるのはそのためである（本文中では「|」を引いた後に旧正月の日付を記した）。日記に数箇所書かれてある通り、橋浦の五島調査は大正一五年に一度、試みられていた。しかし管見の限り、その時まとまった調査日記が書かれた形跡はない。

大正末から柳田は五島列島の民俗誌編纂を構想しており、橋浦の来訪も久保と協力してその下準備をするというのが第一の目的であった。この民俗誌は、やがて橋浦と久保の共著として『五島民俗図誌』（一九三四年）として一誠社より刊行されるが、その基礎資料を収集すべく橋浦はとして福江周辺の祭礼から、民潭、民俗語彙、神社仏閣の由来と、丹念に調査を重ねていく。五島の民間伝承として有名な「鬼火」については特に重点的な調査が行われている。

その一方で、宿舎の一室をアトリエとしているように、五島での橋浦は日本画家として行動するという一面もあった。素材となる風景を求めて繰り返し小旅行を試みるほか、久保の人脈を頼って絵の買い手となる人々とも頻繁に会っている。さらに彼等の依頼によって新しい作品に取り組む様子も描かれている。

当時の橋浦は決して経済的に余裕があったわけではない。調査費用の工面以外に、東京に残された身重の妻と、五島滞在中に生まれた長女のために生活費を捻出する必要に絶えず直面していた。日記中に散見される絵画の売れ行きに気を配らなくてはならなかった記述の理由もそこにある。その意味で滞在中の橋浦は潤沢な研究費とは無縁な、絶えず緊張した日々を送っていたとみられるが、日記からは周辺の島々で出会った田園風景に見入り、気心の知れた福江の篤志家と夜更けまで酒宴を続けるなど、およそ悲壮感というものが伝わってこない。しかも当時の橋浦はプロ芸の要職にあり、久保をはじめ、幾人かの人士はそうした橋浦の素性を承知していたと見られる。彼等が橋浦へ示した親近感は、運動とは別に橋浦その人に対する信頼があったとみてよい。

「五島遊記」では周到に伏されているが、昭和三年三月とは、第一回普通選挙を契機とする社会主義運動への大弾圧、「三・一五事件」が起こった時期である。久保という福江において最も迅速に情報を得られる人物を友人としていたという幸運もあり、橋浦は東京のみならず、

福岡方面での「事件」の概要を掴むことが出来たと推測される。日記は三月二三日をもって唐突に打ち切られているが、その後橋浦は福岡経由で巧みに臨検を回避しつつ東京へ向かい、大打撃を受けたプロ芸の再建に腐心する。その努力は同年の全日本無産者芸術聯盟（ナップ）に結実する。

これら運動史をかたわらに置いてこの日記を読む時、当該の地で橋浦を援助した郷土史家の誠実な態度である。これは久保が「三・一五事件」のほとぼりの冷めた一九二八年九月一〇日付で橋浦に宛てた書簡（書簡の部参照）で判明する。「私はたとへアナタが共産党員であらうが労農党員であらうがそんな事は微塵も気に掛けてないのですからこの点は御安心下さい。又思想に国境無く、思想の自由を許された現代人として道途の浮薄な批評や揣摩などに脅へて十年の知己にも勝るアナタとの交誼に寸隙を生じてなるものでせうか」という久保の言葉には同時代の思想的潮流から離れ、虚心に民俗調査のためこの地を訪れた研究者に対する敬意が伺える。それはまた、実際の組織の上で政治と民俗学とを分離させ、互いの領分を明確に意識しながら、自身の運動が民俗学を通じて得た知己に累を及ぼさないよう心がけた橋浦の態度とも一致する。

ここから郷土史家・久保清とは、つとめて郷土研究を同時代の政治から離れて捉えることのできる人物だったことが判明する。こうした堅実な地方研究者としての営みは、社会主義者でありながら、青年期クロポトキンの相互扶助論における帰納主義的な態度を捨てなかった橋浦の視座と連動することで、通常の中央・地方の研究者の域を超えた交流となって継続されていく。昭和一〇年代の柳田民俗学はつとめて物証的な研究態度を維持することで、時局と一線を画した研究環境を守るが、それを可能としたひとつの要因は、それに先立つこの時期、久保、そして次項で紹介する信州松本における郷土史家群像にみられる、民俗・郷土と同時代の政治を明確に区別する、そして多くは前者の枠組みから思考する地方研究者が点在しており、柳田が信頼を置いた橋浦のような来訪者と密に交流をはかったことが挙げられる。一九二八年の五島における調査は、その一典型といえよう。

［表紙］

1928.1.肥前五島遊記　橋浦泰雄

千九百二十八年一月

肥前五島遊記

橋浦泰雄手記

［本文］

一九二八・一・一七日

五島図誌編述の為め兼て再遊を企てて居たが、旅費の工面がつかないでゐたのを湧島に相談したら、白井喬二君が間に合はせて呉れたので、旧暦正月元旦は来る二十三日に相当するので、急にそれに間に合はせるよう十九日夜行で出発する事と予定し準備にかゝる。妻が妊娠中で三月に出産の筈であり、プロ芸の委員長としての職責もあるが図誌編述の機を逸するのおそれと、より重要なる我国に於ける共産制度の研究を今年中には一先づ一括する必要もあり、一方先方で画會を開いて多少生活の余融をも作りたいので、かなり心配な以上の諸件をも押し切つて出発断行に決める。

一一八日

旅行案内をしらべた結果十九日夜行発足の予定を変更して二十日午前九時四十分の特別急行で出発する事にする。

五島小西先生の同地発掘物を鑑定して貰ふ為め早朝から美術学校の島田佳矣教授を訪ねたが今回は登校せざる日との事にて途中純絹、式紙など買求め用事を達しつゝ更に島田教授の私宅を芝の伊皿子くんだり迄訪ねたが此處又不在。皈途足助兄の處へ立寄りて別れを述べ夕食の馳走になつてプロ芸へ至り諸君へ別辞を交

し、更にその足にて中野下町の白井喬二君を訪ねて謝辞を述べ十字頃迄角田と三人にて雑談し、朝来の時雨にひどくぬかるみたる路を自宅迄行くりて十一時過ぎやうやく皈着直ちに寝る。

一九日

早朝より起き出で準備。九時過ぎ家を出て美校に島田教授を訪ね小西君依頼の責めを果たす。二時過ぎ皈宅、昨年十月以来なる散髪し湯に入りなどして夜行行李を整ふ。作画の材料を詰め込みたればトランク甚だ重し。

時雄君を訪ねて後事を託す。身重なる妻を只一人留守居さする事痛心に堪へざれど、弱気を見せては一入に妻の心痛せん事を恐れてつとめて平気を粧ふもつらし、一九一〇年頃の日記にM，Sなどの事多く書き散らしたるを妻の読み居りて、気がゝりの様子なれば焼き捨てる。MやSなどから返酬を求める気は元からさら／＼無いが、今更浮薄、我侭な彼等を想ひ出す事は、過去の自分の激情が回顧されてむしろ不愉快である。

二〇日（晴）

六時半起床で準備をする。可憐なる妻は後が淋しく哀しくなるから門外へは見送らぬと云ふ。一人留守すると云ふ事、まして身重なれど健気なる限りだが、さすがに女。それもよし、固く握手して勇気を振り立て戸外へ出る。荷物は俥に頼む。東京駅で電車降り場に赤帽が居らず、汽車到着線階段下までトランクをやうやくに担いで閉口した。恰度いゝ時間に間に合つた。

東海道線は何日も夜行で通つていたが、今日は昼間なので殊に快晴だつたので沿線の風景がすつかり見えた。特に浜名湖、蒲郡附近の風景の大部分はこれ迄つつとも気づかなかつたもの、こんな好い景色があるとはちつとも知らなかつた。迂かつな話だが。

いゝ具合に汽車が空いてゐて一ベンチを全部占領出来たので下関迄ゆつくり寝は寝たが、何分道中が長いので腰が痛くて閉口した。

二一日（晴）

プロ芸の報告を福岡へ下車して同支部へ齎さうと予定してゐたのだが、一列車遅れると長崎で五島行きの船へ乗り移る時間が僅か二十分しかないので、それでは甚だ危険だからやめにして素通りにする、四時過ぎ長崎着桟橋前の佐々木旅館と云ふのへ少息して銭湯へ入り汽車の煤煙を洗ひ落す。九時過ぎ汽船へ移る。三等客室悪臭烈しく胸の気持ちは悪いが旅費手薄なので我慢する。

旧正月を控へてゐるので乗客満員。女客と男客約半々位。島の女等は身たしなみが好い。夜間でゞもあるが、若い娘迄皆夜着に着変へる。私の隣席、老人震ひをする老婆。東京から昨夜終列車で長崎へ着いたが出船の間に合はなかつた。玉の浦迄いくと云ふ。私も福岡へ下車してゐたら此の船へは間に合なかつたかも知れぬ。此の老婆を送つて来た四十余才の女丈高く頬骨高く、鼻ぺっちゃんこにて異貌。寫楽の人物画でも抜け出したやうな女で、支那人か洋人かの妾でもしてるような格好つき。

その老婆の隣は三井楽へ行くとか云ふ中年女とかで、くだらぬ事をぺちゃぺちゃとひつ切りなしによくしやべつてゐる。尤もくだらぬかくだるかは話の大部分がわからぬので保証の限りでないが。その外等々。悪臭ぷん／＼たる船室で、皆が私には十分の九迄は分らぬ言葉でわい／＼騒ぎ立てゝゐる。

船が出船準備の汽笛を鳴らして暫く後、二十前後の娘が慌てゝ船室へ駈け入つて来た。そして私と老婆との間が少し空いてゐたので、（他には少しの空間なし、）其處へ『此處へ入れて頂戴！』と飛び込んで来た。大坂から崎山へ皈る娘とか。今夜行で着いたのだが俥で大急ぎで駈けつけてやつと間に合つたのだと。老婆がいたはつてやる。十一時半いよ／＼出船。今夜は凪で幸だと皆が云ふ。老婆や小娘などは遅れて乗船したので毛布を借りる事が出来ぬ。老婆はかい巻を持つてゐるのでまだ好いが小娘はそれもなく薄着なので可愛さうだから、毛布を譲つてやらうかとも思つたが、何分若い娘なので、こちらで遠慮した。

一二二日（雨）

うと／＼しながら、少し船が揺れだしたなと思つてゐると、其内誰か男が恐ろしく苦しさうに嘔吐しだした。恐ろしく仰山な吐き方だと思つてゐると段々船の揺れも烈しく、且つ風の音も烈しくなつて、方々から男女の嘔吐する音が聞え出した。よくしやべつてゐた女もやり出した。こんな時は身動きもしないで静かに

してゐるのが何よりと思つてゐたがふと寝返りしたら急にむかづいて到々自分も吐き出した。然し夕食は五時過ぎに食つてゐたので胃の中には何物もある筈なく只苦酸ぱい胃液を吐くばかり、隣の娘も吐く、誰も彼も吐く。島育ちの男女迄が吐くので少々こちらも気強い、呵々。益々風音凄まじく前後左右に揺れるので、からだがあちらへころ／＼、こちらへころ／＼転げる。其内誰かボーイへ『オーイもう五時にもなつてるのにまだ着かないか！』と問ふと、『靄がかゝつてゐるから速力をゆるめてゐる。延着する、！』と答へる。三度五度胃液を吐く、全く閉口頓首。娘へ毛布を譲るどころの段でなし。

八時頃やうやく福江着の汽笛を聞いて蘇生の思ひをする。靴をはかんとして又吐く。甲板上に出でしぶきに頬を打たれて初めて吐気去る。怒涛の中を艀舟六丁舮にて漕ぎつける。乗り移るに甚だ危なし。福江波戸口甚だ狭き為め浪荒く、両三度艀涛口呑まれんとしたがやうやくに事無し。

久保兄及び顔見知りの某氏迎へられる。平野屋に着。主人、主婦、若夫人、娘さん等に挨拶される。進君は依然病臥とか。ひどく苦しんだので久保兄とも積る話はありながら語る元気もなく、久保兄のすゝめに従つて寝る。

九時頃より寝て三時頃に目覺める。やうやく食事を取り久保兄を訪れる。今日は旧大晦日と云ふに風雨の為め町並も淋しく、歳の市立つと云ふ町筋も極めて寂寞として、牛蒡、鰯、鯨の白肉等それも極めて少量を売る里人等を皆で十四人も見受けたのみ。呉服屋、荒物屋、塗物屋等も流石に表戸は開けひろげて店内を飾つてゐるけれど町行く人もなくてさみし。

久保兄の妻君病気と聞きしも頃日癒えたりとて血色もよくなつてゐる。道中で買い溜めて来た静岡のわさび漬、わさび羊かん、浜なつとう、守口大根漬、等を土産にする。大晦日の事とて客が多い。

去る二十日、議会が解散になつた事を今日初めて久保兄より聞く。田中首相の再会演説後直ちに解散したとか。今後此奴は益々フアシズムの本領を発揮して或はムツソリニの第二世となるかも知れぬ。尤も日本の無産階級は伊太利の同志等より反撥性に富んでゐるであらうから、決してそんな和製のムツソリニなんぞに挑梁させて置きはしまいが。何しろ同志等は忙しい事だらう。私自身の此處での仕事には大きな打撃だがやむを得ない。奴等の奸策を曝撃せよ！

五時頃司馬江漢の『西遊日記』を久保兄より借れて皈宿。十一時頃まで読み耽る。

一―二三日（雨後曇り）

折角正月を當にきたが何んの変哲もない。やはり田舎に行つて通常の農家、漁家の中に入り込まねば駄目らしい。殊に島では外面的な行事は殆んど目につかぬ位で内部で殊に精神的な方面に行事があるらしいから一入の事である。

雨なので寫真を撮りに出る事もならず、西遊日記を三時までかゝつて読み切る。編者は江漢の思想的方面に本書の價値を多く見んとしてゐるけれど、編者が見る程に本著はその方面に價値のある者では無い。やはり興味のあるのはその当時の土俗的な方面の紹介、地方人等の生活情態の紹介に第一の興味がある。一体江漢と云ふ男は本著によつて見ても人間的にっして優れた人間では無い。絵にしろ、文章にしろ、思想にしろ、なる程或程度の好さ、うまさはあるが、然しさ程のしろ物では無い。殊に人格的には徒らに奇矯を好む俗人で、老いては老荘を楽しみ云々などゝ云つてるが、此の俗物が到底老子を解する筈が無い。その作品には多少の芸術的価値は認め得るとしても、大体に於て奇矯をてらう一種の売名漢だつたと見れば大したあやまりはあるまい。私が本書に甚だ興味を感じた事は、本書が実に旅行記で、私がこれ迄やつて来た旅行は実に本旅行記以上に難渋なものであつた事を思ひ出させるからであつた。

今度調査すべき大体のプランを立てゝ見る。なか／＼に項目が多く広く、且つ深きを要する事とて困難の程が今から忍ばれる。いゝ助力者を尠くとも五六人得なくては完全は記し難い。

夕食後久保兄を訪れたが留守。町の商會は商売も休まず開いて居るが平常と変つた事もなくて淋しい。兎ある家では三味線の音が聞えて何やらん唄つてゐたが他には変つた事もない。

二―二四、（日〔ママ〕雨）

午後久保兄と共に「しやあ木」を見に行かうとて出かけたが途中で城山神社の神主さんを訪れる事に変更する。「とうしん」を見せて貰ふ。此のとうしんは内地の輪飾りのやうなもので、各室、船、井戸、主要なる器具等　　↓［挿絵］木を真二つに割り更に二つに割ってくくつてある。　裏白　（とうしん）　中づり葉。にはすべて飾つてまつる。神主さんも余り古事には明るくない様子だ。

ふと鬼嶽を見て思ひついた事だが、「おんたけ」と發音してゐる處を見ると、これは内地の「御嶽」が鬼の伝説とくっついて鬼嶽になつたのではないかと考へられる。山麓に五島でも古い五社神社があり、その　を文字では大津と書いてゐるけれど「おん！」と發音する点などを考へ合せてどうもさう思へる。

尚久保兄の話によると岐宿を遠藤博士は「鬼宿」だらうと解して「鬼」にちなんだ説を書いてゐた事があるとの事だがこれも可怪い。「きづき」と云ふ地名が各所にあるが、これも「きづく」が（築く）原名ではないかと思へる。

三―二五・（晴）　（綾子より小包落掌）

好い天気なので郊外散歩へと出かける。近郊篭渕に「びしやもん」祭りがある。その事でそれを見に行く事とする。街道を参詣の老若が参々伍々と詣でてゐるお参詣返りの人々は手々に神札を携へてゐる。何處かさう云ふ習慣のある村の人々だらう、五六人の男が皆一様に此の神札を襟首にさし込んで返ってゐるのがある。

↓［挿絵］木を割ってはさんである。

他の人々は大抵手に持ってゐるけれど。神社へは福江から一里位あって村端れの小さな森の中に小さな社がある。入って見ると極く狭い境内に老幼が集ってゐて燈明をともしてある。飴、みかんなど駄菓子を賣る露天商人が三人も店をひろげてゐた。カメラに入れて皈る。

皈途は大日山へ廻り路をした。四時頃まで所々を寫生して、更に「みんじん堂」へ寄って見たが戸が締ってゐた。然し堂の正面前をふと見ると一個の自然石が祭ってあって、よく見ると、それがよく出来た陽石らしいのを發見した。多分十中の八九迄陽石なのらしい。研究の價値が充分にある。

四―二六、（日雨［ママ］）　（綾子、小林の姉より受信）

絹を張る框を作る。昨日大工に依頼に行つたら正月中には十日頃迄休むと云つたので。今日又道具を借れ［ママ］に行つたら道具も休ませるから貸す事が出来ぬとの事、徹底した休み方だ。信仰と一種の職業政策とが合致してゐて頗る面白い。

夜木村と云ふ骨董屋が、旧記に「鬼嶽」は「御嶽」とあり、「岐宿」は「鬼宿」とあると知らせてくれた。此の骨董屋質の余りよくない男で、五島の土俗考古資料を荒して仕方がない。困まつた者だ。

二十八日に島の小学校長会議があるので、支廳長の了解を得て、研究資料の蒐集を依頼する事が出来ると云ふので、調査項目を作つて見る。プリントにして配布する為め。

五―二七、（雨）（プロ芸第　回常中報告書落掌）

絹を張り、ドーサを引く。

調査項目の前書き（趣旨書様のもの）を書く。尚久保兄の五島合同新聞に載せて貰ふ為めに南漾便りを五六枚書く。

久保兄の親切なのには全く感じ入る。新聞などやつてゐる人にはめつたに見得られぬ。

六―二八、（晴）

福江附近の絵を二三点描きそめて見る、何となく部屋に落着きがなくて心持も腕もしつくりと製作する気分になれない。殆んど悉く失敗になりさうだ。

午後小学校長会議に久保兄と一所に出席する。二時頃だと云ふのにまだ食事してゐないと云ふので大急ぎで要点丈けを述べたがいろ／＼と云ひ落した事があつていかんだつた。でもあとで四五の熱心家らしい人が出て来て有望らしく思つた。

夜久保兄を訪れて雑談。五島博物館を創立する事をすゝめる。

七―二九、(霰)

「鬼の骨焼」を見物に行く予定だつたが五時頃目覚めて見るとひどく雨が降つてゐるので、一應は戸をあけて鬼の骨焼きの炎が二三ケ所にあが「四字判読不能」

青竹の爆破する毎に小供等の「鬼(おん)の骨!」と叫ぶのがよく聞えて来たが、見物に行く事は中止する。中途に起きたので又ぐつすりと寝込んで九時前にやうやく起き出て午前中は絵の具を溶く。午後から昨日の素描に着色してみたがどうもうまく行かない。でも小品二点がどうやらまとまる。五島の風景は縦にはなか／＼入りにくい。

夜骨董屋木下に行つて見る。

五島家正保年代の旧記には「鬼嶽」と「御嶽」とあり「岐宿」は「鬼宿」とある「友住」は「供栖」とある。元禄時代の旧記にも仝上。天保六年岐宿大火(二百五十戸余)の節の旧記には「鬼宿」が「岐宿」と混合されて記入してある。尚郷土誌によると、「巖立神社由緒には宇久尾張之守覚公鬼宿を岐宿と改むとあり」とある。覚公は五島家八代の祖、宇久島から福江島に渡り岐宿に初めて居城を築いた人である。今より約六百数十年前の事である。

八―三〇、(曇)―霰、

夜讀書して遅くなるので兎角朝寝の癖がつき勝ちだ。起きて見ると屋根瓦の凹みに薄つすらと霰が積つてゐたのには驚ろいた。

絹を張り替たり昨日の作品に印を捺したりして午前中を過す。午後からは東京時計の図案を描く、夕方迄に二枚描きあげて封をする。

銭湯の不潔なのには閉口する。一体二千戸もある此の町に銭湯が一戸しか無いと云ふのが無理だ。狭い浴槽

の中で垢をすりおとしたり顔をあらつたりこれでトラホームや皮膚病に罹らなかつたらその方が不思議だ。生の「魚へんに長カ」（きびなご）を初めて食ふ。骨は少し固いがきれいな小魚だ。食パン、バタ等がないので渡島以来二食で、御馳走が多過ぎるのでそれで恰度好い。

木下の倅が表装をやると云ふので、支廳長と視学とへ飾る小幅と小額面とを仕立てるやう依頼する。

九―三一、（日雨[ママ]、雨、霰）

案外寒さが引きつゞく。散歩も寫生にも出かける事が出来ぬので終日引籠つて資料を読み耽る。午後久保兄が見えて話の末本島の村名や地名が地図面の文字のよみ方とは大部分が異なつてゐる事を聞き知る。宿代が無いので久保兄から借りる。

一〇二―一、（晴）

地名調査に関する手簿を作る。

午後山口老人の處へ「しやあ木」の寫真を撮りに行く。大日山の正月祭りとか聞いたので行つて見る。神主が三人ゐて、一人は太鼓、一人は笛を吹き、「いつどん」（巫女の事）一二三才の小娘、頗る田舎の娘々したのが赭黒い顔に白粉を塗り白衣をつけ、頭に紅鹿子の大なる髪飾りを後に結び、白幣を持つて頗る単調、素人臭い神楽につれて右に廻り、左に廻つて所謂舞つてゐる。何んの所作もなく、只歩の運び数を忘れない程度のもの。流石に田舎の神楽だ。

村の入口／＼に幣を挾んだ七五三が張つてあるのを発見する。正月飾りの一つだ。

久保兄の家で、五島名物の一番いか（五島では鯣と云ふは近年の事のよし。皆干したる後迄も「いか」と云ふよし。）「剣先するめの事」を馳走になる。頗る美味のものだ。当地ではするめの皮を剥いで干した種類のものもある。

十一二―二、（曇）

雪もよいひの風の寒い日ではあつたが、久保兄の紹介で藤原兵衛氏を云ふ青年に案内して貰つて大津から五社神社を経て鬼岳へ登り途中寫生して﨑山に下り学校に立寄つて石器などを見、白浜海岸にて藤原氏と共に石器、土器を拾ひ、長手を廻つて夕方皈宅。

大津山の登口にある山麓に湧き出る泉を「いはかは」と俗称し、石にて四角に組んである井戸を「いどかは」と称ぶ由。此の附近の山は皆大小に限らず模範的な休火山にて、鬼嶽、火嶽、箕嶽、臼嶽皆一様に噴火口の北方が崩れてゐる。殊に臼嶽は噴火口の内面に松竹が生へ繁り、外面は一面黄に枯れたる一小草山でまるで人造的になだらかな可愛い感じの山だ。鬼嶽、火嶽、の山麓は実によく開墾されてゐて、見渡した處、麦、蚕室の為めに青い畑が五分の三は占めてゐる。

五社神社から鬼嶽に登つて見ると、鬼嶽の御嶽である事が実によくしつくりと感じられる。尚火嶽は恐らく「日嶽」だらう。箕嶽は形状から来てゐるかも知れないが、或は「みさき」の轉訛かも知れない。

白浜の石器を拾得した處は海岸の砂浜とその続きの人家下の波浪の為めに削られた小崖で此處は表れてゐる處が現在約三十間計りの貝塚である。その中から土器、石器が出る。土器はアイヌのものらしい赤土キラ交りの素焼き、中には外部を赤土で内部を黒土で重ねて焼いてあるものもある。拾つた石斧は実に見事なもので、半磨製のものである。石は此の海岸に露出してゐる。石である。貝の類は頗る雑多で、ニシ、高背貝[ママ]等の小貝迄含まつてゐる。土地の人はまだ此の貝塚が貝塚である事に気づかないでゐる。尚此の貝塚層（海砂が被つてゐるので正確には判りかねるが上積層土は約一尺前後、それから部厚な處は三尺位の貝塚層である。層の容子から推してなか／＼に古いように思へる。）の中から何か獣か鳥かの骨片をも発見した。

夜、藤原、川村の両君及中学生二人話しに来る。十二時頃までも話す。河村君はまだ二十二歳とかの青年なれどなか／＼研究心の旺んな好い青年だ。

十二―二、三、（晴、日雨）[ママ]1

今日は長手に敬老会が開かれると云ふので藤原君と二人で行つて見る。会場の学校に行って見ると老若男女凡そ三四百人集つてゐて、校庭に小屋懸[ママ]がしてあつてこれから村の青年等の余興芝居があると云ふ處だ。酒やら手製の御馳走やらをすゝめられる。最初「左ヱ門」とて青年自作の浪花節が一席あつて、次から「血染の軍旗」とかの芝居が初まる。二幕見たが村芝居の下手なからに面白さがあつて野趣横溢全くかうした僻地の農村ならでば見物の出来ぬものだ。村の人々がゐつらさうにするので遠慮して途中から皈る。

皈途大津に立寄つて、石神を見る。五島氏祖先の囲公が隠れて敵手を避けた故祀るとか傳へるけれど、そんな大きな石でもない、これはやはり小さなメンヒルかも知れない。

大津は全く島の村らしい特長のある農村で、画材に充ちてゐる。

一昨年来た時警察で尾行をつけたとか。若し事実とすれば、今度は尚更注意してゐるだらう。

夜久保兄を訪れてゐると藤原、河村両君も来て十一時過ぎまで俗話に耽る。河村君の手簿を借れる。

十三―四、（晴、日雨）[ママ]

大津の住吉神社の正月祭りとの事だつたが、小雨が降るので、終日絵を描く。鬼岳山頂より見たる久賀遠望と、崎山の鳥瞰図。

原田某と云ふ老辯護士が絵が大変好きなので自分も稽古を初めてゐるから見せて貰ひたいと云つて来る。二時頃から四時過ぎまでもゐて熱心に見て行く。弟子にならうかと云つてゐる。七十の老人を弟子に持つとは面白い。

十四―五、（日雨[ママ]、雨）

1 節分

かう毎日天候が悪くては資料の寫真を撮る事が出来ぬので閉口する。今日も絵を描く。原田老人、木下など来る。原田老人が絵を見て貰ひたいし今夜近所の人を二人招いて一献呈する事になつてゐるから自分は独身でゐるけれど是非同席してくれとたつての懇望なので、では絵を見せて貰ひ行かうと約束す。四時頃になつた處老人の又々迎へに来たので出掛けて行く。行つて見ると大きな二階作りの家にたつた一人でコソ／＼と準備してゐる。すゝめられるまゝに二階に上つて見ると七八点の軸をかけつらねてある。さしたるものもないがさりとて下劣なものもない。尚十点ばかりも取出して見せる。十点で一二寸面白いものもある。茶を飲みながらいろんな雑話やら身の上ばなしやらを聞く。永らく所々の判事やら辯士やらをやつて来た様子だが一寸変つた興味のある老人だ。その内家主だと云ふ林歯科医、金貸しだと云ふ原と云ふ老人が来、料亭花月から料理が来、藝者が来る。ボロ／＼に虫が喰つて綿のはみ出した座布團を芸者にすゝめたが遠慮した。酒が廻つて唄が出だした。原田老人すつかり悦に入つてしきりに取り持つ。皆がよく唄ふので自分も暫く歌つた事もない大島節やら縁かい〔な〕節やらを唄ふ。老人も此の頃研究してゐると云ふ博多節など唄つて終には大にめいていして手を叩いて有頂天になる。薄暗い老男やもめの家の二階で、かうした景を見るとは全く生まれて初めての珍景だ。十時頃辞したが林氏が更に切望するので花月亭へ行つて十二時頃まで又飲む。此の前久保兄と一度来た時に扇面を描いてやつたラヂオとかあだ名の女は自殺したさうだが、他の一二の女等は何変らずゐる。皈りに靴を左右取り違へて履いたが面倒臭いのでそのまゝ宿まではき直さないで皈る。少し飲み過ぎた。

十五―六、（日〔ママ〕雨、雨）

昨夜少し飲み過ぎて宿酔の気味で具合が悪るい　然し八時過ぎには起きて飯もろく／＼食へなかつたが、勇気を鼓して絵を描く。

午後藤原君が来て八幡神社の蹴鞠を見に行かうと誘ふ。直ちに出掛ける。十四五才から二十歳位までの若者が真裸になつて、わざ／〻＼塩水でこねた泥土の上で藁製の鞠を蹴合ひ、果てはその泥土の中で再三取組合

を初める。寫真に撮つたが六時過ぎて薄暗くなつてゐたので多分寫つてはゐまいと思へる。

十六―七、（日雨）[ママ]

かう連日天気が悪るくては全くやり切れぬ。終日絵を描く。どうの思ふように筆がすゝまない。

原田老人が訪れて来る。話すだけ話して仕舞ふとさつさと皈つて行く。

二日入浴しないので、仕事を少し早く仕舞つて銭湯に行き四時過ぎ夕食をしてすまして藤原君を誘つて長手郷の綱引きを見物に行く。恐ろしく風の寒い日で湯上りの事とて一層寒さが身に沁む、鼻汁がかんでも／〃／垂れて閉口する。北海道でも鼻汁の垂れるような事はなかつたが、此の間鬼嶽に登つた日と今日とは奇妙に垂れる。長手に行つて見たら残念ながら恰度引き終つた處で少年等が径七八寸位の大藁縄の散々に切れたのを担いで氏神の境内へ運び入れてゐる處だつた。此處の神社のコマ犬は全然唐獅子型だが一方の方には頭の中央に一角がある。五社神社のコマ犬も同様である。

夜久保兄を訪れる。選挙でいそがしさうだ。時雄君の送つてくれた小包の内に党の新聞や無産者新聞が入つてゐたので十二時頃までも讀み耽る。昼間浴後長手へ行つたのが悪るかつたかしてどうやら風邪を引いたらしく恐ろしく咳嗽[ママ]が出て寝つかれなくて閉口する。

十七―八、（晴、日雨）[ママ]

久しぶりに時々日の光りが射したが、と思ふと直ちに霰様のものがばらづいたりして非常に寒い。ひどくはないがやはり風邪気味だ。頗るからだ具合が悪るくて気が進まぬが絵筆を執る。夕方までに先日来より着手してゐた四点他小品一点を全部仕上げて仕舞つた。六七分位な出来のものばかりだが絹が少ないので兎に角署名する。

昨日綾子から手紙が来た。出産予定日は三月二十九日の由自分の考へでは恐らく二十日前後の事とは思ふが、兎に角それにしても最初の予定より多少の余裕があるので、少しは落着いた気持ちになつた。年が若いだけ

に無邪気な事を書いてゐる。

夜五島の民謡を作つて見る。うまく出来たら長崎の松岡君に作曲を依頼してもよいがと思ふ。

十八―九、(晴)

久しぶりに好晴暖かになつた。框の修繕をして午後は奥浦方面へ散歩に行つて見るつもりで出かけたが路をあやまつて戸楽へ行つたので、石切山へ昇つて見る。福江全景を寫真に撮る。「グミ」が沢山あつてぼつ／〳〵熟しかけてゐる。小供等がそれを採つて食つてゐる。恰度引汐時なので磯には丸木の女房や娘等が青海苔を採りに出てゐる。それも寫真に納めて溶岩の面白さうなのを二つ三つ拾つてポケットに入れる。丸木の墓地下を通ると女が新墓の前にしやがんでしきりに哀号してゐるのを見受けた。まるで支那の泣き女のやうだ。その上で少年等が凧を揚げて「山ん風吹け／／」と唄つてゐた。不潔そのものゝような村の中を通つて皈る。全く此處の部落は一種特別だ。

原田老人の處へ立寄つて見る。二階で絵の稽古でもやつてゐたのか、芥子園画伝が取り散らしてあつた。菓子を貰つて皈る。

皈つて大版の方の寫真が十二枚すんだので取りはずして見ると何んの事だ！最初の覆紙がめくつてない。どうも初めにおかしいと思つたのだが框にはめる時に中へ折込んでわからなかつたので1からめくつたのだがそれにしても気がつかなかつたとは何んたる愚劣なる事か、十二枚をふいにしたのはやむをえぬとして大事な「しやあ木」の寫真や村の小供等の寫真をふいにしたのは何んとも癪にさはつてならない。全く馬鹿／／しいにも程がある。

十九―一〇、(日雨[ママ])

午前中ドーサを引いて午後は日雨[ママ]つてはゐるが大円寺方面へ見物に行く。大円寺、水神など馬鹿に景色がよいやうに聞いてゐたが前を流れる小川が少し深かく渕をなしてゐると云ふ丈けの事景色などゝ云ふ程の處でなし。附近の小丘の上を歩るきめぐつて大津方面へ至り小雨にぬれて皈宿。

二〇―一一、(日雨[ママ]、小雨)

やうやく晴れたかと思つてゐたら今日は又朝から霧雨が降つてゐる。昨夜久保兄から長崎畜産課長の本田氏が来島中の由聞いたので義人の事も聞きたく旅宿に訪ねたが丁度富江に出発した後との事残念。山口の爺さんの處へ廻つて見たら此處も今朝「しやあ木」を外したばかりの處との事之又残念、爺さんが餅を焼いてくれたのでそれを馳走になつて皈宿福江の村端れより海岸方面を眺めたる絵を描く。

夜久保兄の處へ表装した絵小品2点を持つて行く。

〔欄外〕「しやあ木」は十四日又は二十日に取り外すとの事」

2 1―一二、(晴)

晴れてやゝ暖かし。但し午前中は日雨[ママ]つたので終日絵を描く。有川、頓泊の二点を仕上げる。此の頃はぼかしの細い絵を描かぬので仕上げが早い。原田老人が午前中より来て有川の絵を仕上げる迄見て行く。熱心なものだ。

此の頃少しは肥つたやうだ。然しわけもわからぬ下らぬ夢を実によく見る。且つどうしたものか朝がた頻りに寝苦しさを感じる。長手に行つた時の風邪の気味がまだ抜けぬらしく寝着く時の咳きが時々出るのでその加減かも知れぬ。

２２―一三、（雨）

又今日も雨だ、いやになつて仕舞ふ。久保兄と一所に福江藩の学者だつたと云ふ築瀬某と云ふ人の家へその蔵書を見に行く。目ほしいものは皆小使金の為めに賣り払つて仕舞ったらしいがそれでもまだ漢籍ものが三百冊位はある中に二三面白いものもある。然し恐ろしい虫だ。図書館にでも寄附するが一番有効にするゆえんだらうと云ひ置いて皈る。

河村君の手簿を全部今日で寫し取つた。〔ママ〕處へ原田老人が来て誘はれるまゝに行くと牛肉を煮て酒を出す。男やもめに蛆が生くとの諺のやうに、好意は甚だ有難いがきたないので閉口する。

そのきたないのは萬止むを得ぬとして何しろ愉快な老人だ。二人勧誘したから紙半折でよいから一点を五円宛で描いてくれ、もうその二人へそのやうに勉強して貰へる内約束したと云ふ。五円の絵だがらと云つていゝ加減に描けるものではなし少し有難迷惑だが老人の好意を感謝して心よく引きうける。

△冬の海おどろ／＼に打ちあれて
　われ船底の旅をくるしむ
△艀より地に降り立ちて見返りぬ
　海黝々と重き外套。
△椿咲き水仙咲きて島の風
　冬着に軽ろき汗のにじめり
△何百里南の風の海越えて
　今日おん嶽の背にそよぐはも
△まんまろき。おん嶽の背にうづくまり
　海果つる涯てにわれを忘れし
△魚賣る女房の声のうちなごみ
　石垣の街に紅椿咲く

２３―一四、（日雨（ママ）、雨）（綾子から着物を送つて来た。）

しけ模様、時々日が射したりと思ふ瞬時に雨が降つたり気狂ひ天気だ。長手の厄年祝ひのある日なのだが天ユ（ママ）矢（こ）がこんな具合なので、風邪気味も治らないので見合わせる。

昨夜はひどく寝つかれないで苦しんだ。おかけで変な夢を見たりして十一時頃にやうやく目が覚めた。天ユ矢（ママ）も悪るく気もすゝまぬので衣類は着変へて見たが長手へも行かず絵も描かず僅か土俗学上の資料を少しばかり整理してみたゞけであとはぼんやりぽかんとして時を過して仕舞つた。銭湯に行つたらまだ当分しけるだらうと噂し会つてゐた、全く天ユ矢（ママ）悪るいには閉口だ。

２４―一五、（晴）

幸に晴れたので今日は奥浦方面へ見物に行く事にする。まづ絹にドーサを引いて置いて出かける。序手に郵便に立寄つて村上〔吉蔵〕に激励電報を打つて置く。「テキジンヲゲキハセヨ」。

十一時半目的地方面へ向ふ。一里半ばかり先の奥浦までは山中でさしたる景でもなかつたが、奥浦からは入江沿ひでなか／＼に景色がよく、段々先に行く程よくなつて、教会堂を眼下に見下す附近に至つては小景ながら遠望もあつて筆紙に尽し難い明媚の風光。殊に海から直ちに急斜面になつた山腹に点々として散住する切支丹人家と段々畑と島々との交錯した風景は折から椿、梅、橙、棕梠等及び牛などをあんばいして眞に自然と人間生活との融合しきつた風景で個人主義的に云ふならば眞に此の世ながらの完全な理想郷を現出したものである。それ丈けにひどく魅惑に富んでゐるが大人類の動き進みはかうした一種のアナキスチツクな状態では解決し切れぬので此處にも大きな人間生活の悩みか積つてゐるのを痛感させられる。然し何しろ風景

の明媚と此の自給自足的生活とは大きな魅力を持つて自分の生活へ迫つて来た事は事実だ。年齢のかんけいもあらう。その年齢、家庭、東京での生活、殊に将来の自分の生活、そんなものがいろんな問題とこんがらがつてひし／＼とと迫つて来る。

時間が無いのと、附近に宿る丈けの金も持ち合はせてゐなかつたので、惜しい寫生を残して三時半頃後へ引返し、六方と云ふ處から海岸方面への山路を選んで大日山へ至り、六時頃皈宿。

夕食後ずい分疲れてゐたが久保氏を訪れる。

２５―一六、（日雨）〔ママ〕

ひどく寒い風が吹く、時々霰さへまばらに散る。一日絵を描く。昨日見て来た奥浦教会堂のあたりの風景だ。原田老人が一時間ばかり話して行く。まるで日課のようだ。

毎日／＼天ユ矢〔ママ〕が悪るいせいか、それとも身体の具合が何處〔ママ〕悪るいせいでもあるのか、どうも此の頃仕事がおつくうでたまらない。と云つて何もしないでゐる事は一層苦痛でならぬからやつぱり仕事を始める。始めれ者、苦痛も忘れて仕舞ふのだが、何しろ最初と終りとが気が進まぬのでこまる。自分にも理由がわからぬ。

２６―一七、（曇、霰）

相変らず寒くて時々霰が散る。むろん地を染める程ではなく、風の勢につれてはら／＼とこぼれる程度だが。

「島の便り」（三）を書いたので（昨夜寝てから）午前中久保兄の處へ持つて行きついでに寫真屋へ行つてベスト三本の現像を依頼する。

綾子の處から草書が来る。誰か人を頼んだらしいがその女が代筆で綾子の手紙を書き、同時にその女の人も「綾子さんが気の毒だから用事がすんだら早く皈れ云々」と云つて来た。字は達者だが原稿でも書くような

乱暴な字だ。時雄が世話でもしてくれた女かも知れない。
ごごから昨日線描きをした奥浦の絵へ着色を初める。寒くてにかはが凍つて描きつらい。品切れになつた絵具が出来て困まつた。一寸取り寄せすのも隙がかゝるし。
今日から食事の献立も書く事にする。
朝、生卵子一、香物二切、同上漬菜一皿
菜葉の味噌汁。
夕、さしみ（魚名不明）鰯一尾（焼）煮魚（メバルの如き魚。さしみも同魚ならん。）

27―一八、（晴、曇）

少し天ユ矢（マヽ）が快復しかける。然しまだ風が寒く例によつて霰散る。
終日絵筆に親しむ。綾子へ手紙を出す。
朝食、大根の味噌汁。その他昨日同然。
夕食、さしみ鯛。豆腐のカラ、ゴボウとの煮魚。
茶碗蒸し、鶏肉にゴボウ、麩、カンピョウ、卵。

28―一九、（晴）

風寒けれど晴れたり。城山神社の片山氏今日五社神社の神楽ある由知らされる。藤原君を誘つて行く。神楽殿に神職と同席を設けられ見物す。午後一時頃より初まり夕刻五時過ぎまでに二十五番の神楽を見る。順序不同且つ原楽と甚だしく過誤有り且つ削短せし点瞭然として将に滅失せむとする過程にあり、元来は四十八番ある由なれども時間無きと器具なきと既に滅失せるものありて今は完全に執行し能はざる由。今日の二十五番を見るに概して中世時代の作為になるもの多く最初の基本的なる三四のものやゝ単純にして原始的なるものたらんもそれとて極く古式のものにては無きが如し。資料にもと思ひて二三カメラに収む。終つて招待

されるゝまゝに神職月川邸にて宮子の人々と共に馳走に預る。八時過ぎ飯宿藤原君、河村君と共に十二時過ぎまで語る。

時雄、小西君、PAよりの報告書等落手。朝食、大根味噌汁、トロロ汁、香物二切、生卵。夕食、（五社神社月川邸にて）鰯ぬた。酢牡蠣。白さゝげ煮付。汁（ハンペン、里芋、鳥肉、等）。大皿（椎茸、氷コンニャク、ハンペン、羊カン、その他色々）。酒。飯（糸昆布、焼卵を細く切りて散らしたる味附飯）。以上。

29―二〇、（晴）

やうやく天気が快復しさうだ、風やゝ寒いが好晴。今日は一日休息と決める。い云つても午後三時頃まで久保氏の處で談す。いよ／＼今日は選挙だ新聞を見て政府の暴圧に業をにやす。だがいゝうんと圧迫しろ、やがて滅んで行く奴等。今に叩きのめされる日が来るのだ！村上へ「タタカイハコンゴニアリサラニゼンシンセヨロウノウトバンザイ」と打電す。今頃は皆が血の滲んだやうな喉を〔一字判読不能〕て戦話と予想と将来とを語つてゐるだらう。

河村君の家で民謡に使ふ「アヤ竹」や水汲み用の「チヤッポコ」や、屋敷神さんなどを寫真に撮る。仝君と明日久賀島へ同伴見物に行く事と約束す。

朝のうち原田老人がやつて来て處女作を描いたが（風景）辻褄が合はぬので教はりに来たとの事、なる程平面図と寫生とが交混してゐるのでこれでは納りのつかぬ筈。説明を熱心に聞いて行く。七十老人の稚気全く愛すべし。一奇人なり。

朝食。生卵、菜葉里芋切込み味噌汁。漬菜。なまこ酢。

夕食。さしみ（アラと云ふ魚）。同魚吸物。鮑酢（酢はダイ／＼をしぼりたるもの）香物二切。

30―二一、（晴）

午前中久保兄の處で雑談して過す。僕の絵を交換して貰ひたいとの事で、簗瀬某から制度通、東奥紀行の行

程の古本を小品と交換する事にする。

午後二時藤原、河村両君と久賀島に発。動船にて渡る。浜腸（ハマワタ）に上陸し山越しに久賀へ出てまだ時間のあるまゝ北海岸の蕨迄行き更に久賀へ引き返し自分丈け一人旅宿に着く。他二君は知人の家へ行く。蕨村は前に湾の戸の如き小島を控え前面に奈留島を眺めて頗る風光明媚の地。仝村より右方海岸続きの福見を迂廻して皈る事実なりしも時間なく一里の廻り路且つ月夜にもあらざれ者〻里人のすゝめに従ひ元来し路を引返したるは遺憾なりし。

久賀湾は飯篭の如く内廣く、湖水の如き入江にして小島点〃と湾内に有り風波もなけれ者〻磨きたる明鏡の如く澄み渡り、山あり田畑有り地味又砂礫土なれど肥沃にして人家に比し面積も広く全くの楽天境なり。島人等概ね自給自足的生活をなし人情頗る淳厚なりとの事なるが実にさもあるべし。

朝食、大根味噌汁。生卵。香物二種。（漬菜に砂糖をかけらるゝは優遇の意ならんも閉口。）

夕食、（久賀旅館にて、夕刻遅く着宿しなれ者〻食事の準備なく急拵しらへのものなり。）焼卵。鰯だん古〻煮付けに、豆腐、里芋、にんじん等の煮しめ。豆腐汁。香物二切（タクアン漬）。以上すべて醤油なく概して甘口なり。飯は噂の如く久賀盛りにて、朝一食の事故且つ八時頃ともなり居りし事とて甚だ空腹なりしもやうやく二椀にて満腹したり。

夜九時頃より久賀小学校教師の某氏及同村山口君並びに藤原、河村両君の四人来訪さる。山口君はまだ二十一二の好青年、小学校先生は考古学上の好事者、一時近く迄雑談して更す。人魂の話などしきりに出で昔日切支丹の惨殺されたりと云ふ土地にて火の玉の出る話、山口君のも学校の先生も共に実見者。火の玉が急速力を持つて二つに別れ又合し又離れ何回となくくり返した話。又小山を二つに分れて入ちがいに昇り降りした話、海岸線を二つにも三つにも別れて走り廻つた話等いろ／＼あり。夜光虫の一種ならんか。

山口君はアナキストらしきがかなり聡明らしいのでゆつくり話したく思ひしも先生同席なりし為め、僅かに宗教問題に触れしのみ。然し逸してはならぬ好青年機を得るの必要あり。

一二二、（晴）

藤原、河村、山口の三君と共に九時頃出発、深浦へ至り恰度神社の祭典の事とて仝村藤原某氏の家宝たりしを奉納したりと云ふ村正の名刀と称する無名の宝刀外二点及び塩浜神社、（維新前は塩釜神社と称し神仏混交なりしを別れて塩浜と改称せりと）の神体とする元塩を煮る節蓋の重しにしたりと云ふ石三個を見る。村正と称するは〔一字判読不能〕尖長くとがり、反りありて薙刀の細身の如き刀、地金さびと曇りにて明白ならねどやゝ底黒ずみて凄味あり、尺五六寸の小刀なり。それを機に村中の人々各々刀、軸物、焼物など取り集まり来たりて見てくれと云ふ。平家の落人の墓なりと云ふものなどもあり、皆さして変りたるものもなし。

細石流（ザザレ）（久賀島西南〔ママ〕端）に行く都合なりしも深浦に時間を費やし過ぎて直ちに田之浦へと趣く。猪の木の古松は二百歳以上も経たらんか二十間四方位に枝地をする迄に垂れ下りてひろがり居る。仝村より険峻なる峠を越す。標四五百尺もあらんかと思はるゝ山ゝ全山殆ど椿に覆はれさすが椿の名産地に恥ぢざる壮観を示し居る。途中岩屋観音と云ふに立寄り田之浦へ降る。山上より見たる田の浦の景絵に見る天の橋立を小さくしたるが如く、遠景に福江島奥浦、戸岐方面更に鬼嶽、火嶽、箕嶽さへを眺め見渡して盆栽的ながら実に五島名景の一つなり。先日奥浦の景に感嘆したるが、仝所は仝所自身としての風趣には優れたれどこれは遠景を加へての眺めに於て優れたり。田の浦に降り山口君知人の家へ小〔一字判読不能〕、夕飯を馳走になりなり夕刻浜脇に至り汽船に乗りて皈福する。

入浴し此の日記記入中東京より電報来る「ジョジウマレタカネオクレ」とあり。アンザンとも何んとも記入なけれど綾子苦しみはせざりしや否やいさゝか心懸りにはあれどまづ〳〵生れたとすれ者〴〵無事生れしなるべしと思ひ聊か安堵す。予定より一月早きよりなれど或は月の数へ違ひをなし居りしやも知れず。女の子とはいさゝかがつかりなれどこれも詮なし。扨ていよ〳〵いかなる名をつけんかなど流石に人の父となりて心せはしさを感ず。旅先きの事なれど明日は金の工面をすべし。

朝、豆腐味噌汁。生卵。香物二切。（久賀宿）

夕、（田の浦山口君知人宅にて）鰯汁（二尾甚だ塩からし。）一椀。香物二切。

一二三、（晴、風）

時雄君の處より来信、綾子が拡さんの悪口を云つたとかで拡さん絶交綾子は二十日に病院に行つた處そのまゝ産気らしいので入院の由、その節も時雄君の處へは知らせなくともよいと云つたとか、云々。屹度同居してゐた女と調子にのつて悪口云つたのがその女から洩れたのだらう。うるさい事だ。

原田老人に三尾野の絵を即金で買つて貰ふ。

和田久太郎君の縊死の報を新聞で見る。生きるうちに救い出せなかつたのは残念だ。

無産党が合計で九名しか当選しなかつたのは協調のうまく行かなかつた罪だ。しかし無産党の発達は更に今後急テンポを以て進展するだらう。

朝、大根味噌汁、生卵子、香物、

夕、鯛吸物。鰯」焼。ツノヂうであげに酢みそ。漬菜。

一二四、（晴）

昨日変な霞が海岸より降（ママ）き寄せてゐると思つてゐたが新聞によると支那よりの黄沙ださうだ。今日も引き続いてその黄沙が漾つてゐる。

時雄君に凡ては帰京してから話すよし手紙を書く。綾子に「アンシンシタ、タイセツニセヨ○ハトキヲカタヘオクル」と病院宛打電す。

夕刻迄久保兄の處で選挙の新聞を読む。二三の人々が世話をしてくれると云ふので描き溜めた絵を渡す。定山渓雪景の絵十二円のものを十円にまけてくれと云つて来る人がある。東京で個展でもやれば二十円位なら望み人はいくらでもありさうな出来のものを、然しめんどう臭いのでまけて置く。

原田老人が戊辰の戊には中の「丶」が無いのだと知らせに来てくれる。そつと病人があつて困るなら少々金

を用立てゝもよいと云つてくれる。原田老人に取つて儂は何處の馬の骨かも知れぬのだがその親切は全く感謝に堪えない。然し今晩多少金が集まる筈なので、若しそれが集りが悪かつたなら明朝少々御用立を御願ひするかも知れぬと答えて置く。

夜川村君がその兄さんと共に話しにくる。

朝、葉菜みそ汁。生卵。香物。生干鰯。

夕、青海苔と竹輪吸物。するめ。アラ魚と大根の煮付。漬菜。

△千年の夢を見むとやのび／＼と

春日のもとに寝むるおん嶽。

△三百里海山遠し旅にして

われ児を知らず父となりぬる。

△児はかなし親はたかなし旅にして

児は父を見ず父は児を見ず

―二五、（晴）

やうやく天ユ（ママ）矢暖晴続く。今日もまだ黄沙全くは晴れず。春霞の如く漾ふ。

午前中男子校へ展覧会（学校児童の）を見に行く。教授法旧来のまゝにて何等優れたるものを見ず、全く児童のオリヂナルを殺滅し居る。

明日は日曜なれ者〝送金の都合も悪しからんとかと思ひ原田老人の昨日の言に甘えて原田老人を訪れ五十円借れて時雄君宛電送す。綾子へ手紙を書く。女児の名を「アカシ〔ルビ〕」にせんか「瞭（アキラ）」にせんか綾子の意にまかす。時雄君より再信あり子供は十九日午後八時に生れ母子共に達者なりとあり。十九日に産れたものを二十二日迄儂に知らせずに置くとは多分誰も知らずにゐたではあらうがさりとは無責任な人間共の寄り集

りなり。二十日には拡子さんと律子とか云ふ女とが一所に病院へ行つた筈。しかも電報は二十二日に打ち、それも金を遅れが主要点なりとは如何に無智な女の事とは云へ人間的常識のないにはあきれたものなり。子供が産れたとか入院したとかそれ丈聞いても金の事などたとへ書かなくとも送金するべく全努力を振ふ事はきまり切つた事なり。

山口君より久賀の郷土誌の及び旧期類等を送つてくれる。是非共再来せよとの手紙も来る。

朝、生青海苔のみそ汁。生卵。漬菜。山芋酢。

夕、アラ魚吸物、仝上刺身、海藻豆腐あえ。つけ菜。

—二六、(晴)

一昨日の人の希望で絵を借せたが人の集りが悪るかつたとの事で余りいゝ成蹟(ママ)でもないので今日はその内の七八点を持つて福江方面へ行く事にする。正午自動車で大浜迄行き発動船で福江に渡り黒瀬に小西元氏を訪れる。折よく在宿。石器類の見事な蒐集、石簇、石斧、石鋸、曲玉、土器類破片等の寫真を取る。医師山縣氏趣味の人で所蔵の書画類を匣〔一字判読不能〕のまゝ運び見せる。高島北海若輩頃の作品、〔二字判読不明〕の彩色もの二点等〔一字判読不能〕なるもの他に二十点計りあれど見るべき程のものもなし。鬼嶽上より見たる福江久賀方面の絵(額面)所望され郡家氏約のものなれど郡家氏へは更に執筆する事として譲る。此處も不景気の事とてさしたる事もない様子。小西君鶏を賭し魚を求めて歓待せらる。夜岡同君の處手狭且つ他に旅宿もあらざればとて同氏の令兄の許へ案内せらる。十二時迄本村の経済状態、家産を兄弟等へやゝ平等に分配する習慣等を聞き寝る。

朝、菜みそ汁、生卵、香物二種、

夕、(小西氏のもとにて)鶏、(麩、葱、大根)。さしみ(あら)

おろし大根、かつを塩辛。

—二七、(晴)

黒瀬附近を寫生しつゝ郵便局の高橋清氏に案内されて盈進小学校に至り高橋氏と別れて更に一人寫生しつゝ福江校に至り夕刻黒瀬へ皈り再び小西義弘氏宅へ泊めて貰ふ。福江の大林医師「耶馬溪」の幅を所望さる。福江の山〔一字判読不能〕医師、高橋氏より寫眞二三十枚を借れる。

—二八、(晴)

早速皈福する筈なりしも急に予定を変更して玉ノ浦へ迂回す。発動船にて一昨年〔二字判読不能〕暴風雨中を小娘と共に難渋せし海沿の高峯を右へ眺めつゝ大宝へ渡り、同所より更に発動船にて玉の浦の入江を玉ノ浦へ着、林歯科医の處へ荷物を預け置きて五島自慢の大瀬﨑山上へと登る。此の日天気晴朗、南風そよめきて急峻を登るに上服を脱して汗を拭く。菫あざみなど稀に咲き居る。鶯の声も又ほがらかなり。頂上よりの展望玉の浦の七浦を脚下に見て福江島の高峯連々とし南方は一面の大平洋にて水天一色果しを知らずなる程一寸自慢してよき風光なり。二時間計りも寫生に暮して皈途踏を井持ヶ浦へ選み降りて、同所の由緒古るき教会を見物し、玉の浦へ皈る。中屋と云ふに泊る。夜林歯科医に誘はれて同所の料亭に酒を呼ぶ。よく酒を呑む女居る。余り酒を呑むなと云ひ残して皈宿す。

△たまんなの入江たはゝに春来ると〔二字判読不能〕をはらみてはる真白帆

—二九、(雨)

荒川を経て皈る予定なりしも雨降り出でたれば中須より自動車にて二本楠へ至り同所の郵便局長にして美校へ在学したりしと云ふ福井氏にに会ひ、小談の後滞留をすゝめられたるも再来を約し皈福。

—三月一日、(日雨〔ママ〕)

直ちに大瀬﨑の製作にかゝる。

―二日、（日雨）〔ママ〕

一日製作に耽る。福江港の絵もかく。

―三日（晴）

全島の医師会あれば作品を陳列して見よとの事にて支廳の二階へ陳列一日をつぶす。夕刻奥浦教会の出口氏を久保氏と訪ねしに先日描きたる奥浦教会附近の絵甚だ気に入りたりとて速時に料金を支拂ひくれる。河村包未君上京。

―四日（日雨）〔ママ〕

絹を張り、日刊五島の為めに「芸術教育に関する一考察」を書く。

―五日（晴）

ドーサを引き居りし處に原田老人来たり奥浦の小幅を例の〔二字判読不能〕者の處へ持ち〔一字判読不能〕りしが、

又直ちに引き返し来り代金を貰ひたれ者〃とて置いて行く。老いて無邪気、キテフメン、親切、それでゐてなか／＼に考へも深く、学者でもあり、一種の奇人的人格者なり。有難き人なり。

午後藤原君と碁を打ちて一日ゆつたりした気持ちになる。

時雄君より来信。拡子さんのキゲンもどうやら柔らいだようだ。子供は「泰子」と綾子の希望で名命〔ママ〕したとの事、それもよからう。

―六日。（晴）

今月中には皈京したいので仕事も急がねばならぬ。午前中仕事をしてゐたら原田老人が来たので兼ねての約束もあり好天気でもあるので老人と共に寫生に出かけ波止場附近、丸木附近を廻つて一時頃老人と別れ皈宅して描いてゐたら老人再び菓子を携え腹が空いたらうから食へとすゝめてくれる。尚波止先で寫生してゐる時の事、土堤下に降りたが風が吹いて案外寒かつたが私の薄着なのに気のついてゐた老人は自分が風上に廻つて寒いから少しでも垣にならうと自分が老人だことに気もつかぬ風でいたはつてくれた。何處まで親切な老人だことよ！

夜渡辺と云ふ女学校の先生の處へローケツ染をやりに行く。

―七日（晴）

一日絵を描く。原田老人例の通りやつて来て〔一字判読不能〕楽の絵を持つて行く。

晴れたれど風寒し。

此の頃過労の為めか気分がすぐれない。毎日二食だが栄養は充分な筈なのに肥りもしない。

梅は盛りを過ぎた。ひがん桜の満開せるを見る。

久賀の山口君へ郷土誌その他旧期類を返送す。

―八日（雨）

暫らく晴が続いたので今日は雨になつた。風もあつて寒くはあるがさすがに桜の蕾のふくらむ頃メリヤスシヤツを着る程でもない。

一日絵をかく。原田老人昨日持つて行つた絵の代金を早速届けてくれる綾子も大方退院しなければなるまいから送金しようと此の間から思つてゐるのだが寫眞の代金引換も取らねばならず明日は約束の絵が二三枚出来上るので明日まで兎に角延ばす事にする。

毎日／＼昼夜兼行で懸命に働いても何分絵がひどく安いのでなか／＼に追っつかぬ。安い絵だからと云つ

ていゝ加減に描きなぐられるものではなし、おまけにこれでも尚且つ高いやうな事をを云つたり希望者も少ないのだからまつたくやり切れぬ。しかしとに角勇敢に乗り切つて行くつもりだ。

夜宿の主人と囲碁、左程相違のある腕とは思へぬが何分終日の労務に疲れ切つえゐる事とて到底三番〔二字判読不能〕りで三目迄置かせられた。

一九日（雨）

午前中揮毫。依頼されてゐた小品三点を仕上げたので久保兄の處へ持つて行く。山口某と云ふ資産家が田ノ浦の絵を描いて貰ひたいとか云つてゐたと云ふので久保兄と共に〔一字判読不能〕幅を見がてら訪れる。南州の立派な全紙物を持つてゐる外絵の方にはさしたるものもない。

足助兄と貞子さんから手紙が来る。足助兄はひどい神経衰弱だつたとの事全く兄に商売させて置くのは無理だ。貞子さんは叢文閣気付けに久し振りに通信して来たが何んとかの雑誌を探がしてくれと云ふのでこれまでつい虫の居處が悪るかつたから御無沙汰してゐた云々とあるが用事のある時丈け虫の居處のよくなるとは便宜に出来た虫だ。気の毒だと思へばこそいろ／＼親切に悪口も云つてやるのだが、総体にあそこの人々は皆強情でおもいあがつた性分だ、自省心が足りない。直情的な處は長所でもあるが。

綾子に電信カワセで送金す。月末に皈京しても一ケ月以上経つのだから子供も随分可愛くなつてゐる事だらう。うまく育てゝ居ればよいが。

一十日（晴風）

昨日玉ノ浦の小学校から依頼の資料なるものが支廳へ届いたが、罫紙二三枚に一二行宛ほんの責任のがれに報告して来たもので人を馬鹿にし切つたものだ、馬鹿にしてのでなくてこちらの趣旨がのみ込めなかつたものとすればその頭脳の低劣さ加減たら計り難いものだ。何しろ誠意のない点だけは充分に図られる。まさかこんな程度にどこの学校もがあるわけでもあるまいが、心細い次第だ。

終日絵を描く、風がひどく寒い、霰さへ散らばる。新聞によると東京は雪のようだ。

時雄君から綾子が六日に退院した由、何しろ早く皈れと云つて来る。早く皈りたいは山々ながら資料の方にちつともかゝつてゐないのだから今皈つては元も子もなくなる道理だ。しかし一層全力を挙げて仕事を進めよう。黒瀬の高橋局長から金の都合が悪るいから絵の注文を一時取り消したいような事を云つて来る。〔一字判読不能〕句なんて読む人のようでもない。既に着手してゐるので金は何日でもよいと云つてやる。

原田老人、久保兄等来訪。原田老人の来訪は老人に取つては一つの日課になつてゐるようだ。幼稚ながら然し独創による芸術論を一時間計り闘はして行く。いくら書いても愉快な老人だ。これで曽つては永い間判事で辯護士なんだから一入だ。

十一日（雨、霰）

昨日よりはもつと寒く相変らず霰が屋根を打つ。終日絵を描く。障子が破れたらいびつになつてすきまが出来てゐたり、おまけに西向の部屋の事とて寒さに気が散つて火鉢に寄り勝ちで予定の通り仕事がはかどらぬ。午後女児校長峯氏来訪。有川（氏の郷里）附近の絵で女児校を取り入れた絵とを二点約束する。福江全景が完成したので久保兄の處へ持つて行く夜十一時頃までも話して皈る。

十二日（曇、霰）

依然天ユ矢が快復しない。こんな寒さは五島には珍らしいさうだ。

相変らず絵を描くかう毎日／＼描いてゐても一向に仕事の方が埒があかぬので閉口だが兎に角一応見通しのつくまでは仕方がない。絹も品切れのものが出来だしたし十五六日頃には注文の絵も描き終へて仕舞へる予定だからその内資料の方も支廳へ蒐まつて来るだらうからそれから先きを資料の方へ全力を挙げる事にしよう。

午後久しぶりに床屋に行つて入浴。此處の湯屋は湯屋自身がきたない上に入浴する人間もきたないので殊に皮膚病患者やら所謂デンヤウ患者やらいろんな人が遠慮なく入つておまけに湯の中ゴシ／〻＼ゴシ／〻＼洗ふのだからたまらない。五島では二三虱と云ふさうで虱の期節ではあるさうだが、銭湯て貰つて皈つた虱がいくら取つても／＼あとから／＼生じて取り尽せないこれにも閉口。

毎夜就寝時間の具合が悪るくて十二時を過ぎなくては、昨夜の如きは二時頃までも寝むれなくてこれにもすつかり降参してゐる。過労なのと、家の事が気掛りなのとが大原因だらうがも一つは事によると、此處の水がよくないのかも知れぬ。ひどく塩分があるばかりではなく、いくらか白濁の気味がある。加ふるによく茶を呑むから一層水がたゝつてゐるのかも知れぬ。

一十三日（晴）

やうやく晴れたがまだ寒い。

一日絵を描く。

時雄君からハカキが届く。綾子が脚気で母乳を飲ませられぬと、誠に困まつたもの、どうも気にかゝつてならなかつた。明日は久保兄と相談して出来丈け早く資料をまとめて引上げる事にしよう。

一十四日（晴）

快晴やゝ暖かし、昨夜も二時頃まで眠られないで苦しむ。おまけに不愉快な夢を見る。そんな加減か今朝から気色が甚だよろしくない、風邪の気味もある。田ノ浦の大作もそんな具合なので甚だ出来がよろしくない。捨てゝ仕舞ふかとも思ふがまづ／＼我慢して描く、毎日の様に三時になると入浴に行く、風邪気ではあり湯がぬるいのでいつまでも／＼浸つてゐて扨て流さうと思つて岡湯（ママ）をくみかけると湯にひどく酔つてるなと思つた瞬間と同時に気が遠くなり、次の瞬間には流場の石の上に起き上りかけてゐる自分だ事に気がついた。卒倒したらしい。岡湯の桶を探がしたがありはしない、無い筈だくみかけた拍子に倒れたのだから。同浴し

てゐた連中が驚ろいて起き上った私に怪我はなかつたかと尋ねる。倒れると直ちに起き上つたので皆もまだ起しに浴槽から出て来る遑がなかつたのだ。頭と右腕を打つたらしく少し痛いようだが幸いに大した事はないらしい。一時気はついたが又々気が遠くなりさうなので石階に腰かけて動かないでゐる。扨て暫くして大丈夫らしいのでさつさと身体を拭いて皈宿、激衝(マヽ)に疲れたのか気分が悪るいので一二時間ばかり横になる。しかし綾子が病気の事やら一日も早く皈り得るようにしなけれ者、ならぬ事を思ふと寝てなんか居れぬので勇気を鼓して起き上つて絵を描く。どうも右頭耳上と右肘とが痛いようなのでさぐつて見ると頭には大きな〔にくづきに留のリュウ〕が出来、右肘は紫色に腫れ上つてゐる。やっぱり倒れた拍子に石階にぶっつけたのだ。何しろ今日は大変悪るい日だ。

夜久保兄の處へ行つてアスピリンとカルモチンを貰つて皈る。

一十五、(晴)

女児校を絵に描いて貰へまいかとの事で、五島子爵邸の城壁に登つて見たけれど到底絵になるような学校ではないので断念して皈る。

綾子へ二十五ヒコロカエルソレマデヒトヲタノメと打電す。

綾子より来信、小供の具合が悪るいので大分困まつてゐるらしい、速時にも皈りたいが前後の事を考へるさうもならぬ。兎に角大急に仕事の目鼻をつけよう。絵も出来得べくんば明日中に切上げたいものだ。幸いに昨日の病気もさしたる事もないようなので午後は絵を描き、新聞への原稿を書きなか／＼にいそがしい。

私にはカルモチンも仲々に利目が薄い、今ももう一時間も前に飲んだのだが一向に睡気がさゝぬ。中毒性に身体が強からだらう。酒にも酔はぬのだから。

一十六、(晴)

朝五島民友新聞社の田尾氏来訪岐宿へ同行しないかとの事なので急に支度して正午頃同氏及岐宿前村氏の息

貞方権兵衛氏と三名にて出発大曲峠を越えて同村へ至り貞方氏宅へすゝめらるゝ侭に宿泊。同氏は一家を挙げてブラジルへ移住計画との事にて昌雄兄の話などをする。

一十七、（晴）

午前中より同村の金福寺、アマ﨑等の貝塚研究に昨日の三名にて出掛け〔二字判読不能〕同村及その附近は一体の大貝塚層にて貝は主として牡蠣それにニナ、ニシなど交り居る。アマ﨑にては麦畑中に黒曜石散乱し居り石簇十個許りを拾ふ。他の人宮小島附近にて打製の石斧三個を拾いとゞ呉れる。午後は城岳に上り水の浦を眺望す。三四重にも重なれる入江眼下に交錯し、島あり村あり左方山上遥かに嵯峨島を見晴らし、中央大海中に姫島を點晴し、右方煙霞中に宇久島諸島（ママ）を望み得て実に美景なり五島の風景中、男性的なる点にては大瀬﨑「埼」優れ、女性的なる点に於ては本岐宿水の浦の景を以つて最勝景となすべきか？但し奈留島、月の島、若松水道を更に展望せざれは俄かには決め難し。夜バケモノ話、その他いろ／＼の資料に関する話を聞く。

一十八、（晴）

午前中村内の見残したる旧所、小学校長等を訪れ午後貞方家を辞す、田尾君と二人にて唐船ノ浦、ト〔一字判読不能〕ノ首、戸岐、堂崎を経て夕刻皈福、靴に食はれ小指に豆を出す。入江／＼の行き詰りたる所風波も立たず、うるさき俗世とも断絶して折からの春日に睡り浸り居れるさまうたゝ隠遁の念をそゝる事しきりなり。前面に波無き海あり、後山に日溜る田畑あり此世ながらの楽天郷なり。

一十九、（晴）

連日の好天ユ矢（ママ）、梅去りて桜の季となる。麦も目に見えて稈伸びたり。

女学校の卒業式にて生徒の製作を見に行く。場中一点の特性あるものを見ず。猿の人真似いたずらに小器用なるのみ。お土産に紀念菓子を貰つて皈宿。午後峯女児校長来訪似顔を二枚描きしも終に不出来にて渡さず。

女学校にて先日奥浦堂崎の絵を買つてくれた出口宣教師に會ふ。日刊五島に僕の書いた「芸術教育に関する一考察」を熟読して世辞でも何んでもなく五島で最初の立派な論説であり眞実そのものに接したと思つた云々と激賞してくれた。

原田老人、藤原兵衛君、田尾君等来訪。

一二〇、　（晴）

連日の好晴にシヤツを脱ぎ羽織を脱ぐ食膳に蕗のぼる。

先日来の田ノ浦の景二枚をやうやく完成これで絵の方は一先づ切りあげる事にする。渡島以来二十数点の製作概ね意に満たざりしかど自ら技術の上に多少の得る處はありたり、久保兄の為めの画帖「ちかしま画讃」十六題六首集は〔一字判読不能〕具合甚だよろしく心のび／、＼としてこれのみ本島に於ての製作として自ら許し得べし。

△春深かみ六十日の旅を寝て別れかなしき人の多かり

一二一、（晴）

久保、藤原両氏と共に大浜へ調査に行く。〔三字判読不能〕の海岸貝塚層は果して貝塚と称してよろしきや恐らく自然の供（ママ）積層ならむと思はるれど土器類獣骨人骨、村寄りの方よりは石器類は出土す。土器破片及獣〔カ〕牙等を採集して夕方皈る。

一二二、（晴）

五社神社附近の資料蒐集に出かける。石に結ばれた信仰のいろ／＼を見る。

原田老人から借金返済についての置手紙があった。でなくとも最早や滞島いくばくもないので早く返却しなくてはならぬが金の集りが悪るいので困まる。

一二三、（晴）

「五島遊記」をひとつの区切りとして橋浦泰雄はしばらく、日記を付けない時期を過ごした。無論これはプロレタリア文化運動に深く関わったことから、日記の押収がそのまま同志の検挙に繋がるという運動従事者の鉄則を守ったことが大きい。六年の空白期間を経て橋浦は「1934」と銘打たれた日記を付け始める。対象となるのは、これも柳田国男が大正六年より継続的に指導してきた長野県東筑摩郡の郡誌編纂に関わる郷土史家との交流である。柳田の意を受けて足繁くこの地を訪れていた橋浦は、編纂事業の中でも画家としての技量を発揮できる項目として、郡内に散在する道祖神の記録に腐心していた。一九三一年には自身としては初めての単著となる『東筑摩郡道神図絵』が郷土研究社から刊行され、この地の郷土史家との結び付きはさらに深まっていた。

橋浦とこの地を結びつける媒介を果たしたのが、談話会「話をきく会」の存在である。外から東筑摩を訪れた知識人をもてなしつつ、民族談義に花を咲かせるこの会合は、柳田をはじめ、折口信夫、伊波普猷など、多彩な人士を招き、その該博な知識に触れることで、地元郷土研究を活性化させる機能を持った。橋浦もまた、一九二九年以来同会の常連となり、松本において同会の知己の援助によって数回絵画頒布会を開き、成功させていた。日記に登場する主要な郷土史家はほとんどが「話をきく会」のメンバーである。

あくまで表面的に見た場合、日記の再開とは公然と知己の名前を記すことが可能となったという意味で、橋浦が運動から離脱したことを示している。同年一月に橋浦が所属していた日本プロレタリア美術家同盟が解散決議を行っていることからみても、これは妥当な線といえる。しかし、日記中には一九三四年当時橋浦が中心的な担い手となっていた城西消費組合に向けて篤農家から茸を購入・出荷する記述があるなど、完全に運動から撤退していなかったことをうかがわせる。東筑摩郡を中心とする郷土史家が当時既に消費組合が当局によって監視対象になっていたという認識を持っていたかどうか、それを示す直接の資料は見当たらない。しかし書簡の部で見る通り、一九三三年三月一四日付で「話をきく会」の中心的な存在だった胡桃澤勘内は橋浦に宛てて、同年二月に長野県で起こった「教員赤化事件」に触れ、「ご報告申上げたく存じて居りました点は東筑摩及松本市だけが此度の事件の絶対無風地帯であつたことであります。諏訪と上伊那に行つて働いて居た連中には東筑摩出身者が先鋒であつたにもかゝはらずこちらには全く一人の被召還者も（青年にはあります、教員には無いのです）出さなかつたのはどの郡にもどの市にもあつた中に不思議とされて居ります」と事件の概況を報告し、「柳田先生一折口氏によつて尚古的に又古典的になつて居るところへ其紹介によつて大兄が其方面の実行運動をされた形になつて居りますので此地方の教育界といふものは一つの訓練を経て居り極

右傾にもならぬ代り又極左傾にもならず　しかもしつかりとした本筋を意識しつゝ歩いて居るものがあるのでせう」と、民俗学・郷土研究を通して時局に左右されない教育上の素地が確固としてあることを記している。

少なくとも胡桃澤と橋浦の間には民俗学者としてゆるぎない信頼関係が構築されており、左翼弾圧事件が起こる度に胡桃澤が橋浦の安否を気遣うという配置が垣間見える。両者の関係がここまで細やかだった最大の理由は、まさに五島における久保との関係に見られる、政治と民俗を切り離し、あくまで後者の側に立って物事を考えるという姿勢である。その視座に立つ限り、人物への評価もおのずから生活者としての視座から発せられる堅実なものとなる。胡桃澤と橋浦の交流は一九二八年から四〇年の胡桃澤の死去まで続くが、書簡から見る限り、両者の交遊にはおよそ思想信条に関わる話題がない。それは同地の郷土史家・篤志家の矢ケ崎栄次郎においても同様である。

戦間期から一九三〇年代にかけて東筑摩郡は柳田民俗学が地方において最も組織化された地域といって過言ではない。そしてそのことを可能たらしめたのは、少数ながら社会主義思想、戦時下の翼賛運動のいずれにも偏することのない郷土史家が同じく政治と民俗を峻別する橋浦のような外側からの研究者を迎えるという構造があったことが指摘できるのである。

なお、本文を記すにあたって、表紙に付された言葉をそのまま反映するなら、「１９３４」とするのが正しいが、ここでは便宜的に「１９３４日記」とした。

〔表紙〕

實用自由日記

1934―（1月1日　5月29日）

1937―6月4日

1939―9月

1964・6・22日

1974・3・24〜句誌

橋浦泰雄

〔裏表紙〕

一九三四年〈自　一月一日　至　五月二十九日

一九三七年〈自　六月四日

實用自由日記

橋浦泰雄

〔本文〕

千九百三十四年（昭和十年〔ママ〕）此の年の住居

高円寺五ノ八五七、

一月一日　晴

今日一日は心身共に全く休養と極めて意の趣くまゝに行動する。

十一時頃皆が一せいに起きて皆と一所に入浴に行く。

一時頃雑煮を喰ひ、年賀状を見、新聞を読んだだけで、あとは小供等と遊び終日何もなさず、何年ぶりかで一日を放心し生きた心地を味ふ。

月三日

夕方笠原君来訪雑談の後碁を打つ。一番手直りで笠原君結局四目置く。

笠原君と入れ違ひに久冨君来訪今度は将棋をさす。十一時頃やめる。

今朝から風邪の気味だつたが碁将棋ですつかり悪化して頭痛激し。熱を計つて見ると三十九度二分、直に就床、頭を冷やす。

一月四日

安アスピリンで利目がなく、朝になつても熱が下らない。

午後から赤志が悪るくなつて之又寝る。

夕方には綾子も悪るく早寝をする。

月五日
依然として下熱せず、咽喉が激しく痛む。ヱキホスで湿布する。
午後泰子の容子がおかしいので熱を計つて見ると之又三十九度ある。之れで全家族四人共枕を並べる。
夕方ヱキホスの利目で咽喉の痛みがいくらか薄らいだので三十八度余の熱はあつたが、誰も食事の世話をする者が無いので仕方なく起き出て御粥を炊き、薬を買つて来る。

月六日　〔鳥の絵〕
咽喉はすつかり好くなつたが尚且下熱せず、且つ胸部が痛むので、今度は胸一面にヱキホスで湿布する。肺炎になりはしないかと案じられる。

月八日
やうやく胸の痛みも薄らぐ、これで肺炎の心配もなくなつたのでほつとする。昨夜激しく発汗したので朝は下熱したが、夕方にはまだ八度発熱。
赤志と綾子がやうやく快方で床を離れる。

一月十日
漸く起床、平熱となつたので入浴に行く。昨年来信州から皈宅した当時は近年になく体重を増して十四〆二百になつてゐたが、量つて見ると、今度の感冒で十三〆四百となり、信州に行かない以前のもとの黙阿弥となる。

月十一日
泰子も離床、これで皆々全快。今度の感冒には全く閉口した。三ケ日がすんだら正月の行事を見旁々松本に行く予定であつたのに、一方経費の工面もつき兼ねたのだが、遂にその機を逸して仕舞つた。

月二十日
郷里の岩本なる岩村亀吉氏へ先日一寸望郷の手紙を出して置いたら長い返信が来た。本年は還暦だとの事氏の此の頃の環境が親しく書かれてある。久し振りに此の旧正月頃皈郷してはどうか、世話をすると親切にすゝめてある。信州行があるのでそれもならず後日を期する旨の返事を出す。

二月一日
皆の風邪もすっかり治つたので、所々から金をかき集めて漸く旅費を調へ夜行で松本へ出発。「道神誌」完稿の為めだ。

二月二日　曇、夜に入りて降雪
早朝松本着、佐野氏を訪ねて荷物を預つて貰ひ、胡桃澤氏を訪ね、矢ケ崎先生の一家感冒にて一家六人臥床との由を聞き、午後和田に見舞旁々訪れる。新村から和田までゴム長靴三足が重くて閉口。訪ねて見ると先生全く御閉口の容子、尤も今日から皆々多少快方との由、但し老婦人大腸カタル並発重病らし。
こんな様子なので御世話をかけるも心ない仕儀、六時過ぎ夕食を馳走になり辞して松本へ皈る。昼間からちら／＼してゐた雪、遂に廉々として本降りとなり二三寸既に積り居る。乗合の自働車が来ぬので遂に島立まで雪路を歩るく。
宿所の事について池上君が相談してくれてあるとの話を胡桃澤氏より聞いたので、眞島善三郎を訪ねる。碁の話が出て十一時まで碁を打ち、世話された浅間の地本家へ行き宿る。

月三日　晴
佐野氏の處へ預けた荷物を運びに松本へ出る。赤羽五郎氏をその自宅に訪れる。兼ねて池上、胡桃澤、有賀の諸君から氏の人となりを聞いてゐたので、用件とては無かつたのだが、佐野氏の近所の事とて序手に訪れたのだ。昼食の馳走になつて辞し、胡桃澤氏を訪れて宿所の報告をなし、佐野氏から荷物を貰って宿へ皈る。

〔上、欄外に樹木の絵〕

今日は節分とて、夜宿の豆撒きの声を聞く。『福は内、福は内、福は内、鬼は外、ごもつとも、こ(ママ)もつとも』と叫ぶ「福は内から鬼は外」までは大声に叫び「ごもつとも」は小声にて云ふ。佐野氏息子の言によれば、最初の「福は内」は二回繰返しの家もあり、又最初「鬼は外」を二回叫び、次に「福は内」を三回叫びそのあとに「ごもつとも」と云ふ家もありとか。此の方が鬼を追ひ出して置いて、そのあとに福の神を招じるのだから正しい唱えだと称する人もある由。又撒豆中には、南京豆、蜜柑等をも交へ撒く家ある由。因みに撒豆は附近の子供等お互ひに袋など携え拾ひ歩く故、大豆のみにては喜ばぬ故との事なり。此の「ごもつとも」と云ふ言葉の意味解し難し。胡桃澤氏宅にて伊藤英一郎氏より聞きし處によるに、北信須坂附近にてもやはり「ごもつとも」と云ふよし。

二月四日　晴　寒むし、屋内の手拭凍る、　各所に通信

「道神誌」の為めの原稿用紙の印刷を依頼。(佐野氏へ)それの出来る間にもと、一日中柳田先生の石神問答を読む。

月五日　曇、時々ちら／＼と雪散りしも積る程に至らず。

午前中に「石神問答」読了。「道神誌」編纂上に大きな指針を得た。然し「我が国には往古(神代頃を徐したものに)生殖についての信仰がない…」との意から道祖神その他淫祠についての信仰を専ら道鏡の影響なりと断案された点などには大きな疑惑がある。ギワクと云ふよりは寧ろ誤謬だと云つてもよいように思ふ。古事記にだつてさうした記述はざらにあるのだから。

午後からは「道神誌」の年表を作る。

月六日　晴

今日はまだ原稿用紙が出来ぬので、一日道神誌の附表を作る。

夕方岡村千秋氏が来訪。山辺の叔父さんとかゞ亡くなられたのでその葬儀に参列の為めとか。子爵渋沢敬三氏の著「祭魚洞雑録」を一冊貰ふ。

岡村さんと一杯やつて夕飯を終つてゐると池上喜作さんが来訪。岡村さんは九時過ぎ帰京の為め出発、あとで池上氏と画談に興ず。現代画家論など、なか／＼な卓見で、相當深奥なその識見はなまなかな大家面をしてゐる奴等に此の一素人の言を聴かしてやりたい程だ。

十時頃飯田の山村君が坂本の湯から今来たと電話をかけて来た。池上氏が皈つてから一寸行つて見る、画料を十円振替と、三円現金で貰ふ。十二時過ぎまで飯田の話を聞いて酒を飲む。少し飲み過ぎた。皈つてすぐ寝る。

二月七日　晴

今朝も大変寒かつた。午前六時頃は零下十七八度になつたさうだ。飲みさした煎茶が凍り、キユウスの蓋が凍りついて取れない。でも此處の家では硝子扉も障子も開け放しだ。然し炬燵にあたつてゐるのでしのぎ得るのであるが、耳や鼻先、外に出してゐる右手などかなり寒いが此の寒中にあけつ放しも存外気持ちのよいもので、此の頃馴れて障子を締める気にもならない。

留守宅から手紙が来る。泰子の通学通知書だ、野方に本籍があるので、寄留がしてないものだから野方の第五に入学せよと云つて来た。綾子も、どうせ移轉するのだからその方へやらうと云つて来たが、野方へ移轉出来るとは限らぬので、杉並第八へ入学出来るよう手続きせよと云つてやる。泰子がいよ／＼学校へ行けるとて大変よろこんでゐるとか、赤志はお父さんがゐないとて淋しがつてゐるとか、赤志も此の頃やうやく分別がつき始めたからさうなんだらう。二人にも手紙を書いてやる。朝のうちインクが凍つて仕様がなかつた。

今日も一日附表の手入れをする。

夕方原稿紙を届けてくれた。

此の頃大抵八時に起きて十二時に寝る。起きた時、寝る前に入浴するだけで其の間はコタツに向つてペンを握

りづめだから運動が不足だ。

二月八日　曇　午後より粉雪散らばるも積るに至らず。綾子に振替を送る。

資料の整理に日を暮らす。資料の整理など、残つてゐるものは庚申、その他の雑神なので、すぐやれると思つてゐたが、なか／＼どうしてまだ／〃＼二日や三日では行着きさうもない。此の三四日コタツにあたつてペンを握りづめだから運動か(ママ)不足なのだらうかなり疲労を感じる。

夕方小学校の小沢寛夫先生来訪民俗談に耽る。

月九日　晴

昨日のつゞきをやる。

午後眞島喜三郎氏来訪雑談後碁を囲む。二勝二敗（常先で）大正四五年頃少し研究した定石をすつかり忘れて仕舞つてゐるので、以前程の力を持ち返す事が仲々困難だ、全く二十年間碁を打たうなんて気持ちをすつかり放擲してゐたのだから。

月十日　晴　今日は久しぶりに暖かだ。屋根の雪、つらゝしきりに溶ける。　矢ケ崎先生、綾子、宮崎杉子さん等へ通信

昨夜二時頃まで起きてゐたので、今日は甚だ寝むい。然し朝寝もさう／＼出来ぬから八時半には起きて仕事にかかる。

余り寝むいので夕食後は仕事をやめて、ブラジルの昌雄兄へ久しぶりに手紙を書く。

月十一日　晴

今日は紀元節とて一日中宴會客があつて騒か(ママ)しい、然し音曲にも馴れてさして耳触りにもならず、且つ仕事

に精心を集中する事が出来るやうになつたので、反つて今日は大いに仕事がはかどつた。
昨日は眞島氏と画會を長野で開催したらどうだらうと話した事だつたが、胡桃澤さんもよからう、雪見がてら長野附近までだつたら同行してもよいとの事眞島氏が正午頃来訪して託さる。では三人で雪見がてら行くとしようか。

二月十二日　晴
長野へ行くとすると矢ケ崎先生の實弟なる賢次さんへ紹介状を貰つて行かなければならぬので、和田の先生の處へ行くべく出て、途中大成堂、胡桃澤さんの處へ寄り二時半頃先生の家へ着六時過ぎまで雑談し、紹介状を貰ひ、それから島立に中島先生を訪ね、更らに大成堂に立寄り、十一時頃皈宿。

月十三日　晴　昌雄兄へ通信。
一昨日書いた昌雄兄への手紙を昨日松本で投函するつもりで一日中持ち廻つて仕舞つたので、今朝は浅間の局まで行つて投函して来る。二三年振りの通信だ。
昨日少々疲れて今日の午前中も身体の調子が悪るく仕事がはかどらなかつた。仕事が渋る時は良い仕事も出来はしないものだ。
〔欄外　農村風景の絵〕
夕方小沢先生が町内を散歩して見ぬかと誘つてくれたので、一所に出かけて見る。
町上の墓地に行つて見る。昔は「だいおん寺」と云ふ寺があつた由。墓地入口に一寸した廣場があつたので地名を聞いて見ると、「生死場（しようしば）」と云ひ、昔は牛馬等の骨を捨てた處の由。「しようし場」としを濁らずに発音してゐるが、恐らく各地にある「しようじ場」「精進場」「雑司場」などとその軌を一にするものであらう？。六地蔵があつたが、年号が享保とか、天保とか違つてゐるものは、欠けたものを補つたのであらうか。
町内にある源泉を見る。至極簡単で井戸様になつてゐたり、埋め込んであつたり或家では床下にあつたり、五

六個所にあるやうだ。「御殿の湯」と云ふのは藩主のものであつたさうで、「お組の湯」と云ふのは士族仲間のもので、これは今でも旧藩士仲間で所有し、仲間

仲間共通の札を作つて置いて、交替に保養に出かけて来るとか、間口四五間位な二階家が建つてゐて、一間毎に番号が三番位まで記入してあつたが、(上通りから露路を五六間下つた奥に)此處へ交替に来るらしい。現在までこんなものが残つてゐるのは珍らしい。

平常気をつけて見もしなかつた事だが、町内にはなか／＼古い建築の家があつて、元寺小屋の師匠をした藩士の家などと云ふものは、白壁作りの頗る均勢のとゝのつた家で、特長のあるものだ、その他格子の作り方百姓家などにも古るい家、様式があつて面白い。殊に百姓家など、入棟作りの家ながら、棟が頗る低く、左右の廂先は六尺に満たないかと思へる程に低くい。中に入つて見ると、徳川末期の農民の生活状態を想像し得るだらう。

二月十四日　曇り時々雪散らばるも積雪に至らず。

小口先生・岩村亀吉氏、城西日消等に通信

五常小学校へ庚申年号問合せ。

十五日までには一切の資料を整理して仕舞ふ予定だつたが、一日矢ケ崎先生の處へ行つて潰したのと、健康上不快な日が二三日続いたので明日中に一切は終わらぬやうだ。然し凡そ主要な資料は片着いたので、少なくとも十五、六と両日かゝれば愈々記述にかゝれるだらう。考へて見ると此の仕事は全く自分のような隙の少ない且つ貧乏人には荷の勝ち過ぎた仕事だつた。通計すると、私の方で今日までに費してゐる日数は五ヶ年間を通じて凡そ一ヶ年間は充分にかゝつてゐる。これに対して教育会の方では予約以上の経費を支出してくれてゐるのだが、而も私がこれに費した総経費の半にも達しないであらう。これを今日までなしとげて来たのは、全く多くの知己友人の間接的な後援によるものであるが、扨てかくして得んとしてゐる成果の中から世人は如何程の収穫を汲み

取つてくれるだらう。全くかうした事業の容易でない事がつく／＼と感じられる。

二月十五日　曇　雪が時々ちらつく。なか／＼に寒い。

今日はかなり仕事とつめてした。早く本文の記述に取りかゝりたいので懸命なのだが、さりとて資料を整理し総体を大観しない事には多少でも役立つやうな編纂は可能でないので、資料の整理は必要だ。単に現存する資料を羅列すると云ふ丈けならわけのない事なのだが、尠なくとも自分のやうな立場にゐるものが、さう無駄に等しいやり方も出来ない。その代り本書によつて、かうした方面の学問は辞めて、歴史的な研究方法への端緒を開く事が出来るであらう。

月十六日　晴

今日は好晴、しかしなか／＼寒気が激しく晝食につけられたおろし大根さへがしみてゐて、まるで辛味のある雪に醤油をかけて食つてるやうな感じだ。

自宅、池上、地主、福永、〔一字判読不能〕貞の諸君から来信。

此の頃朝は八時起床、夜は十二時就寝だが、日中の仕事が根気がいる事と、入浴朝夕二回が或は過ぎるのか、又はコタツがいけないのか、兎に角午後二三時頃になると疲れていけない。

月十七日　晴　今日もよく晴れたが、案外に暖かだつた。

池上、地主、〔一字判読不能〕貞、福永諸君に通信

昨日眞島氏が見えたので資料の整理が少し残つたが今日はそれを大体に終る事が出来た。明日はいよ／＼記述上の具体的なプランを決定、目次を詳しく作る事が出来るだらう。尤も数字の計算が若干残つてはゐるが。

今日は今年の初庚申とかで花火が打上げられてゐる。行つて見ると六七十軒程の露店が町筋から庚申堂のある丘上まで続いてゐて参詣人が四五百人も雑踏（トウ）してゐる。露店の賣物は飴。（赤線の入つた膨らし飴切り口より人の

面の出てゐるものなど、）径五六寸もある豆糖。それから目無ダルマ、ハヂキ猿、まねき猫、熊手、セルロイド製の飾をつけた飾枝。（小ダルマ、小判、風車短冊などを仰山にくつつけたもの、中には宝舟形もある。）最大なるものになると一円位もするらしい。参詣には附近の村の者も来てゐるらしい。

二月十九日　曇、今日も雪ちらつく、寒むし。　下田君へ通信。自宅へも発信。泰子の通学領知書を送る。

昨日は大体に資料の整理も主要なものは完了したので、夜大池蚕雄氏の處を訪ね、久しぶりに面談稿文上の覚書を見て貰ふ。其處へ理学博士の武田久吉が来浅、胡桃澤氏と共に梅の湯に居るから是非来いとの知らせがあつたので、辞して梅の湯に至り初めて武田氏と會談す。

同氏の意見としては当地方の福間三九郎は、福間と云ふのは、上州地方に於けるふくむろ様（道祖神の地方名）、三九郎は「さぎつちよう」の共に轉化ではないかとの説。その轉化のプロセスをも少し詳しく聞かねば何んとも判じ兼ねるが一説では有り得よう。

いよ／＼今日から成文に取りかかる。まづ緒言から取りかかる事が便宜なので、それに着筆した。今日中にはその緒言を書き終る予定だつたが、夜小沢氏を訪ねたので（長野行きの件について）半しか進め得なかつた。然しやうやく皮切りはしたので、あとは大体にこれまでのやうに苦しまなくとも進め得るであらう。

泰子の通学通知書（杉並第八小学校へ）が来たので直ちに返送。は泰子の誕生日なので菓子を小包で送る。〔山の絵〕

月二十日　晴

緒言を終つて總説に取りかかつたが、どうも生硬な記述に陥りさうで筆が進まない。硬柔に捕はれないで必要だと思ふ意のまゝにぐん／〻＼書き進めるのがよいだらうか。と云つて具体的には矢張りむつかしい。長野行きは小澤氏が同伴しようとの事なので、二十四日土曜の午後と決した。

明夜は和田で座談會があるので、そのメモを作る。

二月二十一日　晴

午後和田に行く。

今夜座談會があると云ふのでその手筈をして来た處、その後村の本年度予算をめぐつて問題が発展して壮年會の総會が盛大になりさうで、その総會を早く切り上げてそのまゝ講演會にしようとの話なので、座談會式の話筋では一般性がないので、話の筋を作りかへる。

夜九時半頃迎の人につれられて行つて見ると、三百人程の村の中心たる人々が、會場に（小学校の裁縫室だらう畳敷の室）一杯になつてゐる。此の會合を村民大會として一つの決議（村理事者の作製した予算案が放漫に過ぎるとの）を作つて村理事者につきつけむとしてゐる處だつたが、さうなると問題が政治的になるので會合の公式届出が必要だと云ふので、駐在署の抗議で村民大會とはなし得なかつた。その総會が終つたのが、十時なので、時間がないので、僕の講演も更らに短縮して約一時間話した。題目は「産業組合の自主化」。趣旨は解つて貰へた事とは思ふが、要項も最初の計画通りの時間がなかつたので、ばら／〻／に話したから多少混雑した感を与へた事だらう。

十二時頃矢ケ崎先生宅へ皈つて泊めて貰ふ。

月二十二日　曇

正午頃和田を辞し皈宿。

早速仕事に取りかゝる。

北原阿智之介氏より来信あり。

五常小学校より年号は寛政（庚申の）なりとの回答あり。

夜小沢先生来訪二十四日の雪見行を打合せる。

二月二十三日　曇

昨日までに書いた緒言や総説がどうも気に喰はないので此のまゝ書きつゞける事の困難さを感じるので、こん

な事では仕事が進行する筈がないので、午前中執筆を中止して、その欽陥の原因が何處にあるかゆつくりと考へて見た。

考へて見た結果やうやくその原因が判つた。つまり「道神」と云ふ抽象的なものを、非常に広範囲に解して、より一層抽象的に理解しようとした處に根本的な欽点があつたのだ。さうではなしに、調査表によつて調査した、その現実から入つて行けばよかつたのだ。問題の深所に入つて行くにしても、広範な道神一般の概観を把握せんとするにしてもそれは抽象的な点から入つて行つたのでは問題のあり〔一字判読不能〕を一層不明にするばかりで中心を明快にする事は可能でない。現実から掘り下げて行くべきなのだ。これを明確に理解しないで行つたからどうもあいまいなものになり勝ちであり、始終つまつてゐたのだ。

午後から書き直しに取りかゝる。まづ総説を書き直したが、やうやくすら／＼と行つた。

月二十四日　晴れたり曇つたり。

午後一時過ぎ長野、高田地方へ一泊の予定で、眞島、小澤両氏と共に雪見に出かける。最初高田まで直行し、長野へは明日立寄る事にする。夕方着。途中坂北あたりには一尺位の雪、長野はより一寸少なく、柏原辺には約三尺位。黒姫嶽が雪に包まれて峭立してゐる。妙高は半上部雲に覆はれて見えない。アルプス地帯は山脈が蜒々とつゞき聳えてゐるのだけれど、此のあたりの山は、広い裾野を持つて独立し、見事に聳えてゐる。

国境を越えて田口に行くとやゝ雪が深まり、関山附近は約六尺の雪だ。家々は軒まで埋まつて荒涼たる風景を呈してゐる。　高田には下車して見ると案外に雪が多く、約二百四十セン〔チ〕メートルとの事だ。約八尺だ。札幌の如く街中が廣からず、且つ排雪する事が少なくて、屋根から落ちた雪を路の中央に積んであるのだから積み重ねて高い處などでは二丈にも達するような大角柱となり、まるで町中は切石山の杣路を歩るいてゐるような有様で、一寸寫眞などを見ただけでは想像のつかないやうな景観を呈してゐる。

市川氏を訪ね、十二時過ぎまで竹澤村その他の村々の行事などの話を聞き三人一所に泊めて貰ふ。甚だ温厚な謙遜な人で感心する。

小川未明氏は此の町の出身だとの事。同氏にも久しく會はないが、なる程かうした雪の底で育つた詩人の感じ

は充分に持つてゐる人だ。癇癪持の点は別だが。

二月二十五日　晴　池上君と矢ケ崎先生に雪のスケツチハガキ投函

古志郡旅中に感染した風邪がまだ抜け切らぬ市川氏と、伊澤青年君とに案内されて、雪の高田市中を見物、町の人が盛んに排雪に着手してゐる。此處の「ソリ」は巾一尺位、長四尺位の小形のものだが、それに雪を切石のように二尺巾四尺長一尺五寸厚程度に切つて乗せると、婦人連中がそれを曳いて市中を貫いて流てゐる河に橋上から捨てるのだ。切り出したりソリに乗せたり、橋上で捨てたりするのは幾人かの男子が三四人宛もゐてやるのだが、曳いて行くのは専ら婦人連で、四五十才位から十七八才位までの娘さんに至るまで何十人となく稼ぎに出てゐる。中には老（と云つても四五十才位）夫婦で運んでゐるのもあるしかも矢張り女が曳いて、男が後押しだ。此の雪の排除は市の仕事で、今年は多量の為め、これで二度目の排雪だとか、此處にはこれから三月にかけてまだ／〃＼積るのだが、今年は今からこんなに多いので、先きになつたらどんなに積る事か困つた事だとの事。五六才の少年等までが皆スキーで市中を滑り廻つてゐる。尤も庭園も堀も小溝もその差別なく埋つて、只樹木の先のみが出てゐる状態だからそれが可能なわけだ。

〔欄外〕高田市附近には道祖神が稀有ださうで、専ら「カリタ」様を祀ると云ふ。
尤も「サイ」に神焼き（左義長）の節各個の家々では木製の人形を拵しらへて、それを人に見せぬよう火中するが、その人形を「ドウロク神」と云ふ由。此の人形は男一個の處もあり又男女二個作る處もある由。

「しんらん」の骨を埋めてあるとかの浄興寺と云ふに行つて見る。寺の入口には「トンボ」と云つて、径五六位の丸材を三四間の間合掌に組みそれに簾やこもを当てて大屋根からの落雪を防いでゐる。屋根からの雪がそれになだれてゐて、屋根と地上の雪はつながつて居り、その中に出入口の小さな三角の穴が明いてゐるのみだ。大屋根の上からスキーで滑つた跡があるが、急コー配だからなる程壮快だらう。

正午市川氏等に深かく謝して長野への汽車に乗る。三時過ぎ長野着、早速矢ケ崎氏を訪ねたが、あいにく行き

違ひに諏訪へ所用で行つたとの事なので、画會の打ち合せは出来ないで仕舞つた。仕方がないので、三人で若槻の蚊里田八幡に行つて見る。これは先日武田氏や小澤氏から聞いたり、其處での採集品をも見てゐたものだが、所謂淫祠と云ふ部類の祠で、社殿の下には陽形のものが累々と入れられてゐる。石又は木で、人工によるもの、又は自然に形をなしたもの等、木製のものには真赤に朱で塗つたものもあつた。小なるは長四五寸、径二三寸のものから大なるは長二尺位径六七寸位のものまで、約五六十組はあるかと見た。(暗くて明瞭ではないが)以前はこれが拝殿に供へられてゐたと云ふ。

若槻村から長野までは二里半位もあらうか、六時頃長野へ皈り夕食し、松橋氏と云ふを訪ねたが不在なので、絵を五点預けて置いて松本への七時半の汽車に乗る。松本へ皈着したのが九時五十分。

皈宿して見た處胡桃澤さんの處へ電話せよとの事早速かゝつて見ると、此の間の和田での講演が、うるさい問題になりさうだとの事。つまり村の理事者と壮年會との間に意見の相異が生じてゐるので、村理事者達が、反矢ケ崎熱をあふり、それを攻撃する具に僕まで巻き込まんとし、イロンなデマを飛ばしてゐるとの事。だが僕のあの節の講演はそんな政治的な問題とはかんけいのない産業組合の話であり、且つ協力を目標とした自主自治の精神、並びに行動を力説したもので、殊に当該責任者に不満であるが故に攻撃すると云ふやり方の間違ひ、さうではなく、協力する事を前提とした自主自治こそ大切であると云ふ点を中心としたものだから、そんなデマに乗ぜられるような内容のものではない。その点心配は無用だらうと思ふ。

二月二十六日　好晴、市川氏、中島氏へ通信。

――――――――

綾子より来信。

早朝胡桃澤さんから電話、昨夜の話は問題にはならぬようだから安心せよとの報。眞逆問題になるようなバカな事はないと思つてゐたが安心、中島先生にもそのいきさつを書いて安心して貰ふ為めに出す。市川氏へも〔お礼カ〕の手紙を書く。

百合子がいよ／＼結婚したとの知らせ小林の妹より東京へ来信あり、廻送して来た。僕が皈京したら蟹を送りたいとも書き添へてある。妹へこちらへ来た事を知らせるつもりですつかり忘れてゐた。

総説の第二項にかゝる。終日かゝつて四百字五枚の原稿がやつとなのだから全くやり切れない。最少しなれたらも少しは早くなるだらうか。

月二十七日　晴

今月も将に終らむとしてゐる。今月一日に家を出て今日までに約二十日以上は道神誌にかゝつてゐるわけだが仕事はやうやくその緒についたゞけで、明日中にやつと總説を書きあげる程度だ。何分小説などを書くやうに自分の内部にあるものを書くのではなく、外部にあるものを書くのだから不正確であつては全く價値を失ふのでさう／＼仕事は進行しない。でも端緒についた事は何よりだ。もうあと一ケ月みつちりとかゝれば大丈夫完了するだらう。然し困つた事には、さうして居れる経済的条件が無い事だ。今月初めから無理矢理に家を出て来て、然も今日までその方の手當をする事に一日もかゝれなかつたのだから早速此の月末、（と云つてももう明日だ）には行詰つて仕舞ふ次第だ。まあ今夜考へて見よう。

二月二十八日　晴、矢ケ崎先生へ長野行の報告を書く。

昨夜経済上の問題を考へつゝ寝たら夢にまでくよ／＼とふところの苦しさを見た。兎に角松本の諸君に相談する事と、大澤君の紹介してくれた山崎と云ふ歯科医さんに會つて見る事として午後宿を出かけ、まづ眞崎君に會ふと、宿の方の支拂ひは一切心配するなと云つてくれる。そして長野の松橋氏より家がやかましいので名前は出せぬが実質的には後援するkらとの電話があつたと知らしてくれる。かうした若い人に世話になる事は、―殊に経済上の問題で―甚だ心苦しい事で、隆祐君などに世話になる時も甚だすまなく痛感する事だが、自分が無力であつて見ればかうした苦しい親切にも甘えるより外仕方がない。胡桃澤さんは市會で留守との事で、丸松に一寸寄つて顔なじみの諸君に會ひ、高田の雪の話などをして出る。此處の諸君は皆何日でもなごやかで実に気持ちの良い諸君だ。山崎氏を訪れると患者があつたので再訪を約し辞さんとしたが、まあいゝからあがれとすゝめられ

るまゝに二十分ばかりも邪魔をする。飯田正晴さんと懇意だとかで、同氏から僕の色紙を一枚貰つて持つてゐるとの事。いつか近々仲間と三四人あつめて座談會を持たうとの事。四十前後の年配で、甚だ沈着いた、感じの良い人だ。古臭い言葉だが、渡る世間に鬼はないなんて誰が云ひ出した言葉か、歩るいてゐる内に、だん／＼と明るくなつて皈途本郷の学校に立寄り、小澤先生に會つて岡田伊深所在の碑の事を聞き明日午後同行調査する事を約して皈宿。原稿執筆。

三月一日　曇、晴　夜に入りて雪。
大澤君、あや子にハガキ出ス

岡田伊深問屋原に天正の碑があると報告調査に出てゐるが、欽字が多いので、午後小沢君と同道して実地調査に出かける、途中原村の観音堂に立寄つて見る。宝暦年間作の木彫金色佛だが、金箔などは上等だが芸術的価値は尠ない。つまり普通の佛師が懸命に作つたと云ふ程度のものだ。それよりか堂前の小堂内にある地蔵の彫刻が、さして古くはないが、その稚拙な型が面白いので寫眞に撮る。附近の享保作小地蔵なども稚拙愛すべきものである。

問屋原に行つて土地の人々にいろ／＼尋ねるけれどなか／＼に判らない。刈谷原峠の途中、昔寺があつた跡などをも探つて見たが見あたらない。夕方が近づくので再び探がす事とし、皈途石山で働いてゐた石工等に聞いて見ると、不明ではあるが、尚二三の碑を知らしてくれたので、皈途調べて見ると、その内に目的のものがあつた。然し正に誤調で、経験の無い人が調べたのであらうから仕方がないが、年号のみならず全体的に誤つてゐて、年号も天下とあるを天正と早合点して居り、大乗妙典を大佛如〇(ママ)と読んでゐる。尚ほんとの年号は明和だつた。皈途旧岡田の宿を通つて見る。旧駅の寂しさ侘しさが夕暮れ故に一入感じられる。兎ある家の廂下に藁つとが二つさげてあるので、小沢君が入つて訊ねると、六十位な老婆が出て来て、お茶けの豆と共に煮つける蕪の切干を更らにつとに入れて乾してあるのだとの事。「つとつこ」と云ふと答へて呉れた。

三月二日　晴、下田君より来信。
生坂から慶安の年号の問合せについて、同像には年号や文字のやうなものは見当らぬと答へて来た。どうも当にならぬ調査が多くて困まる。
午後笹賀神戸の秦君と云ふのが矢ケ崎先生の紹介だとて古るい屏風、多分桃山時代のものかと云ふものがあつて賣りたいから見てくれと云つて来た。村の寺にも仁科五郎の守本尊の古仏があるとの事。隙をこしらへて見に行かうと約す。

月三日　晴　下田君と、森岡君に発信、森岡君へは雪割茸の件について。
仕事はなか／＼依然として困難であり遅々として進まないけれど、此の頃やうやく所謂板について来たので、さうむだをしないですむから、兎に角片端しから完成したものにはなつて行く。年号不確なものがあつて総説の一部を完稿する事が出来ないでゐるがそれも二三日中には明確になり次第完稿する事が出来るだらう。それと後廻しにして今日は各説の道祖神にかゝる。
午後四時頃矢ケ崎先生が来訪さる。先日の中島先生の心配の件、中島先生が余り神経質過ぎると笑つて話す。和田では巡査でさへ誠に結構な話だつたと感心してゐたと云ふ事だ。壮年會からだとてお礼を貰ふ、基金もないのに気の毒なので、固辞したが容れられぬので、有難く貰ふ事にする。

月四日　雪　あやこ、〔一字判読不能〕
起きて見ると、実に静かな朝だと思つたが、雪が一寸の余も積つてゐた。粉のやうな北海道の雪のやうな雪がしつきりなしに一日中ちら／＼と降つた。さして積る程にはならなかつたが、高田の方は大変だらう。

三月五日　曇　〔一字判読不能〕、芳川、中川手、上川手、中川各校に問合せ
城西へ茸の発送について。

頃来仕事の見當は定まつてむだに終る事は尠ないのであるが、生憎からたの調子、特に頭の調子が良好でない。運動の不足が第一原因であらうが、それを補ふ為めにもと思つて朝夕二回宛入浴するのだが、それもよろしくないのかも知れない。泰子の入学やら何かと用件がたまつてゐるから此の二十日頃には終りたいのだが、それまでに完稿は覚束ないまでも、大部分だけは終りたい。然し此の頭の調子ではダメだから明日から一時間宛でも運動する事にしよう。

矢ケ崎先生より電話にて、城西へ茸を八百匁送つたとの知らせがあつた。

月六日　晴、曇、

今日は午前中から来訪者があつて遂に夜間まで訪ねて来る人がつゞきいくらも仕事が出来なかつた。十二時過きまで執筆。

先日の秦君が明後七日絵を見に来てくれとの事、次には武井君が久しぶりに見え、夜には赤穂のおやぢさんがいろ／＼と陶器を持つて見せに来た。おやぢさん余程技術は上達したが、さりとて芸術的な価値があるものでもなく、中途半端な程度にしか達してゐないのだから実用一点張りで行けば反つて良いものが出来ようものを、なまなかに煽動するものがあるようだから気の毒な結果になる。さう思つて今日は少しそんな点を正直に話して置いた。東京への土産に少し盃を頼んで置いた。

三月七日　晴　泰子、前島、中村盛〔一字判読不能〕さん、河上茂登氏、中村寅一君等に通信。

昨夜ねむりに入つたのは二時近くだつたが、今朝は宿の女中等が七時過ぎから室外をバタ／＼と仰山に掃除するので目が覚め再び寝つかれぬので八時前に起きて仕舞ふ、午後一寸ねむくなつたがでもひる寝する程でもなく、案外に仕方はハカ取つて、午後中に道祖神の数についての項を書きあげ、午後は建立年代の項を書きあげて仕舞つた。夜は恰度切りがよいので、地図などを見て仕事はやすんだ。

月八日　晴れたり曇つたり、一時雪降る。

笹賀へ絵を見に行く。自働車が迎へに来てくれたので、それに乗り新村の方を迂回して荻原老人を乗せ、和田で矢ケ崎先生をも誘つて行く。家の名は聞き洩したが、三側造りのでつかい家で、中央の広間などは二十一畳敷ある。恰度それが井田の田のように、その中央の一部をなすのだから他は押して知るべしだ。

桃山時代の金屏風、永徳を思はしめる紅白牡丹の絵で、片隻あつたが、大体の調子はなか／＼立派にまとまつてゐるがアウトラインの筆致がどうも達人の筆でない。疑はしい。抱一の春秋花鳥の屏風が一隻ある。縁金、鳥子に彩色した絵だ。これは疑ひもない立派な作品だ。草花、小禽などの坦々たる筆致、流石に花鳥の眞髄を把握した者のみが描き得る技術だ。抱一の作品でこれ程勝れたものにまで出會つた事がない。現代の作家中にこれ程正確な技倆を持つたものがあらうか、一寸見出し得ない。探幽の二幅対テツカイとガマ山人のこつてりとしたものだが、真赤な偽物、明治年代のそれも余り達者な作家のものでもない。かうして地方人をたぶらかしてゐるのだ。他に尚信のものこれは確かだが左程のものでもなくありふれたもの、他にいろ／＼あつたが偽物でなくば眞正なものでも席描的な程度のもの、さしたるものはない。寺の坊さんが秘佛の仁科五郎の持佛と云ふ佛像を持つて来て見せてくれる。座像木彫に金彩色のもの（部分的に）で、その昔渡来のせんだん木を仁科氏が得て作らせたものだとの傳がある。一寸八分前後もあるが、それに蓮台、とその下に岩形、と更らに台座が設けられ、七寸前後の厨子に入つて居る、素木すかし刻の（ママ）の光背があり、顔面初め現はれて（ママ）ゐる肉体部は全部素木で衣類、装飾等が金色である。実に見事な細工で、相當な技術家でなくては作り得ない作品だ。時代は足利の中期か。厨子は多分あとから徳川朝にでもつけたものだらう。

皈途、笹賀、向、廣丘、吉田の道祖神を寫眞にとり、松本へ皈つて泰子の教科書を買ひ、胡桃澤さん、大成堂に立寄つて皈宿。

諏訪の小口先生が来訪された由、留守で気の毒をした。

月九日　晴

今日は一日草稿の浄書をする。道祖神の「所在場所」「数」「建立年代」等の三項を終る。

明日は島内の馬頭観音を寫眞撮り旁々年号を確かめに行つて、午後は伊那の朝日まで行く事にする。都合がよかつたら小口先生の處へも立寄つて来る事にしよう。

月十日　晴　時々雪、

朝食をすましてゐると川上氏から昨日の午後お訪ねするとハガキが来た。先日序手があつたら立寄つてくれと通信してあるので、今更留守にするのも気の毒なので、島内へ行く事を中止して兎に角二時頃待つて見る事としてその間に池上君へ手紙を書くことにする。

一時頃やうやく来た。なか／＼大男で、しつかりと沈着いた好青年だ。農産物の出荷についていろ／＼と話した、話はまだ／＼沢山あつたが、二時二十分の汽車で伊那、朝日に行かねばならぬので仕方なく後日を期して同道宿を出て停車場で別れた、平出出土の石斧の破片と、厚手土器の破片を貰つた。

朝日について中村君を訪ねたがまだ帰つてゐなかつた、茶の間でコタツにあたりながら妻君と話してゐたら先生帰つて来た。夜何とか云ふ青年の先生と、お母さんと中村君夫妻と五人で雑談に更かした。お母さんは途中から近所にお茶に招かれて行つた。中村君とは『ゆひ』についていろ／＼と検討して見た。氏神の問題、氏神と地親の問題、地親と子方又は子分の問題、「ゆひ」との関係。これらについての自分の考察は一應中村君も首肯したようだが、尚然し一層深かく研究し検討して見なくては決定までには行かない。

親分へ対する子分の義務的な労働、又は公賦等を此の地方では「おてんま」と云ふさうだ、二人でいろ／＼その語義を調べて見たが、「おてま」の轉訛ではあるまいかと云ふ事になつた。

三月十一日　晴

午前中尚中村君と話す。色紙を二三枚描く。恒坊（五才）の似顔を描く。昨日の青年の従兄と云ふ人に會ふ。皆素直な良い人達だ。

午後二時辞して岡谷に行き小口惣太郎先生を訪ねる。岡谷は初めての地だ。平凡な農村で、以前から耕地が尠なくて生活が苦しく、冬期などになると、村人等は多く酒屋の杜氏、鍛冶屋、行商人等となつて出稼ぎに出たも

のださうだが、その内それ等出稼人の他郷からの製絲の見習となつて、それを眞似てやり初めたのがもとゝなつて、急速に発展し、此の二十数年程の間に今日三万の人口を有する状態となつたとの事、然し小口先生の意見では、此の土地が製絲について特別有利な条件を備へてゐるのではないので、製絲業は将来回復する時期がある共、それは他の有利な地方に於て回復し、或は発展する事となるので、岡谷のそれ自体は再び昔日の如く回復する事は殆ど絶対的にあるまいとの見透しだ、だから此の現在居住の三万の人口が、ある程度まで他地方へ開散しない以上岡谷は何日までも現在の苦境から救はれる事は出来まい。との意見だ。かなり適切なる自己批判だと思つて聞いた。

五時頃先生に村（岡谷はまだ村制だ）の街を案内されて、「石佛」と称する石神などを見、辞して乗合で塩尻峠を越えて夜八時頃帰宿した。

塩尻峠は思つたよりも整つた景観で、今度は塩尻方面から歩るいて越して見たいと思つた。実に峠らしい峠の風致と、美景とを持つてゐる。

三月十二日　雪、池上隆佑君、あや子、組合、山村

朝から雪が降り出して一日降つてゐた、春の雪とて地上では降り着くと共に消えてはゐたが、樹の梢などは眞白にまつた。昨日天気がよくてほんとに好都合だつたと思つた。

一日仕事に没頭したが、疲れて余り能率はあがらなかつた。

下伊那の市村咸人先生が夕方来訪されて、熊谷家傳記の〔一字判読不能〕の事について相談された。早速引き受ける由お答えした。今夜松本で會合があるとて急いで帰られた。いつもいそがしい先生だ。

池上君への手紙を書きあげた、綾子、組合等にも通信。組合からは入違ひに電報が来た。キノコの注文だ。約七〆目ほしいと。明日は和田へ行つて来ずばなるまい。

三月十三日　晴　飯田より原寿一郎君来信。

キノコ注文に和田へ出かける　早く帰るつもりだつたが矢ケ崎先生と話したり各所に立寄つてゐたら遅くなつ

て仕舞つた。夕方和田から松本まで歩るいて、眞島氏の處へ一寸立寄り皈宿。三里ばかり歩るいて靴に食はれ足が痛くてたまらなかつた。疲れもしたが、二十日頃には是非共皈京したいと思ふので、夜十二時まで原稿にかゝる。

月十四日　曇

今日天気がよかつたら島内へ馬頭観音の寫眞を撮りに行く予定だつたが天気が悪るいので中止して原稿の方へ馬力をかけるつもりで、意気込んでゐた處、笹賀の上条氏が見えて午前中をつぶして仕舞つた。先日見せられた絵を何んとか早く金にしたいとの事だ。旨く行けばよいが。

午後は一生懸命にやつたので大分進行した。然し二十日までにうまく行くかどうか、寫眞やら仕事の打合せやらで三日間は必要なのだから。

月十五日　曇り　城西キノコ件、あや子、芳川、中川手、中川、〔一字判読不能〕、四校へ再び回答を依頼

今日は一日故障がなかつたので、午前十時から午後十時まで、その間に昼食に二十分間位休んだけ(ママ)で、あとはぶつ通しに仕事をつゞけた。それでも半切原稿二十二枚しか書けなかつたので、十時頃入浴して、約二十分間休息し、再び十二時半頃まで書いた。予想通り各説も具体的な問題に入ると記事が多くなつて、若干興味も深くなつて来るようだ。案じた程でもないようだ。但し二十日迄に道祖神だけは完稿したいと思つたがどうやら不可能らしい。

三月十六日　晴、曇

此の間赤穂に注文したものもあり、大野天明後の時代祐と云ふ奥州地方の藩士の絵巻が池上氏の處に預けてあると云ふので、それをも見るべく、島内の寛文の馬頭カン音を実見に出かける。行つて見ると正に寛文のものだが、二体の内一体はその実物が破損したのでその代りに寛文の年号をも傳承して建てたもので、此の方は多分明治年

代のものと見受けた。早速寫眞に取つた。同村町区に八体殿と云ふものがあつて古佛があるとの事で云つて見たけれど阿弥陀像に一体古るいものがあつたけれど美作ではなく、他に二十体近くもあつたが皆ガラクタばかりだつた。赤穂に立寄つて見たが、留守で、妻君が一生懸命働いてゐた。おやぢさん先日は十五日頃までには必らず注文のもの拵しらへて置くと云つてゐたけれど出来てゐなかつた。

池上氏に立寄つて大野と云ふ人の絵を見る。胡桃澤氏も見えて一所に見る。素人画だが、その地方の大浜と云ふ渓谷の港の絵を寫生したもので、皆で十六図の内第五図が抜けてゐた。素直な寫生画で、さして芸術的に價致のあるものではないが、変な画家的嫌味のないのが好感が持てる。八時頃まで雑談夕食を馳走になり皈宿。

宿に皈つて見ると坂本の湯に原君が来てゐたので久しぶりに會ひ十二時まで一杯飲む。

三月十七日　晴　〔一字判読不能〕、芳川より返信あり、あや子来信、

昨夜眠りに入つたのが二時頃、今日は八時前に起きて昨夜借れて来た道祖神の寫眞などを撮り出掛ける。

約束の如く丸松で胡桃澤さん、池上さんに出會ひ、三人して穂高に荻原守衛の遺作と穂高神社の春祭、御奉射祭（オフシヤ）とを見に出掛ける。柏矢町にて危く談に耽つて乗り過さんとし、あはてゝ下車、西澤本衛氏と云ふ胡桃澤氏の雅友、伊藤左千夫の弟子だつた人に迎へられ、同氏宅にて左千夫、節等の遺筆などを見、昼食を馳走になり、碌山館（守衛は碌山と号す）、に至り遺作を見る。子供の〔一字判読不能〕、小トルソオ、裸女、労働者（未完成）老人肖像等はロダン訛りながらリアルな芸術感が〔一字判読不能〕富でまづ良い作家だ。然し昨年誰かゞ朝日でバカに激賞してゐたように、文覚の像は決して優れたものではない。未完成品ではあるが、その内容が頗る観念的で、空疎で、硬直してゐる。一体後に至る程の作品は皆此の傾向を帯びて来てゐる。或る種の評者、特に東洋的云々なんて云ふ連中は、かうした傾向に東京的な、乃至は日本的な味なんてもの、枯淡な俳味的味なんてものを発見しようとして、（実は俳味などゝ云ふものも勝れたものはそんな切つても血の出ぬようなものではない。）むやみに通がつたり、悟味がつたりするのだが、そんな程度のもんは、高の知れた稚拙な味だ。さうした意味で、守衛の作品も後になる程平凡化して、従つて観念化し、内容の無いものとなつてゐる。守衛は恐らくそれを自ら

も感じて悶掻いた事だらう、そして文覚のようなものを作つたのだらう。文覚にはさうした悩みが見える。しかも努力はしても打開すべき目標を把握し得ず、その方法を誤つた彼は矢張りその空虚さ、苦悶を文覚に曝露したにしか過ぎなかつたのだ。彼は最初画家になるつもりだつたし、その為めに洋行もしたのださうだが、ロダンを訪ねて「考える人」を見てから急に彫刻へ鞍替をやつたのださうで、絵も十四点あつた。然し絵の方は彫刻よりもずつとつまらない。葱の花のやうな静物の絵、その兄さんの肖像の二点がやゝ見得る程度のものだ。

辞して穂高神社の御奉射を見る、「オブシヤ」は「御歩射」と書く處もある由。つまり御奉射の内に歩射と騎射とがあるので、此處の御奉射は歩射の方である。午後二時半頃から神事が初まる。土地の総代が胡桃澤さんを見つけて是非共あがれよとすゝめる。で社殿に上つて神事に列る。列るのはよいが、外套を着てゐるわけにも行かぬので、一時間余なか／＼に寒くて閉口した。神主は正副が二人とその他が六名ばり、外に楽器〔一字判読不能〕の者が五六人、片の如く祝言があつて、神撰が捧げられ、それが終つて奉射が開始される。正副の二人の神官が拝殿の階下に左右に並び、最初の一本宛は一本は上手北方の若宮八幡へ、一本は南方松本藩主へと奉射し、次回からの六本宛合計十二本は、正面舞殿へ下げた大的（径約一間）へ向けて射る。的の裏には〔一字判読不能〕と書いてあつて、これは甲乙無しと云ふ意だと云つてゐる。此の射た矢の落ちて来るのを待つてゐて、村氏等が烈しく争ひ取る。射終るとその的をも皆々が打ち擅して争ひ取る。老若を問はず大変な騒ぎである。二三百人もの人々が争つてゐる。四五人の係人があつて、共々にそれをこはして附近へ投げ与へ、近寄れぬ人にやつてるが、それを又奪ひ合ふとて大変な騒ぎだ。この破片はこれを以て養老會の箸をつくり、鬼門除けなどにもするよし。思ふにこれは悪魔除けの射即ち「ヒキ目」の射と、年占の射とが混合したものだらう。甲乙無しと云つてるがこれおは云ふ迄もなく鬼の轉化であらう。

社務所にて雲坪の大画箋全紙位な山水風景を見る、此の頃雲坪は評判ださうだが、さうひどく優れた作品でも又作家（雲坪は）でもない。直入などゝ同級程度の作家だ。只悪趣味的な点がないだけは良い。

暗くなつて松本へ皈着、三人で〔南カ〕小林へ行つて夕食する。尚同家にある蕭白の絵を見る。六曲屏風一隻で、各面一点宛即ち十二枚物だ。「龍虎、狐狸、山水、福禄寿に寿老人、二君子、牛馬」これが各一つ宛で對になるように書いてゐる。恐らく蕭白中年の作で、酔中勢に乗つて力まかせに書きあげたものであらう。すばらしい

出来栄だが、殊に虎、狸、狐、冬景山水、馬、寿老人、等は優れて居る。只夏景山水のみがどうしたものか一点劣つてゐる。これは恐らく日を異にして描いたものであらう。レーニンではないが、俗悪な唯物論よりは、徹底した観念論は乃至、作品は優れてゐると云つてるが、かうした作品に最も適切している言葉だ。かうした作品を見ると、安心と、勇気とを得る。尚かうした作品は決して単なる観念主義からは生れては来ない。例へば、現代の大観等のように。さうではなく、眞にリアルに徹してこそかゝる一見観念的な作品をも創り得るのである。リアルなる実力こそ問題の鍵だ。扨て日本画の今後の行くべき路は何處にあるか!?リアルだ！プロレタリアの見地からの！

三月十八日　晴　あや子、時雄君へ発信

――――――――――――――――――――――――

中川手より来返

今日は久しぶりの好天ユ矢（ママ）になつた。梅李の蕾も余程ふくらんだ。

午前中から来客で夕方少し仕事をしたのみ、中島先生まづ来訪、先生の仕事に対する希望をのべたり、自分の仕事を報告して意見を聞いたりした。先生の注文と見えて大変な御馳走が出た。恐縮。先生と入れ違ひに信濃民報？の吉江君が来訪、「信州芸苑」と云ふ雑誌の表紙を描く事を約束する。僕の作品を賣つてくれるとて半折三点を持つて行つてくれる。さすがに新聞記者だけあつて用事が済むとさつさと皈つて仕舞ふ。

夕方食事を仕舞つて胡桃澤氏の處へ出かけてゐると、昨日蕭白の絵を見た、その持主の〔南カ〕小林から絵の事について話を伺ひたいから来て貰へまいか自働車をさし出すがとの事。恰度出かけてゐるので次の機會にして貰ふ。胡桃澤氏の處へ行つて「七十一番歌會」と云ふ明治二十何年かの出版を見る、原本は土佐光信の絵で、筆者は何人か足利期に出来たもので、それを新井白石が撰して持つてゐたものを更らに某が模寫したもの、それの復刻だ。歌合せとあるが、絵入、当時の俗語で、以つてそれ等の職業家の言葉が入れてあつてつまり百四十二種

の職業の歌解とでも云ふやうなもので、頗る資料として面白いものだ。国の方で嘲弄する事、悪戯的にいぢり廻す事を「ちようさいぼうず」と俗に云つてゐるが、此の本によると、「ちようさい」と云ふのはむしまんぢう（さとうまんぢう、くさまんぢうなど）賣の坊主の事だ。山陰ではえらい方面へと轉訛したものだ。俗語だが不明な文句が実に多い。十一時半頃まで談し（ママ）して皈宿。

中島先生より聞いた話に。諏訪明神の神体は錦の袋に包まれた相當大きい陽石棒だとの事。尚祭りには「社宮司おろし」と云ふのがあつて、諏訪に属する二十何ケ村かには必らず社宮司があり、それ等を悉く祭る事と経絡があるのださうだ。つまり諏訪の原神は社宮司なのだ。それが諏訪族によつて現在のやうに発展したのだらう。尚住吉は祭事にあたつて、伊那から二人、佐久から二人、土地の諏訪から二人の幼児を選出し、それに社殿にて祭事をなさしめ、後馬に乗せて、馬をひどく鞭にてせめ、子供等を落馬せしめて年占をした由、落馬して子等は死んだり怪我をした由。後には此の事各郷より拒絶されて詮方なく神主自らの子供一人をして此の祭りの犠牲としたが、後にはそれもやめて、乞食の子を神主養いて、それをして犠牲に供した由。尚子供の落馬するは、祭終りて神天昇するが故に子供は落馬するなりと云つた由。かうした行事によらなければ安神のできなかつた理由はまだ明らかでないが、随分激しい安心の求め方だ。

三月十九日　晴　池上君より来信。

急に春めいて雪も木立の中、長廂の下から消え去つた。このあんばいでは梅も程なく開くだらう。

昨夜は日記を書いてから更らに原稿を書いて、全く目を開いてゐる事が出来ぬまで続けた。二時半頃すつかり疲れて寝むつた。

今朝はその疲れで寝てゐる最中八時前に急に原君に電話でよび起された。宿を坂本からこちらへ移りたいと云ふのだ。

再び寝ても居れぬので仕事に取りかゝつてゐると、村上君が今朝東京から皈つて来たとて訪ねて来た。露語を習いたいから誰かよい人はないかと云ふ。お昼頃話して行つた。

夕方まで原稿を一生懸命書いたが疲れてゐるのでハカ／〻＼しく進行しない。原君から街から皈つて来たので一所に飯を食ふ。

食事を終つてゐると南小林の主人が来訪、蕭白の絵の事について熱心に聞いて行つた。昨年三万円位で関西の人が買ひたに来たが賣らなかつた、然し尚不安なので、（その眞疑、出来栄など）よく聞ひて置きたいのだと。でかうした方面のカラ繰りをよく話して注意して置いた。

食後原君松本の天神芸者を呼んで又酒を飲んでゐる。遂には芸者とそれを連れて来た料亭の女将とが頻りにも一人呼んで僕も共に遊べとすゝめる。そんな事に興味もないので、さつさと引き取つて十一時から更らに二時迄原稿をつゝけ、遂に道祖神の「形態」についての項約半切百枚の草稿を完了した。すつかり疲れた。

今朝池上君から来信、宿料など心配せぬでもよいから滞在をつゞけて原稿を完了せよと云つて来た。有難くうれしすゝめだが、経済上の事は宿料のみに留まつてゐるのではなく、家計全般に関してゐるのだからさうしたいにもさうは許されぬ次第だ。眞島君からも電話で、二十一日頃来る。池上君とも會つたとの知らせだつた。

矢ケ崎先生からも電話で、四月中旬に長野で展覧会をやるように、賢二さんが引き受けて呉れた、賢二さんの家に泊まればよいから経費はいらぬ。少なくとも三十や五十の金なら引き受けられるとのお知らせだつた。いづれ二十二三日中にはも一度あつてお話しするとして謝した。

三月二十一日　暴風雨　池上君へ発信。

一昨夜から原君が泊つてゐて昨夜も夜遅く皈つて来客の都合で合宿したものだから酒を飲んで愚駄り相手になつてると際限が無いので、日記もつけないで寝て仕舞つた。今朝甲府へ行くとて出て行つたのでやうやくほつとした。もうすつかりアル中になつてゐるようだ。一昨夜話した事をまた昨夜もくど／〻＼と話す。酔つて話す事だから忘れもするだらうが聞く方ではうるさいばかりだ。それでなか／＼生半可な事を臆面もなく喋言る。然しある程度敏感な頭脳を持つてるからこちらが正面から押せば、要領よく外して行く。まあ當世流の小才子と云ふのだらう。

今朝は此の地方として初めて出會ふ暴風雨だつた。四面山で囲まれてゐるからさうひどい風は吹かぬのだが、

今朝はなか／＼ひどかつた。
原稿は予定通りは進行しなかつたが、兎に角一應切りあげて、道祖神の半分過ぎまで第四項の建立年代までを浄書し、第五項の形態約半切百枚、これは草稿のまゝとして置いた。
大成堂にも一寸立寄つて暇乞をして置いた。
昨夜一寸眞島君と會つた。宿料の事は池上君とも會つて相談して置いたから今回の事は自分等にまかせて心配しないで皈つて呉れとの事だつた。全くこんな若い人達に心配やら迷惑やらかけるのは年甲斐もない事だが仕方がない。何日かは酬ひ得るだらうし、又此の仕事を少しでも價値あるものにする事によつて、その一部は酬ひ得るのだとも云へよう。いづれにしろ仕事の上では敢て自分は恥ぢる處はないし、かくも懸命に仕事をしてゐるのに、宿料も拂へず、生計も全然立たないと云ふのは、社會の構成が間違つてゐるからなのではあるが、しかし何せよ、だからと云つてかうした若い人達に迷惑をかけてゆおい理由は成立たないので苦痛である。

三月二十二日　晴
朝起きて顔を洗つてゐると、丸松の柴田君から電話で函館大火の由知らしてくれる。親戚があるやに聞いていたから知らしてくれたのだと。二万戸以上殆ど全市焼けたとの事。公園まで焼けたとの事。図書館の岡田氏の處はどうだつたかと案じられる。
今日はこちらを(浅間)引きあげると昨夜話して置いたので大成堂の若者が荷拵しらへに手傳ひに来てくれる。
午後二時頃宿に暇乞ひす。唐紙全紙「山村初冬の頃」と云ふ風越山の絵と、色紙二枚を茶代代わりに置く。宿からいろ／＼と土産の数を貰ふ。気の毒で辞退したが親切に云つてくれるので有難く貰つて皈る事にする。
本郷の学校に、小沢、大地先生に暇乞す。借れてゐた松本市史をもお返しする。大成堂の文夫君に託して絵を五六点山崎氏へ送る。
和田に行く途中、下波多の桑畑中に建つてゐる慶長廿年の塚石を見に行く、「〔梵字〕本不生海宗大往」と云ふ碑で約二十坪計り円形土塚の上に立つてゐるが、果して墓石名の示すが如き墓であらうか、何等か此の平の湖水傳説或は、穂高傳説などゝ喰ついた傳説のもとに建てられた碑ではないかなどふと想像させられた。

矢ケ崎先生を訪れると、先生は折しも薪割りをして居られた處だつたが、夕方でもあるので、中止して招じられた。夜いろ／＼と談じ更した。

三月二十三日　晴

十時頃、先生と同道して松本へ出る。胡桃澤さんへ寄つて原稿を貰ひ、菊やと云ふへ立寄つて矢ケ崎先生から頼んで貰ふた古るい七夕の人形を貰ひ、山崎歯科医を訪れたが人声がせぬので（二階では治療中だつたが）時間の都合上丸松へ行つて矢ケ崎先生と〔一字判読不能〕會ひ、〔一字判読不能〕の豆腐料理松何んとか云ふへ行く。眞島、赤穂、胡桃澤、矢ケ崎、大成堂、徳田、吉江の諸君と共に晝食をなす。赤穂氏注文の盃を持つて来てくれた。一ケ六銭の割にすると云ふ。少々気の毒だつたがそれで貰ふ。こちらでも金にするわけではないので。豆腐の田楽を十何本かたらふく食つて、酒も一杯やつてそれに紫蘇飯を食つて會費四十銭これで若干のチツプが出てゐるのだと。東京から旅費を拂つて、會を持つて来ても間に會ふだらうと皆々安い事に感心す。此處出て、胡桃澤さんと連行山崎氏に立寄り、絵はそのまゝ預けて置く事に頼んで停車場へ向ふ。前記の諸氏見送つてくれられる。三時二十二分、お別れする。約五十日の旅、仕事は予定の半にしか達し得なかつたが、一先づこれで打切つてあとは自家でやる事にする。只生計上窮迫してゐるので、その方へ当分懸命にならねばならぬから若干延引するだらう。

夜十一時頃皈宅、見ると皆が風邪で寝てゐる。泰子を計つて見ると四十度三分ある。何を飲ませたかと聞くと、行商人の賣薬で、一日に一回飲めばよい薬だと云ふ。全くあきれて話にならぬ馬鹿者だ。バイエルのアスピリンがあるものを、それを飲ませもせぬで、ロクデモない賣薬を飲ませて平気でゐる奴の気持つたらはかり知れぬものだ。早速アスピリンを飲ませたが、どうも様子が変なので、高熱ではありもう遅く二時頃ではあつたが、医師を頼みに行く、處が医師の奴横着して風邪を引いてるとか何んとか来てくれない。癪にさはつて皈つて来て見るとアスピリンの関係か幾分下熱してゐるし、意識もやゝ明瞭になつて来てゐるので、金もない事だから兎に角朝まで医者を見合わせる事にする。然し小便と、下痢とで三十分置き位に起きるので、とう／＼徹夜して仕舞つた。便を検べて見ると血便だ。食事の方では前々日握飯を三つ食つて少し過食の気味だつたと云ふ意外他に毒するよ

うなものは食つてゐないとの事だが、何しろ疫痢になる心配があるので、早速組合でヒマシ油を買ひ、それを飲ませカン腸をかけてやる。二時間位もしてヒマシ油の下痢があつたが、それでやうやく下熱したようで（検温器は赤志がこはして仕舞つたので金も無く買へない。）意識はすつかり平常に復つた。

やうやく安神して百穂遺愛の硯展を見に行く。胡桃澤さんから頃はいのものを買つてくれと依託されてゐたので、やむなく出掛けたので。正午頃だつたので、既にその頃はいなる値段のものは売れてゐたが、残つた内でやゝ地味ではあるが安徽省の歙州硯と云ふを一個買ふ。皈りに一誠社に立寄つて見たが、西村君不在で、明後日来て〔二字判読不能〕につき相談してくれるように話して皈る。

夕方皈つて見ると、泰子大分元気がよいので、おまじりを少しと豆腐を二切ればかりやる。今日は僕の方が寝て綾子が起きて世話をする事とする。博貞君来て泊る。

月二十三日　矢ケ崎、胡桃澤、眞島、大成堂、池上、下田、の諸氏へ発信。山村へも発信。

昨日の豆腐や食事が悪るかつたかして依然血便が続きやゝその血の量が多くなつたようだ。正午頃〔一字判読不能〕岡さんが来て、熊谷医博を紹介してくれる。夕方熊谷医師来り赤痢のやうだとの事だつたが、尚疑点があるから明日一日様子を見ようとの事。赤痢だと聞いて驚いたり、疑念があると聞いて安神したり、親のみの知る気苦労だ。今日は砧や金井君の處を訪ねる予定でゐたが医師を待たねばならぬので中止して、所々へと手紙を書いた。

三月二十六日

昨夜は一夜看病の当番をやつた。一時間から四十分位置きには必らず目をさまして下痢するので殆ど寝つく隙はない。看病する人間でさへもが疲れるのだから病んでる当人はどんなにつらい事だらうか、排セツすべきものも腹中にはないのに、それを大腸の血をしぼつてまで排セツするのだからその苦痛の程が思ひやらるゝ、しつかりと擁いておまるに便をさせてやつてると便通に刺激されていつまでも／＼／＼小量宛の大便をもらしつゝ苦しみながら、仕舞ひにはぐつたりと疲れ切つて青白い顔で抱かれたまゝ寝入つて仕舞ふ。こんなに苦しい姿体をさ

せなくとも寝てゐて通便させる良い器具などもあるのであらうが薬代さえ、医師を迎える金さへない現在だからがまんさせるより外にはない。まつたく金だ、資本主義社会の欽陥だ。かうして助かるべき生命の幾つかゞ日に／＼誤まれる制度の犠牲となつて此の世から消えて行つてるのだ。一方に際限のない無冗な消費がなされるのに！

正午過ぎ熊谷博士来診矢張り赤痢のようだから早く入院させた方がよいだらうとの事。赤痢と決まればむろん一時も早く分離した方が良いので、同意その手続きを取つて貰ふ事にする。

只困まつた事は、金がない事。仕方がないので一誠社に「五島図誌」の印税の前借を二三十円電話で申込んだが主人不在で即答を得られぬので、泉君の處へ行つたが移轉でダメ、万策つきたので金井君の處へ行くつもりにし、不在中病院の方から来ると赤志に困るので、組合に預つて貰ふつもりにし、赤志にその意を含めると、素直に組合で遊んで僕の皈りを待つと云ふ。で綾子には直ちに準備に取りかゝらせ、赤志を連れて組合に行くと、下田君や常務者諸君がゐて大いに同情してくれ、且つ金井君は出張旅行中かも知れぬからとの事で、下田君が十円借してくれる。あり余る金持共は借してくれなくともかうして餘融のない階級人は、より困つた方へと協力の手を伸ばすのだ！観念的な、口頭だけの人道主義、愛なんてものも畢竟どたん場になれば三文の價値もないもの、階級的行動、協力への実践こそが眞個の愛そのものであり、愛と云ふ言葉の別名なのだ。

有難く借れて急いで皈つて入院準備を手傳つてゐると間もなく病院から迎えにやつて来た。泰子は綾子付添いで早速出かけて行く。付近の人々が仰山に出て見る。皈つて見ると、家の中は、二人の衛生員が何處もかしこも消毒で大変だ。やうやくに片着け掃除をし、消費された食器類なども洗つて仕舞ふ。全く下田君から金を借りて間に合ひ大助りをした。でないとすつかり困まつた事だらう。

夕方一誠社から或は訪ねて来るかも知れないので、外出も出来ないので、赤志の風邪も治つたようだから散髪をしてやる。そして五時過ぎ食事を二人ですましてゐると一誠社から来て印税前借を三十円置いてくれた。窮すれば通ずるとか、どうやらこれで泰子も命を取りとめるだらう。然しその代り仕事は又々重さを加へる事となつた。

七時頃赤志と二人で入浴に行く。今日はかなり疲れゐるので今恰度十時だが、早く寝る事としよう。

三月二十七日　柳田先生、池上君へ発信。

赤志を同道して杉並警察に検便用の瓶を貰ひに行き、午後あや子の蒲團を持つて豊多摩病院に行く。昨夜から今日正午頃までに十一回の便だと、約小二時間置きになつたわけだ、血便も尠なくなつて、眞黒な便になつてゐる。熱も八度台だとの事、脈を数へて見ると百十位ある。おも湯も何も飲まぬ由、それが危険だとの事。且つ腹痛を訴へる由。一寸目をさまして怒つたが、また直ぐ寝入つて仕舞つた。何分ひどく疲れて仕舞つて半意識状態だ。のぼせて頬を赤くしてゐるのを見ると下熱したわけでもないから危機を脱したわけでもない。不安だが何んとも詮方もないので一層苦痛だ。

月二十八日　胡桃澤氏へ硯を発信山村書店へ〔一字判読不能〕布を発信

今日は見舞ひに行かぬと云つて置いたけれど、やっ張り心配なので午後から赤志は組合へ預けて置いて、病院に行つて見る。見ると昨夜葡萄糖の注射をやつたとかで、その後は他薬の効果もあつたかして、甚だ良好で、昨夜は便も留まつて熟睡し、体熱も一時は三十六度台に下つたとの事、顔色にも幾分活気が出て来た。おも湯も少しは飲んだ由。血便も留まつた由最早大丈夫だらう。胡桃澤氏へ硯送る。山村へ〔一字判読不能〕布見本送る。

月三十一日　胡桃澤氏、柳田先生、矢ケ崎先生、等より来信
小林の姉、井戸垣（百合子の嫁入先）　矢ケ崎賢次氏へ発信、

昨三十日病院に行つて見た。やうやく昨日から食事もすゝむようになつて今日からはおまじりになつたとの事、大小便なども寝てゐて達するのは気持ちが悪るいとて起きてするようになつたとか。時々は蒲團の上に起きて座つてゐる程度になつた、さすがに手足などすつかり痩せこけて仕舞つたが、小供など快復するのは早やいから急速に治るだらう。変なもので、言葉などまで、すつかり小供つぽく甘まつたれ口調になつて仕舞つた。一昨日原野の天理教信者のお婆さんが、ひどく祈願を篭めて作つた護符の煎じた液だから泰子へ飲ませてくれ、若し泰子が飲まないならあや子が代つて飲んでくれ、非道く祈願がこめてあるから捨てられては甚だ困ると云つて薄茶濁

りの液体を五勺位もサイダ瓶に入れて持つて来てくれた。親切も此處まで嵩じると甚だ迷惑なものだ。ことはるのも気の毒だし、正直に飲ませるわけにも行かず、まづお礼を云つて、飲ませた事にして捨てるのが一番無難だが、たつたこれだけの嘘を言ふのだつて苦しい思ひをするのはこちらなのだから全く有難迷惑な話だ。

泰子の病気で皈京以来やうやく急を要する處へ手紙を書いたのみで他には何一つ仕事らしい仕事もしなかつたが、明日からは多少宛でも仕事をするべく二階を掃除片着けた。

四月九日　晴

泰子その後日にまし快方今日は朝早く退院するとの報が昨夜速達で来たので、今日は消費組合の總会なので、その準備を依頼されてゐたので、それを昨夜は一時過ぎまでもかゝつて責任を果し、朝早く赤志を連れて迎えに病院へと行く。胡桃澤さんから入学祝ひに貰つた服を着せて見ると、少々大きいが大よろこびだ。然しさすがに大病のあととてまだ足がふら／＼して居り、足手などもすつかり芋殻のやうに痩せてゐていた／＼しい。同室の皆々に退院が早いので羨まれながらさて外に出て、病院前の外山が原でロケーションしていゐるのを寄路して見せて、電車に乗つて皈る。

家に着くとさすがにあの足の強かつた児がぐつたりと疲れたので直ぐに寝せる。

十一時頃組合の總会々場である子宝幼稚園に行く。昨年も矢張り四月九日で今年と同年（ママ）だつたが、昨年は總会に出席しようとする處を荏原署の刑事に襲はれて拘引され終に二週間留置され、産組からの定収入を棒に振つて仕舞つたのだつたが、今年は泰子の病気も全快皈宅するのを迎へると云ふ状態だ。

代議組合員の集りが遅くて十二時過ぎてからやうやく開會。新顔の多いのは結構だ。

昨夜の理事會では他に人選がしてあつたのに、突然副議長に選任され、結局議事の大部分の議長を勤める事となつて、すつかり疲れて仕舞つた。

四月二十日

泰子まだ十分恢復そたわけではないが、学校が近くもあり、時間も僅か二時間だけなので、今日から通学させる事にした。よろこんで脊嚢を背負ひ、草履袋を下げて出かけて行つたが、「あゝ疲れた／＼」と云つて皈つて来た。

〃月二十九日

二十四五日頃に長野に個展をやるためでかける予定でその準備もあらかた整つてゐたが、二十六日に僻村研究の會合があり、二十八日には組合の理事會があつて是非共出席せよとの事なので、出発が延び／〃＼になつたが、今朝八時出発。泰子を学校へ出して置いて、あや子と赤志に送られて駅に行く。

中央線はこれで何回通過するか、恐らく十往復二十回前後は通過した事だらうか、此の中部地帯は大変に曇つた日が多くて殊に甲府附近で富士を見た事が一回もない。何日だつたか只裾野らしいものゝ斜面をちらと見た事が一回あつたのみで、何日も期待して注意してゐるのだが見得ない。今日も又さう思つて晝の汽車を選んだのだが矢張り同様どの方向に富士があるのかそれすらも見當がつかぬ。

午後三時頃松本に到着途中下車して胡桃澤、池上、大成堂、眞島の諸兄と地本屋に落合つて今夜は此處に一泊する事にして會食しつゝ今回の日程を相談して貰ふ。

四月三十日

午前十一時頃松本発午後一時頃長野へ到着する。早速矢ケ崎賢次氏を訪れる。そして兎に角一應同氏邸にお世話になつて何かと相談する事にする。

一應個展の日取りは六日七日（日、月）の両日とし、場所は長野電鉄ホールと決め、取敢ず、小池直太郎、荻原喜恵司、小原福治の三先生を訪ねる事にする。最初荻原君を加茂小学校に訪ねたが留守。小池氏を附属に訪ねて酒井先生にも出會ふ。展覧会の事も頼み、長野で「話をきく會」を開催する事も相談して、話の會の方は五日（土）と云ふ事にあらかじめ定めた。小原先生は画の好きな先生で、且つ自分でも描く人ださうだが、電話で聞くと不在との事なので、矢ケ崎氏方へ皈つた。

五月一日　市川、箱山、伊藤、胡桃澤、矢ケ崎等の諸氏に通信

矢ケ崎さんは読売新聞の長野支局長をやつて居り市會議員でもあつて、折から市長選挙をめぐつて疑獄事件が起つてゐて多忙なのだが、今日は僕と一所に會場の見方や、小原先生との相談に出かけてくれる。會場は充分なので、六七と両日を約束す。小原先生に會つて尽力を依頼す。同氏は東筑、島内出身の人のよし。承諾を得。

〃月二日

大成堂より親切に内山紙を沢山送つてくれる。

午前中展覧會の準備をして置いて、午後戸隠見物に行くべく裾花峡の方を廻つて出かける。

裾花峡は日本百景中入選したと云ふが、奥裾花峡はいざ知らず、小鍋附近の景観はまんざらではないが僅々十丁位の間のものだから小さくて百景中に入選する価値を有するものではない。

柵（しからみ）の下方の新らしい戸隠参道橋（〔二字判読不能〕）を渡つて、鬼無里（キナサ）への道に別れ、戸隠へと登る。

此のあたりの村民の雪袴は、東筑地〔一字判読不能〕のものゝ如くだぶつかず、下方が膝頭のあたりまで股引の如くつまつてゐて、東筑のものはやゝだらしない感じだが、此處らのものはしやんとしまつた感じだ。小学生なども皆これで、斜面の急な山間で働くにはこれでなくては不便なのだらう。

長野市附近には道祖神碑が少なく、且つあつても専ら文字碑のようだが、此の戸隠の峡に入ると各部落毎にあつて、且つ神像碑が多い。そして東筑などの行事とやゝ相似してゐる。或は此の峡渓の文化は長野平系のものではなく、東筑、安曇系のものだかも知れない。

親鸞可〃杖をさしたのが育つて大きくなつたと傳へる桂の大樹（周囲三丈余）などを見て暮方に紹介された宝光社の諏訪重雄氏方へ到着、途中で連れになつた伊那の講中の連中も矢張り諏訪氏方が定宿だとて同宿する事になる。夕食に名物のソバを食つたが、メリケン粉が余程交じつてゐるし汁が甘くないので上味とは云へない。でも昼食抜きで空腹だつたから笊に入れ持つて来られた半分（一笊小さな玉十個入り）を平らげて仕舞つた。

昨年の大洪水に道路がひどく損傷してゐて悪るく、靴がしめつて縮まつた為め、すつかり豆が出来て閉口した。講中の連中が何時までも酒食してゐて遅くまで寝れないでこれにも閉口。

「天の岩戸開き」の神楽は戸隠の有名な神楽だとの事、それを中途からだつたが見得た。四人の舞人が鍬刀などを激しく振り廻したりして一寸変つた神楽だ。

山にはまだ雪があるのだけれど、今夜はひどく寒い。

夕食にはちやんと徳利が一本ついて来た。宿で一人で酒を飲むのは初めてだが、一人酒はうまくない。

五月三日

宿料は一円、茶代は不用との事で辞された。一人で中社へ行き更らに奥社へ行つた。中社から奥社までは約三十丁との事だが、此の間にはまだ雪が一尺以上残つてゐてまだ土地が出てゐなかつた。

極めてなだらかな高原の脊後に鋸歯形のがたる岩〔一字判読不能〕山の戸隠が聳えてゐる。處によると此の巖山は彎曲して突立つてゐるから絶頂千尺位の間には雪さへ積つて居らぬ。巖山となだらかな高原と、白樺、落葉松、いちゐなどの景観はなか／＼見事なものだが、長野市などは古ぼけて、既に人心を捕へるに足らぬ善光寺などをいつまでもかついでゐて、此の戸隠高原を宣傳する事を知らぬ。時代を解し得ないのだ。

奥社屋根下にはまだ六七尺の積雪が残つてゐた。此のあたり比較的に樹木が尠なくて、従つて巖山の下丈が前面はひらけてゐるからさして山奥らしい感が薄い。此の戸隠高原から眺めた黒姫は案外に優美で、柏原方面〔二字判読不能〕からのようにそゝり立つてゐないで、左かしぎの擂鉢状で、二重噴火の小丘を頂いたさまは飯縄あたりよりも優美である。

柏原への道はまだ積雪が多くて開けぬと云ふので、元の道を引き返して中社から一の鳥居への道を長野へと下る。中社から約二十丁位の小丘上から鬼無里方面を振返ると、一夜山が、戸隠と、〔一字判読不能〕熊山との岩山の間に、小ぢんまりと円い頂を見せて、傳説を生み出すに最もふさはしくのびやかな好景観を呈してゐる。そのうしろには北アルプスの山々がかすかに春霞に浮かんで全く好画題である。時間もゆつくりとあるので枯草の上に尻をおろしてスケツチにかゝる。

土地の人々の讃美する飯縄原（いづなつぱら）と云ふのは、即ち戸隠高原の一部として自分は見るのであるが、飯縄山をのみバツクとしての野原は、山があまりにせまりすぎ且つ展望の変化に欠げてゐて景観が小さい、然しその飯縄山をも含めての野原からの前後左右の景観を即ち戸隠高原のとしての景観であつて頗る展望の変化に富み、雄大でもあり目広壮でもあつて、かの上高地が渓谷と山嶽ととの景観に富むのに対して好個の対比的な景観である。裾花峡、鬼無里の奥峡、戸隠、飯縄原、黒姫、妙高野尻湖をも入れての此の一圏の景観を上高地程の豪壮さはないが、その代りに高原景観としての特長を持つてゐる点と、その高原地帯に於ける山民生活の豊富な交錯を望め得る点とに於て優れて居る。土地の人々はケチな裾花峡あたりに目を止めてゐて此の大景観を観賞する達眼を有しない。最も現在の資本主義的なイデオロギーで此の景観がむやみに掻き廻されるのは好ましい事ではないから結局此のまゝそつとして置いて貰つた方がよいかも知れない。

すつかり靴に食はれて仕舞つたので、大久保の茶屋で藁鞋に履き換へ、名物の力餅を賞味する。晝食をしてゐないのでもあるが、頗る粘力が強くて美味だ。わらび粉で製すと若者が答へた。

飯縄原の入口のあたりにあるスキー場の標示など不良青年を見出したようで不愉快なものだ。もつと土地に調和するものであつて欲しい。長野へ早く皈着したので刈萱堂など見て皈宿。

五月五日

午後會場の準備にかゝる。小原先生の口添で何んとか画會の會員だと云ふ若い先生が手傳つてくれる約束になつてゐたのだが、僕の行き方が少し遅れたとて皈つて仕舞つて来てくれない。遅れるとそれ程にあとが急速を要するので一層手傳つて貰ふ必要が生じるのだのに、かうした芸術家なんて若い人間の心持ちは人間的な気持ちの上では理解しにくいものだ。恰度會場へ来る途中で、今夜の「長野話の会」に出席の予定で高田市から来長された市川君と運よく出會して一所に来たので矢ケ崎先生の子息と一所に手傳つて貰ふ。さうかうしてゐる内に小県の箱山氏も出長されてこれ又手傳つてくれられる。大体に陳列をすましてゐると小原先生、小池先生は二三点前約をしてくれられる。小原先生も日本画をやつてゐらるゝので頗る共鳴したとの事で、明日は皆に大いにすゝめ

ると云つてくれ、くれる。
　會場の方から箱山、市川氏等と同道して、話の會の會場の方へ出かける。以上の二人の外に、当夜の参會者は松本から大成堂主人、胡桃澤さん、矢ケ崎先生、、長野から矢ケ崎さん、鶴林堂主人、小池先生、降旗恭充先生、関根利一郎先生、外二名。會は市川君の熱心な持参品によつて頗る有益愉快な會合となり、十一時頃散會。市川君と共に矢ケ崎先生も共々此處の矢ケ崎さんの御世話になる。

五月七日

展覧会は準備（宣傳）不足なりしも思はざる好成蹟（ママ）裡に會を閉ず。出品点数四十点位の處内約束済となりしもの十七点、此の内半数は小原先生の推薦によつて約となりしものなり。他の半は矢ケ崎さんの尽力による。尚約は右多数に及びしも不況時とて月賦拂多く現金者尠かりしも箱山氏の先預分を引き取つて支拂はれたると、矢ケ崎さん自身の御支持にて一切の経費を償ひて尚若干の余りを生じ得たり。諸氏の同情感謝に堪へず。
　殊に矢ケ崎氏は松本にてはなか／＼のやり人にて、商賣柄よきにつけ悪しきにつけなか／＼の辣腕家の如く噂を聞き居りしも、自分の此の一週間位の間に実地交渉を持ちたる處より見るに右説と大いに異り、和田の先生と相共通する人情の厚き、人格のゆとりのある仁にて、右説の如きは同氏の商賣にとらはれたる表面的な見解に過ぎざる如くに思へたるは（むろん凡くらな馬鹿正直な人ではあるまい）お世話様になるとしても此の点を兼ねて心配してゐた事とて、大いに安賭（ママ）し、且つ有難さを一層感じたり。
　夕方萩原君、降旗君、小池君あと仕舞ひに手傳ひに来てくれられる。お蔭で早く仕舞ふ事が出来たので、皈途三人で名物蕎麦屋で一杯慰労會をやり、それ丈けでは足りぬので、更らに支那ソバ屋に至り一杯やる。

五月九日

大体あと始末もついたので長野を辞す。

十日計りお世話さんになつた矢ケ崎さんを辞さんとして名残り惜しまれ別れの言葉も詰まるのを覚える。うれしく有難きは人の情なり。

松本に到着。

月十日

胡桃澤さん處にて池上、眞島、佐野の諸兄に集合して頂き松本にても来る十四、五と両日個展をやる事にきめる。

日はせまつてゐるが、大急ぎで少数描き足しをする。

月十六日

松本に於ける個展も丸松諸兄の支持を初めとして諸兄の尽力にて之又思はざる好成蹟[ママ]にて、約三十点の出品中その三分の二の二十点を賣約となす。長野と云ひ、松本と云ひ、此の不況時に全く意想外の好成蹟なり。しかも宣傳甚だしく遅れ準備も整はざるに此の成蹟[ママ]は全く諸兄の同情によるものなり。

只々感謝に堪へず、此の上の精進を以て謝せんのみ！

五月十九日

十九日正午頃松本を辞し夜皈京。

皈宅して見ると、留守中に又々赤志病臥し居る。一週間ばかり前より急性大腸カタルなりとて恐ろしく衰弱し居り、今尚血膿便を排し居る。かゝる重病を知らせざるあや子の無智には驚くも詮なし。尤も医師は大丈夫なりと云ひ居る由。

五月二十二日

兼ねて一誠社に約束の「五島民俗図誌」の編著に取りかかる。六月一杯には完稿の見込なり。

千九百三十七年

昭和十二年

六月四日　晴

今年に入りて今日初めてホトトギスを聞く。午後の九時頃なり。「キョキョキョキョ」と三声一度に啼きてあとを聞かず。一昨日梅雨模様なりしが昨日より快晴にて今日も続いて晴れたる天ユ矢（ママ）なり。川口孫次郎氏の「日本馬類生態学資料」を先日来読み居りしが、今此の啼声を聞きて、急に此の日記帳を記す気起りかくは記す。（一昨年十二月十五日高円寺より移轉し来たりたる堀ノ内一一二三〇の住居にて）

千九百三十九年

昭和十四年

九月二十一日　曇　驟雨頻発。

暴風雨（アラシ）の中でも花は咲かねばならぬ。

永い準備期間を経て此の日始めて咲いた花があつた。ひどいあらしの日で花はたちまちに揉み破られ、くだかれ花軸もへし折られて仕舞つた。然し此の日咲くべき花はだからと云つて咲く事を一刻も延期するわけには行かなかつた。咲くべき力はあらしの中でも一刻の躊躇もなくぐん／〻＼と咲いて行つた。

これは私が玄関先に育てた花、カンナのの姿であつた。かうした花に私は心を搏たれる。

昭和十七年

一月二十日　晴

庭先の欅や桐の小枝、前の畑に今年は鵯がよく来て鳴く。昨年も時々見受けたが今年は一層多いのである。矢張り時局で銃を弄む人が少くなつた事も原因して居るかと思へるが、かうした小鳥を見たり啼声を聞くと郷里のこと、少年時代の事が思ひ出されてなつかしい。

今年は少し日記を書いて見ようと思ふ。今年の元旦は特に好晴静穏であつた。世界を挙げて血なまくさく弾煙に包まれ、殊に日本も又その先頭に立つて居る国なのに、その首都である東京が此の静穏なる日を迎へ得たと云ふことは〔二字判読不能〕と有難いことだと深かく感じた。日本なればこそと感じた。然し相手は英米である。世界の資本主義の代表国である必らずや此の首都にも爆弾が落下する事を覚悟して居らねばならぬ。それが三ケ月先になるか、半年先になるか、一年先になるかは問題でない。必らずこれが事実となると覚悟することが必要で、さう思ふ大いに緊張してその苦難に耐えるだけの準備——心身共なる準備に今から即時に着手せねばならぬ。と云つて慌てる事ではなく、全体の重要点を見究めて、それを一つ宛完遂して行く事である。

今年五十五才、寒さを強く感じることによつて年取つた事を〔二字判読不能〕と強く感じる。こんな退嬰的な生活ではいけないとは毎日思つて見ても兎角萎縮し勝ちな身内はなか／＼思ふやうには活動してくれない。貧乏でまづ第一に食養が不足なことが第一の欠点だと思ふが、さりとて只金銭にさとくなつてそれのみに没頭して生きる事と云ふことも出来ない性分である。反対に一銭の収益にもならぬやうな社会奉仕的仕事には好んで赴きたがる性格だ。貧乏性とは全く私のやうな者への作辞であらう。

去る十一日森岡柳蔵氏が見えて先年二枚折に日本画を描いて失敗したがそれが果してどんな出来のものか自分では失敗と思つてもはつきり判らず、且又日本画をやつて見たいと思ふから一度来て見てくれぬか、他に相談

する人もないので…との事なので、十七日の午後同氏邸を目黒緑が丘に訪ねて見た。二枚折の無花果はあきらかに失敗で仕方が無かつたが油彩は四五十点も見せて貰つた。昭和十二三年頃佛国滞在中サロンに出品入選したと云ふ二点中小品の方などは當に名作で、その他にも二十点位は傑出した製作があると見受けた。夜遅くまで画論に耽つたが、七十余歳の既に老身ながら眞美探究の為めには處女の如く純粋謙虚で大いに敬服した。只氏にも鳥取縣人の狭量と弱気と〔二字判読不能〕角とがあつて、それが黒田直門の高弟ながら世に出ない主原因となつて居る事が感じられた。作品にもそれがあつて、損をして居る点が見受けられる。然し老年の事ではあり、何んとか早く個展でも催して世人に紹介したいものである。夜十一時駅まで送つて貰つたのは寒中恐縮の至りであつた。

今年になつてから一週間程前に珍らしく雪が小二寸降り、他に曇日が二三日あつたゞけであとは連日好晴つゞきで日中など画室で日に浴して居ると羽織を脱ぎたい程に温い。と云つても本年五十五才の年齢は朝夕寒さを感じ易く、メリヤスシヤツ毛と綿と二枚毛皮チョッキ一枚その上に袷の着物と羽織とで合計五枚の重ね着である。（毛織のズボン下と）朝はシヤツのまゝで体操する事にしてゐるが。

一月二十一日　晴

一昨年頃から一人でも酒を飲むことを覚えた。と云つても外で飲むわけでも晩酌をやるわけでも無い。夜仕事をして更したりすると寝つきが悪るいので、正月客用の酒の残つたのを飲んで見たのが始まりで、さうした夜更しをした寝ぎわに飲むわけである。但し毎日やるのでないから一升もあれば二十日間一ケ月位もある程で、一回に一合未満のものである。此の日記もちび／〻＼やりながら書いてる處である。

元旦の静かにうらゝかなるを有難く感じつゝ
　ことほぎの此のうらやすもたくましきまたゝかぬ眼の守りあればぞ。
三日　わが子ぞと思ひ育てしをの児はもいつしか国のつはものなりけり。

十日　隣組の宮原氏息入営を朝五時半と云ふに送りたれど寝すぎて間に合はずまだ明け切らぬ軒先に旗のひらめけるを眺めて

つはものゝいでたつ家ぞあかつきのいまだ暗きに旗はひるがつる。

一月二十二日　晴

夕方白石定行君来訪。時局柄食事の準備が出来ず気の毒だつた。新京に居る寄本君から托せられたとて、ハルピンで求めたと云ふ径二寸位の古鏡を一ケ届けてくれた。さう古るいものではないやうだが、さりとて徳川期のものなどより遙かにすつきりとした美しさを備へて居る。錫か銀でも交つて居るのであらう。幾か白色を加味して居る。図案は虫か曲玉のやうなものであらうと思る(ママ)が何であるか判然とはせぬ。

此の間大月君にも聞いたが、寄本君は新らしい妻君を持つて、それに子供がもう出来るとか。それはそれでやむを得ない事であるが、それでほんとに落着いて良い仕事をしてくれるのならよいがどんなものであらうか。作家達で研究所などもつて勉強してると云ふことではあるが、作品はどうもあれたものらしい容子に聞く。昨年来大間知君からもさうした話を聞いた。芸術的には一應よい感能を持つた男なのだが、どうも眞理を探究することに欠けてゐて横路にそれてばかりゐるのだから仕方が無い。

全く寄本にのみは限らず、世間には眞理から遠い人間が兎角多くて、此處にこそ人類の―世界の不幸がひそみ、蘊展（奥？）されて居ることに覚醒しなくてなげかはしい事である。

一月二十五日　晴（日曜）

西尾へ行く約束(手紙で)をして置いたので午前中出かける。妻君が病臥との事で新宿高野で果物でも(ママ)思つて行つたが今日は定休で戸がしまつて居る。眞逆海苔でもあるまいと思つて歩るいて居ると蛤を大道で賣つていた

ので二袋買ふ。大蛤で一網袋へ十五ケ位か入らぬが、それが一袋一円五十銭一ケが十銭位につく、小粒のものは袋八十銭位だが、それにしても高いものだ。以前だつたら五十銭はしなかつたであらう、電車の中で、隣席の男が、珍らしさうにして五十銭もしましたかと聞くので、一袋一円五十銭だと云ふとびつくりして、お土産にしては損だなあと云ふ。損徳はかまはぬが高いのがいけないのだ。

大将は留守だがとて病臥中の夫人に會ふ。風邪とて寝てゐる。大将は昨日出発二月末でなくては皈京せぬとか、何處へとは聞かなかつたが戦地らしい。忙がしい中を特に書き置いてくれて半折と額面とを貰ふ。額面は鳥取田島在郷軍人分會へのもの、小林の姉への半折と私のものと、今一幅半折と四点、私へのものは〔この部分空白〕と云ふのだ。軍人様の月並の文句ではなく、且つ文字も念を入れて書いたものと見えて寿造さんとしては出来の良いものゝやうである。婦人から幸太郎さんの臨終の容子を聴く。急性肝炎で狭心症であつた為め苦しさうであつたと。夫人に會つたのは二度目だが、第一回の時には田村が美人だと云つてひどく褒めてゐた程には思はなかつたが、今日はやゝ美しい方の人だと思つた。以前の叔子さんとは異つて所謂世帯擦れがしてゐなくて、情愛もデリケートで上品だから、つまり人柄が良いから寿造さんにもこれなら幸であらう。只病身勝なのがよくない。私の現在の仕事、画の話など暫時して皈る。

昨二十四日夜因伯芸術家懇話會総會だつたので出席したが皆で十名白井、野村、長野、〔一字判読不能〕木、秋原、細田、上野、笹〔一字判読不能〕、〔空白〕と私。今年は文藝會館を例會場に借りる事にして、當番幹事をなくして常任のみにする。常任は廻り持とする常例によつて、今年は文芸長野、洋画松田、日本画井江、音楽鷲見三郎、彫刻早川の五人を選んだが、野村君と白井君とが無任所で私に是非共加はれと云つてきかない。同君等の意志は幹事を選任してもどうも事業なり會合がうまく進展しない、と云ふのが、中心となつて促進せしめる熟意のある人、且又鳥取の市とよい連絡のある人がないから私にやれと云ふ意味である事は分明してゐる。忙しいので固辞したが以上の意味が判らぬわけではなく、且又このまゝ幹事の代はる事によつて段々影の薄くなつて行く恐が多分にある事も判つているので、此の會を作つた発起人の一人としての責任も感じられて遂に承諾する事にした。これは私の貧乏性の一つとして誠によくない癖の一つであるが、どうも最初の責任を思ふとたつて断ることも出来なくて矢張り悪癖に陥るわけ、自業自得でいかんながら仕方がないとあきらめる。

一月三十日

かねて柳田先生へ約束の平山君へ祝ひの絵と、村田祐作君へ約束の絵を一昨日から取りかゝり、平山君の絵は浦富海岸だがこれは面白く出来なくて中途放棄とし、村田君のものは高根の杣ケ池の秋色だが、これはまづ良いとする。今日はひどい西北風で名物の紅塵が空を染めて居る。

此の間から「首途の其頃」の讀稿を執筆して居るが、今日はこれの中部地方の部を完稿、次の東北地方の部に取りかゝる。手簿日記を取り出して書いて居ると、その節記入してなかつたいろ／＼の事を細かく思ひ出して人の記憶と云ふものが案外に確かなのに驚ろくばかりである。但し人の顔などは覚えて居るのが至つて稀である。それだけ覚えて居る人はむろん印象の強かつた人なので、もう二十年も以前の人々ながらなつかしく思へる。高根の杣ケ池を案内してくれた日和田の原老人。白川の坂本老人、温見の元気のよい区長、門入の幸五郎のおかみさんなどなつかしいものだ。上梨の宿の片目のおやぢなどはおかしい思出の一人である。桜田君に聞くと徳山の宿にはその節描いた牡丹を額にして居るとか。

六月二十二日　晴

１９６４、６、（昭和３９年）

二十二日

かねて一九五九年和歌山県東ムロ郡太地町の依託による“太地町捕鯨史”の編纂を完成するために東京を午前十時出発伊豆下田町の教委を訪問、研究資料を調査せしも（関係資料）好資料なく、折悪しく有力者不在にて更らに調査することも困難故、断念して同じ途中にて泊まるならば温泉のある處をと思い初めての通路下田―松崎―土肥間をバスにて土肥に至り、薄暮にて客引きのすすめるままに東端れの吾妻荘というに泊まる。あまり良い旅館ではない。曽つて有島武郎自殺不明の際、尋ねて沼津から戸田まで漁船に乗り此處に来たことを思いだす。松崎近かくの堂が島附近は景色の良い處で、も一度寫生に来たいと思つた。土肥は以前とはひどく人家がふえ俗化している。

6月23日　晴

朝十時瀛船で沼津に渡たる。漣に陽が映じて美しい何枚か寫眞をとる。沼津から名古屋まで急行、桑名に堀田吉雄氏を訪ね、同道して四日市市に至り県文化財という南納屋町の祭祀の鯨船花車を見る、寫眞を貰う。別れて堀田氏紹介の志麻鵜方の宮隣亭という商人宿に泊まる、夜十時。疲れたので酒一本飲んで寝る。

24日　晴

1974年、3、24日

晴、十五度位　今日から俳句（自由調）を日誌変りに作ることにつとめる事にする。

○インフレは経済ならず散る花よ

○愚妻愚子己れ愚夫ありこの庭の雑草

○胃の調子が悪るいスモツクというインフレの華。

（二十五日）

○疲れた胃袋、脳味噌、苦笑いするか髷吹く風よ

○我慢している部屋の埃仲間故だと見ている

二十六日　曇

石　（二十五日寝ていての発表）

石が泣いている

踏まれても蹴られても

だまつて泣いている

石が、

表現の自由を持つものは幸だ、

見えぬながらに流れを持つ風
絹を裂き鋼鉄を砕く怒号
すべての物を捲き揚げるつむじ
ゴビの黄塵を東京に運こび
黄金色でちりばめる朝
コバルト、鉛の大天衣
東西南北急鈍の雲をささえ
眞赤な眞紅のころもで入陽を包み
重なりプルシヤンブリュー、黒衣で星を包む。

ここに掲げた書簡は、これまでに紹介した二つの日記に対応しているものを中心にしている。胡桃澤簡内・矢ケ崎栄次郎ら東筑摩郡関連の書簡については一九四〇年代のものも含まれるが、いずれも戦間期から築かれた橋浦泰雄との交遊の延長線上にあると考え、収録することとした。

日付が示す通り、彼らと橋浦との交流は、社会主義運動の最盛期から転向時代を経て、戦時下の農山漁村更生運動の波が地方にも伸張してくる時期まで、長期にわたる。この間橋浦自身の思想的な立ち位置も次第に変化し、一九三〇年代後半には翼賛運動への傾斜を深めることになるが、書簡からみる限り東筑摩郡の郷土史家との関係は、戦間期とほとんど変わっていない。むしろ彼ら郷土史家の方が変わっていないことに驚かされる。

例えば、一九二九年七月三〇日付の胡桃澤勘内書簡は、地方金融に携わる者として金解禁前後の不安と不満の双方をを直裁に語ったものである。「今日は銀行へ大蔵省の官吏が来て此暑いにずい分面倒なことを云つて居ります　地方の事情に無理解な検査といふものが又小さな商人たちの手許資金を一層窮屈にする結果になると思ふと自分ながらこんな商賣に在ることを暗いこゝろで考へたくなります　此位小さな銀行をつぶしてブルジョア銀行ばかりにしようといふのが政府の方針なのです　近年のモラトリアムといふものは実はどんな銀行のどんなことに原因して起つたかといふことは疾くに忘れてこんな小さな田舎の銀行があるから経済界は前途不安だといふのですから世は逆まではありませぬか」。長年松本銀行に勤務し、同行が丸松商事株式会社に改編された後、常務取締役としてこれに参画し、不況下にあって地方銀行の舵取りに尽瘁する者として胡桃澤は、穏健な形で橋浦の思想に事寄せつつ、心情を吐露している。

これとちょうど対になるのが、一九三七年三月一八日付の胡桃澤書簡である。この中で胡桃澤は、「御説の通り世の中はだん／〻／＼面白くなるとも考へられますが地方の実際を見てゐるとまだ／＼世の中は悪くなると思ひます　もつと悪くなつて悪くなりきつて黒い幕がすつかり下りきらなっければ明日の夜明けは来ないのだとも存じます」「非常時／＼といひますが私たちの非常時はまさに我々の目のとゞくところの地方に存在するのだと思つてゐます」と、戦時下の「自力更生運動」を有望視する橋浦に対し、現実に地方の実情を知る側から疑問を投げかけている。既に翼賛運動に接近しつつあった橋浦に対して、郷土の側から思考するという視座を堅持している点で、むしろ胡桃澤の方が戦間期からの一貫性を持っていることに気付く。しかも、両者の間に民俗学者としての信頼関係が崩れていないという意味で、そこにもうひと

つの一貫性が認められる。

残念ながら胡桃澤は一九四〇年末に没するが、矢ケ崎栄次郎の同年一二月二八日付書簡が示す通り、戦間期に形成されたこの地の郷土史家による人脈はその時点でも維持されていたと見るべきであろう。ここから判断する限り、柳田民俗学の地方組織とは、同時代の政治風潮に阿らない健全な思考の場を意識的に作ろうとした郷土史家を担い手として、戦間期から戦時下へとその不易性を発揮したのである。

［一九二七年十一月一〇日橋浦泰雄宛久保清書簡］

［封筒表］

東京市外野方町下沼袋一五八九

橋浦泰雄様

親展

［封筒裏］

久保清

［本文］

秋も深くなりました。島のこの頃はめつきり朝寒を感じて参りました。

お手紙拝見致しました。いろ／＼御繁多の趣御推察申上ます。私も妻が去る八月初から腎盂炎に罹り一時は重態でとても助かるまいと院長も心配したのでしたがその後一進一退でまだ安心されぬ容態にあります。これには筆もつ身には非常に精神的の打撃を受け弱らされてゐます。狩猟も初まりましたが右の始末でまだ始めてゐません。この冬に全快せねば衰弱が激しいので心痛に堪へません。

以上の次第を早く申上るのでしたけれどなるべくは御心配を掛けまいとて今日まで黙つてゐました。筆不精に全く家内の重態から来る怠慢として御許るし下さい。

御来島は御来旨の十二月中旬は年末でどうかと思ひます。それよりは新正月初旬に御来島あつて舊正月中旬まで滞在されてはどうでせうか。新正月は知識階級その他の正月でこの方面の人々の訪問蒐集に好都合であり舊正月は漁夫百姓の正月で古来の風習が見聞されます。絵は御出でになる前に私が暇日に勧誘して旅費は百円位御送りし御来島の上で残餘は賣る事にしてはどうでせうか。私の一つ心配なのは家内の重態である事でこれが折角の御来島に影響せぬかとそれのみ心に掛りますけど私に御参酌なく御来島下さい。都合つけます

昭和弐年十一月拾日

長崎縣福江町新道

久保清

［一九二八年九月十日橋浦泰雄宛久保清書簡］

［封筒表］

［消印］昭和三年九月十一日

東京市外野方町下沼袋

一五八九

橋浦泰雄様親展

［封筒裏］

長崎縣福江町新道

久保清　　九月十日

〔本文〕

久しき御無沙汰致しました。

あれから半年にもなりませうか。ほんとうに御無沙汰致して済みませんでした。

共産党事件からアナタの事もその後福江署で数回聞きに来ました。川村包末や藤原兵衛君などの消息も取調べたらしいです。でもアナタに何の関係も無い事は私が保証する事ですから。福江署では勿論問題にもしませんでした。

たゞ困つたのは御委託の画がその後賣れずにある事です。なんとかしてと思ひつゝも捗々しく行きません。今に抱いて理解あり郷土の自立を賞味する人々を待つてゐる次第です

でも豫約の分は近日中に解決して御送りすべき代金はお送り致しましせう。高橋兄とは先日も面会しましたが、矢張り御〔同様貧乏人カ〕ですからまだ餘裕がないらしい口吻でした。

〔二字判読不能〕村のは数名からたしかに絵がついた事と報告に接してゐます。代金は前期の分と取〔一字判読不能〕で合算して御送り致しますから決して御心配ないやうに〔願ひカ〕ます。

資料収集の事はアナタが労農等の関係者だと判つたので支〔廳カ〕長や視学にコチラから遠慮したがよからうと某教育家の話もあつてその後の追及を見合せましたが篤志家の寄稿も別にありませんでした。〔二字判読不能〕なんてつまらぬ風評に気を兼ねて貴重な出版物の完成に貢献しないなどは今更ながら頼みにならない人間たちと感じました。

私はたとへアナタが共産党員であらうが労農党員であらうがそんな事は微塵も気に掛けてないのですからこの点は御安心下さい。又思想に国境無く、思想の自由を許された現代人として道途の浮薄な批評や揣摩などに脅へて十年の知己にも勝るアナタとの交誼に寸隙を生じてなるものでせうか。世評が無理解で冷酷で圧迫的であればあるほど反抗的に結んで行くべきが現代人の情誼です。苦闘に戦ふ我等の信念なんです。東京は雨ばかしだつたさうですね。こちらは割に雨が降りませんでした。

大毎の全国大学新聞の記者が全国行脚を試み三回づゝ記事をものしました。京都大学から来た学生記者は堂崎の慈恵院の事をよく書いてありました。御参考に送つてもよいです。

慈恵院もほうとうに立派に新築されました。エキゾチツクな匂ひも漂ひ敬虔な感激にも打たれます。その育児室の大廣間からの眺望は天下の絶景として申しても過言ではありますまい。

又、この秋にか冬にかいらつしやいませんか。私は先日知事の初巡視に同行して私自身が見聞の狭いのを恥ぢました。それほど五島の各方面に風景に人事に村落に変化があつてゐました。いくたのアナタにお目に掛くべきものを発見したのでした。

岐宿の江〔一字判読不能〕の辻には県下第一の〔二字判読不能〕も発見しました。

いろ／／ありますが、今日は之から縣会議員〔達カ〕の演説会があるので失礼します。
奥様によろしく。
泰子さんも御生長でせう。
久保
橋浦学兄
川村藤原行方不明〔橋浦の記入〕

〔注　五島日記2月25日の記述〕
〔※挿入句は以下全文の可能性もあり〕多分誰も知らずにゐたではあらうが二十日には拡子さんと律子とか云ふ女とが一所に病院へ行つた筈。しかも電報は二十二日に打ち、それも金を遅れが主要点なりとは如何に無智な女の事とは云へ人間的常識のないにはあきれたものなり。子供が産れたとか入院したとかそれ丈聞いても金の事などたとへ書かなくとも送金するべく全努力を振ふ事はきまり切つた事なり。

〔一九三四年（推定）一二月二日　橋浦泰雄宛久保清書簡〕
〔封筒表〕
東京市杉並區高円寺
五ノ八五七、
橋浦泰雄様
親展
〔消印〕
昭和〔九カ〕年十二月二日・福江

〔封筒裏〕
長崎県松浦郡福江町
久保清
十二月一日

〔本文〕
御手紙誠におなつ可しく拝見致しました。土佐の方へ御出でになり御郷里へもお立寄り遊ばさるゝと聞くとぜが非でも五島へ歩度を延ばして頂きたいやうに衝動をそゝられます、でも今度は御日程が限られてゐらるゝ由で残念でなりません、然し舊正月の候再び土佐への旅行を決行さるゝ機會には是非とも五島へ御立寄りをお願ひ致します、画の方も責任をもつて御世話致しますし又以前御出でになつた頃とは大変に変つた諸所の実況なども親しく御目に掛け圖誌再版の機會の増補訂正の資料に供したいと存じます、語るべき事はとても二日や三日では足りないこと御同様です、又白髪を語るお互の外に一人や二人の語り合ふ人も御紹介致したいのです、
私は圖誌が出版されたので一入五島と貴兄とが離るべからざる

御関係にあるので五島を第三の故郷とでも思はれて今後はもつと五島に接近して頂きたいと切望致します、その接近の機会を私はあらゆる場合にも喜んで執りたいのであります、
万一舊正月に御立寄り可、出来ぬ—そんな事のないやうに熱望致しますけど—やうでしたら私可、大坂まで御会ひに行つても好いと思ひます、大坂には長男もゐるし兄も在住してゐますから。
次に一誠社へは約束通りに百冊代電送致しました、寄贈の方もそれ／〳〵＼配本致しました、寄贈は私も餘儀なくせねばならぬ関係方面可、五六ありまして寄贈しました、出版はついて知識のない人々は十冊も二十冊も寄贈可、出来ると思つて事もなげに相談されるのには困りました、事情を話て断つてゐますがそんな男に限って有料で購入してくれるでもないやうです、　藤原兵衛君は一冊御指定により寄贈しましたら二冊別に贈與してくれとの注文で仝君へは寄贈致しました、
五島に於ける賣行は宣傳は徹底しました可、実物を見せて各自に外交辞令で勸めぬ限りは進んで申込む人も少ないやうです、で外交員を廻してゐますが役所や学校はまとめて取つて貰ふ事にしてゐます、たゞ此等の人々は三回拂をしてやらねば薄給その他の都合で一時金は出来ぬとの事でそんな都合にしてゐます、新聞廣告は私の新聞に絶へずのせてゐます、別紙切抜御覧下さい、
又新聞廣告も御目に掛けるのです可、新聞可、丁度中学校落成式の日の新聞だつたので沢山刷りましたに拘らず餘分がなくてお目に掛け得ずにゐます、一誠社へは二枚送りました、近日中御送り致しませう、
顕原退蔵氏は蕪村研究者で著述もあります、その父謙三氏は島の六号に漁村語彙を寄稿した老人で永く上郷校長をした教育家典型の人格者で私も曽識の人です、退蔵氏の妹郁子さん可、私の友人前五島高女教諭渡辺儀一郎氏の妻君なので退蔵氏の話は早く可ら知つてゐます、この郁子さんも渡辺君も貴兄も御存じの〔人ですカ〕

〔一九二九年七月三〇日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕

〔封筒表〕
東京市外野方町
下沼袋一,五八九
橋浦泰雄様侍史

〔封筒裏〕
松本市葵馬場町
胡桃澤勘内
十日

〔本文〕

どうも御無沙汰しました　御かはりもありませぬか
画いろ／＼ありがたく存じます　倉田田内両氏分明後日かその翌日送金致します
久米路の橋の御作は特に面白く拝見いたしました　天明四年の眞澄の画と比較して興深く見入つて居ります　眞澄の画には鳥居高き処にあり御作には川の中の巌の上に在りこれも面白く川のうつりかはり見え申候　こゝばかりは橋のさま今の方が古風なるもゆかしく候　尤も新なるものに感興をもとめて淋しみつゝ歩みゆきし百五十年前の旅人と古をなつかしがりつゝ歩み来りし今の世の旅人とのちがひと存じ申候
さて例の出版も三百人といふのが六百五十人ばかりに相成り此一ケ月をそればかりに没頭いたしました　柳田先生の序文は菊版二十頁ばかりにて活版本の原稿約八十枚も先生親しく書いて下されました　三元社も製版に苦心松本七夕の画の如きは木版応用十三度刷其他も十度刷以上のものとなりました　八月下旬には全部製本済と存じます　今左刷の仮刷を見て居ります
今日は銀行へ大蔵省の官吏が来て此暑いにずい分面倒なことを云つて居ります　地方の事情に無理解な検査といふものが又小さな商人たちの手許資金を一層窮屈にする結果になると思ふと自分ながらこんな商賣に在ることを暗いこゝろで考へたくなります　此位小さな銀行をつぶしてブルジョア銀行ばかりにしようといふのが政府の方針なのです　近年のモラトリアムといふものは実はどんな銀行のどんなことに原因して起つたかといふことは疾くに忘れてこんな小さな田舎の銀行があるから経済界は前途不安だといふのですから世は逆まではありませぬか　産業組合法の信用組合の預り金や貸金が眞に其法の精神の通り組合員といふ小さな多数民人の相互扶助の機関でない限りは　これから後田舎の経済界といふもの者不安であり且田舎の金といふものは大銀行といふものに吸収されつゝ或階級ばかりの収益の為にのみ流通することでせう
内閣がかはつても待ちに待つた世の中の明るさは此先見込がありません　節約の或部分は当然でありますがこの為に不景気に泣くものは小民です　それよりも金解禁などいふこ〔とカ〕はすぐに決行せらるべきものと思ひます　さうして一日も早く物價を下落さしめね者、ならぬのにと思ひます　少数国民の利害の打算のために多数国民にこれを忍べといふのはもう堪えられぬだけにわれ／＼は生活の行きづまりを感じて居るではありませぬか
つまらぬことを書きました　暑中御自愛専一に祈り上げます。
草々乱筆
七月三十日　　胡桃澤勘内
橋浦大兄侍史

〔一九三〇年四月五日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕

〔封筒表〕

東京市外野方町
新井五九二
橋浦泰雄様侍史

〔封筒裏〕

胡桃澤勘内
松本市葵馬場町
電話５０３番

〔本文〕

御無沙汰いたしました写真と御手紙をいたゞいたまゝいたゞき放しで失禮しました　二月以来上京の日の近いことを豫期してゐましたので何もかも其のときと投げやりにして居り　三月上京の時ハ雨と風のためにいろ／＼手ちがひになつてしまひあなたのところを御たづねするつもりで中野へ行つたのが十日の夕方でありましたが親戚の家で急病者が生じたのであちこちして居るうちに帰りの汽車（此時はもう次の日に松本を素通りして長野へ其の日の午前十時に行く必要に迫られて居たのでどう豫定の変更も不可能の状態でした）の時局にせき立てられて中の郵便局前でこゝまで来て居ておたづねの出来なくなつたまはり合はせの遺憾さを痛感しながら通り可〻ゝりの円タクに飛び乗つてしまひました　さうしてそれなりに又御無沙汰のし通しです

池上君がかへりましたので此頃例の「話をきく會」を一回開きました　あの田楽屋のうす暗い灯の下で怪談の會になつてしまひました

岡書院の袖山君が帰郷して洗馬の小学校に一年ばかり奉職することにな里ました

岡村千秋君も二三日前にこちらへ見えました　話をきく會へ出席した大町の一志君（これは御存じのない人ですが此次には逢つて下さるべき人）が柳田先生のところへあの地方の採集記録を携へて行きました　その原稿を岡村君が携へて松本へ来て此草稿を小生が再び見るまでが三十時間を隔てなかつたのですから忙しい話でありました

池上君は三日朝上京しました　今度ハ農林省の研究所に勤めるのださうです　池上君から御願ひすることゝ存じますが少し安い絵を買いて頂きたいと存じます　それハ眞澄遊覧記の帙の見返りを印刷する程でもありませぬので五十乃至百箇と存じますが簡素なものを書いて頂きたいのです　庵の表状の厚さがわかり次第帙の大きさが定まりますが多分五月のことゝ存じます

校長さんたちに少しの異動を生じました　矢ケ崎氏ハ相かはらずです　洗馬も同様です　大池君ハまだ不安定ですがそにかく一度また洗馬へ御いでになつては如何ですか　釜井庵が新しい表装をして待つて居りませう

中村君ハ老母が三月上旬死去されました
銀行を廃棄してしまはうと存じますので何やかや忙しがつて居りますが小生相かはらず無事昨秋来一家皆風邪一つひかずに居ります
公會堂前の花が三分の春といふところです　去年の今頃を思ひ出します
皆々様御健康を祈りあげます
乱筆失禮
　四月五日
胡桃澤勘内
橋浦様侍史

〔一九三一年二月一五日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔封筒表〕
東京市外野方町
新井五九二、
橋浦泰雄様
〔封筒裏〕
松本市二の丸町
胡桃澤勘内

電話５０３番
昭和六年二月十五日
〔本文〕
ながい御無沙汰をしました　御児様其後の御容態は如何ですか当地ハ本年に入つて一月十二日が華氏の十二度二月十三日が同じく十三度（何れも小宅の二階で）の寒さでした　葵の馬場に比べては温帯と寒帯の差なので比較になりませんが去年に比べては大変な寒さであります（昨年の葵の馬場は二階で四十度を下つたことが無かつたのです）雪は只今二階の庇から下へ飛び下りてもすぐ足のとゞくだけになりますので随つて塀の空隙はみんなふさがれて居りますので西北の寒い風が完全に防がれて居ります　裏の竹藪は殆ど生色ある葉の無いまでに凍傷を蒙つて居て殺風景極まります　小生此数日前身體が痛んで寝返りも出来なくなつて暫く寝て居ましたがやはり風邪の一種であつたらしいのです　但し熱発絶無であつたのは幸でありました
矢ケ崎先生は電燈値下の運動の會長をして居られるのですがきのふも池上君と二人で先生手をつけて見たところが大変なことになつたので東京へ逃げたのだと悪口を言つたところですとにかくに此運動は趣意は結構ですが其方法手段と申しますか戦法といひますかゞ適当を欠いて居りますので結局は團結は内から決裂を生じ共同の幸福の為には今後益々青年の自主的團結が必要でありますのに青年團頼むに足らずを歎ぜしむる結果に

なりはせぬか　若しさうであつたら斯うした折角のいゝ運動の前途の為に惜しむべきものと考へられるのであります　矢ケ崎氏は縣會議員になる野心からもう一人の青年は村長になりたい野心から此問題を利用するのだといふやうな風聞はよし反対側の逆宣傳であるにしてもそれだけ損であつたのですから電燈値下の問題は矢張り純な青年團の行動にして置いた方がよかつたかも知れませぬ　只今のところ村長會といふやうなものが仲裁に出て休戦状態ださうですが　結局はさうした古い有力者出でずんば解決せぬといふことに落付くならば青年の團結は永く権威を失ひませう　それが何よりも惜しいのです

信濃銀行の預金三千萬の不拂問題といふのがあり一方には此電燈料問題があり長野縣もいよ／＼面白くなつて来ました　とにかく維新前の小藩分立時代の長い夢から覚めてお互／＼は團結しなければならぬ必要を痛切に感じ更に又それの尊い試練の第一歩にどうしても立たねばならなくなつたことは此不祥事中の幸福でありました

道神誌のこと何分大仕事ですから時を経て見直すに随つて御努力の大きくなることを御察し致します　圖會の方御完成の由御同慶に存じます　学期がはりの忙しい時なのが豫約をとるのに少し損ですが教育會の手で頒布することにすれば四五百は一時に出ることゝ存じます　あとは岡村君の宣傳方法次第ですが「鄙の一曲」の時もさうでしたが　三元社などのやり方に比してどうも歯痒いところが多いやうに存じますので此辺を岡村君に言つてやりたいと存じて居ります

東筑摩の教育會員に配るのだけは謂はゞ道神誌の附圖なのですから（附圖といふ形式で出版しないとしても）會長の名でゞも断り書きがあつた方がいゝやうにも考へられますが　矢張りこれは御説の通り無いことにして置かれて宜しいと存じます　柳田先生が短いものでも書いて序文を飾つて下さるれば結構と存じますが　これはやゝ臆却なことになりませう　然しどうにか出来ないものですか

出版の日の早く来ることを鶴首して〔一字判読不能〕待ちます

餘寒は尚甚しいことでせう　御自愛願い上げます

写真三葉拝受いたしました　大成堂池上両君へ早速届けます

二月十五日　胡桃澤勘内

橋浦学兄　侍史

〔一九三一年九月三日日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕

〔表〕

東京市外野方町

新井五九二

橋浦泰雄様

松本市二の丸

胡桃澤

〔裏〕
追伸
渋澤さんを迎へて七日の午後六時に浅間冨貴の湯で話の會をすることになりました
渋澤氏早川氏袖山君一行は七日夕四時五五分に松本につきます
是非御都合ありて同じ汽車で御出かけ下さい
九月三日

〔一九三一年九月三日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔表〕
東京市外野方町
新井五九二
橋浦泰雄様
松本市二ノ丸町
胡桃澤勘

〔裏〕
拝啓　新秋の候愈御多祥の段〔以下本文活字につき省略〕
〔欄外手書〕
御手紙拝見、御忙しさ御察し申し上げます。七日の御出立の由、袖山君の通知により七日の日には渋澤氏当地に見える由。若し七日とすれば七日に話の會を開きたいと存じてゐます。早川氏も同伴の筈です。
但し早川氏からは十一日の頃といふやうにも申し来りました。何れかわかりませんが兎に角その時にハ松本に居らるゝやう御出かけを待ちます。しかし今渋澤氏の来る日がはつきりしないので、非常に心もとなくて居ります。
○池上喜作君は明日名古屋行六日には東京に居る筈です　七日の朝かへるでせう。（昼の汽車で）
○二百十日は雨今日は晴
めつきり涼しくなつたのに驚きます。
○明夜は松本の二十二夜待ちです。
まだ冊子は完成しません
九月三日

〔一九三一年九月四日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔表〕
東京市外野方町
新井五九二
橋浦泰雄様
松本市二ノ丸町
胡桃澤勘内

〔裏〕

渋澤氏は五日に出發駿河甲斐を経て松本に七日の午後四、五五分（甲府より乗車）着の豫定ださうです。

七日の朝飯田町を出るその汽車で御出でになれば好都合と存じます。池上君も砧村より居りますから多分その列車でかへるでせう　早川氏と高橋文太郎氏と同行するさうです　渋澤氏はそれから三州を経て尾張へ向ふ豫定だといひます。

〔一九三三年三月十四日日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕

大変御無沙汰しました。此春になると銀行も廃止してすつかり閑暇を得られると存じましたところ、あてことと何とやらの例の通りに餘分な忙しさばかりでこのところへと／＼に疲れて居ります。

第一にこれは此頃からご報告申上げたく存じて居りました点は東筑摩及松本市だけが此度の事件の絶対無風地帯であつたことであります。諏訪と上伊那に行つて働いて居た連中には東筑摩出身者が先鋒であつたにもかゝはらずこちらには全く一人の被召還者も（青年にはあります、教員には無いのです）出さなかつたのはどの郡にもどの市にもあつた中に不思議とされて居ります。大兄の當郡に於ける行動は例の塚田といふ大兄を屡々訪問した特別高等課員などが正當に理解して居り昨年の大兄の寄禍に遭はれた噂のあつた時なども東筑摩に居てあの仕事でもして居られたらばこんなこともなかつたにと道神誌のことを指して話して居たこともあつた位ですから此の点大兄の御心配までも無く　逆に大兄を透して當局では此地方の見通しが正當な明らかについて居たらしいのであります。柳田先生ー折口氏によつて尚古的に又古典的になつて居るところへ其紹介によつて大兄が其方面の実行運動をされた形になつて居りますので此地方の教育界といふものは一つの訓練を経て居り極右傾にもならぬ代り又極左傾にもならず　しかもしつかりとした本筋を意識しつゝ歩いて居るものがあるのでせう　和合君の不破所（フワッショ）（折口氏の使用する文字）なども東筑摩に人気が乏しくて他郡に参加者の多いのは此の意味を含んで居りませう

昨年は夏以来年末まで坂口君がこちらに滞在し、其間武田久吉博士は本年まで四回ばかり道祖神採集に参り　早川君が二回三元社が二回折口氏が三回　柳田先生が一回（長野諏訪へ一回）渋澤氏が一回話をきく會も繁昌いたしました　四月号「ドルメン」に道祖神採訪餘録を書きました　何れも大兄の未見のものばかりです　道神誌が出たらばそのあとから小生永い間の懸案になつて居ります「福間三九郎」をまとめてしまひたいと存じて居ります　武田博士の採集は主として道神よりも屋内の神としての幸神が多く写真としては発表に困難なものばかりです

随つて小生の「三九郎」は此方面が多いことになるのです　これを心懸けて居ります上からも道神誌の御脱稿を一日千秋の思ひで相待ち居りました際御手紙に接して喜びに堪えませぬ
四月十三日は三の宮御柱山出し式です　御見物に御出かけを相待ちます　山辺、千鹿頭御柱なども引続き行はれます
柳田先生からは御すゝめをうけて居りまするが先生には御返事も〔一字判読不能〕しあげず無礼とは存じながらグズ／〻／＼すて居ります　家族も少しく此の忙しさから逃避するやうにと尻をつゝくやうに申して居りますが　どうも時にさうとまりさうもありませぬ　高崎先生は今大連行の船中に在るか　今日辺り彼地へ着かれたかと存じますあの気の軽さを羨ましく思ふばかりです
とにかくうつとうしい世の中になりました　池上隆祐君とも話したことですが（柳田先生も御心配なされて居るさうですが）充分御自重の程を祈り上げます
折口さんと中一日をへだてゝ朝日村に行き折口さんは處女會小生は青年の會に長い話をさせられて帰つて後少し腹の工合をわるくしものうくて寝て居ります御手紙は御行儀のわるい恰好をして書きました　乱筆御判読願ひあげます　両三日つゞいて零下六、七度屋内もすつかり凍つて居ります　三月にこんなことは無いことです　東京も寒さうに想像せられます御自愛願ひ上げます　特に子御子様方御大切に。
三月十四日　胡桃澤生

橋浦大兄侍史

〔一九三四年三月二七日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔表〕
東京市杉並区
高圓寺五ノ八五七
橋浦泰雄様
松本市〔二字判読不能〕
三月廿七日　胡桃澤勘内

〔裏〕御はがきに接し驚入候御心配の程拝察に餘り候　御入学を目前にひかへて何といふことにや但し疫痢ならば今はまだ重症季節に非ず御養生専一と存候よくなれば速かに恢復するもの故四月一日には充分御健康御とりかへしあるやうにと切に願候そんな際にとんでもなき御願申上げ置き恐縮に存候御購入下されれ候由ありがたく存申候重て御厄介ながらこはれぬやう御送り
〔一字判読不能〕居候

〔一九三四年五月一日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔表〕
長野市南縣町

矢ケ崎氏方
橋浦泰雄様
松本市田町
五月一日　胡桃澤勘内

〔裏〕御はがき拝見致しました。萬事順調に御はこびのことゝ存じ喜びに堪えませぬ。話をきく會のこと大抵五日の午後から繰合はせ得ることゝ存じます。大成堂の尽力で成るべく多勢誘ひ合はせて参會したいと用意中です。紙と話をきく會の小冊子をきのふ七分のちがひで御目にかゝれなかつたが今は送つたといふことです。
矢ケ崎氏はじめ諸兄によろしく御傳へ願ひます。くれ〳〵もそちらでの御多幸を祈り上げます。

〔一九三四年五月三〇日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔表〕
東京市杉並区
高圓寺五ノ八五七
橋浦泰雄様
松本市〔二字判読不能〕
五月三十日　胡桃澤勘内

〔裏〕拝啓、平福さんの硯、正に入手重ね〳〵御手数をかけ候事を感謝〔申上カ〕候　相當の〔一字判読不能〕色と其形の簡素なるを喜び申候　此類の石は歙州の羅文石なりや又所謂龍尾石など申す方の側のものなりや知り置き度候　いつか晩翠軒あたりで御調べ願上候
乍末筆御病い御だいじに願上候

〔一九三七年三月八日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕
〔封筒表〕
東京市杉並区
堀の内一ノ二三〇
橋浦泰雄様

〔封筒裏〕
松本市田町
胡桃澤勘内

〔本文〕
　こんな紙に手紙を書くことをおゆるし願ひます
御無沙汰したつひ昨日も昭和九年の今月穂高へ御同伴したことなどを思ひ出して居りました
画會のこと拝見いたしました　申込の多からんことを祈つて居

ります

昨年六月に拝眉を得た頃は昭和六年以後に於ての健康恢復の最頂点で九月の末に雨に濡れたりなどして無理をしたあと十月の九日には斎藤医徳田医それから池上博士などに見はなされるまでのところを経て人事を弁ぜぬ日が十二日間の後どうやら恢復の見込充分といふことになりました　今ではもう少し足が自由に動けばいゝと思つて居る位になりましたが　それでもこゝの病院でいろ／＼のことを試みて居ります　不相変の異常な症状は警告付で居ります　従つていろ／＼のことを禁じられて居りますので飽き／＼して居ります

ことしの春の暖かさにも驚いて居ります二月五日以来殆ど氷を見ませぬので當地をしては珍らしく今が梅の開花中です

十二月には十日間ばかり東京に居りましたが池上隆祐君には帰りがけに一寸訪ねて貰つた(留守中へ同君の手紙が来たので)ゞけで其他へはどこへも御たづねも御たよりもしませんでした

六月御目にかゝつた時の歯医者の家の婚礼でどうしても行かねばならなかつたのです　其時も熱発などして医者騒ぎをしてひどい目にあひましたが愚妻同伴でありましたからそれでも無事に年末に帰郷しました

あの歯医師のところへも画會をすゝめておきましたが　あの時に御逢ひ下された愚甥竹内といふ男は芝の白金に居ります　今里町八十九番地（竹内武一ですが俗物ですから姓名判断か何かで竹内〔一字判読不能〕人といふ表札が出て居ります）電話は高輪三七六四です　此男は無趣味ですが知人などに勧誘させようと存じますので二三日中に手紙出しておきますから一度御たづね下さるれば好都合かと存じます　此の甥の長男は支那文学で彼地の文士と往復して居りますので時々警視庁あたりから講演會などの方面に弾圧を食つて居ります　兎に角此甥は俗物ですが稚気を脱せぬ男です　面倒な御心構へ御無用の人物ですから小生の家人同様の御つもりでどの方面かへの勧誘方仰付け下さればいゝと存じます　今は病気してゐるかと存じますからいつでも在宅と存じます　健康ならば家になどめつたに居る男でありません

乱暴な手紙で申譯ありません

こちらへも一度御出かけを御待ちいたします　御自愛祈り上げます

三月八日　　胡桃澤

勘内

橋浦大兄

〔一九三七年三月一八日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕

〔封筒表〕

東京市杉並区

堀ノ内一ノ二三〇

橋浦泰雄様

〔封筒裏〕
三月十八日
松本市田町
胡桃澤勘内

〔欄外〕
池上喜作君は上京中です　隆祐君は今頃見える筈でしたがやめになつたらしく思ひます　柳田先生によろしく願ひます　大間知さんにも御ついでによろしく願ひます

〔本文〕
拝啓　此頃の御手紙拝見いたしました。画會の御成効〔ママ〕を祈ります
別紙の小為替は「世田谷太子堂町三三二井澤正一」の會費です
例の歯科医です　この會費だけの小点一つ御願ひ致します。画題は何とも申して居りませぬが塩尻に曽て住んだことがありますからあの邊に縁のある風景などがよろしいかと存じます。
竹内は市會議員選挙の為忙しかつたなどゝ申して居りました位ですから病気は左程でないと存じます　電話「高輪三七六四」[3764]に御問たゞしの上御あひ下さるればいゝと存じます　趣意書がありましたらば少し送つて下されてもよろしいと存じます　この男はそゝかしい方ですが人のことはよく奔走しますから小生同様に思はれて充分御用件付けを願ひます　藤森馨君や斎藤医師などの中学同級者です　こんな人たちを知つてゐると御話しになるといゝと存じます
御説の通り世の中はだん／〻＼面白くなるとも考へられますが地方の実際を見てゐるとまだ／＼世の中は悪くなると思ひますもつと悪くなつて悪くなりきつて黒い幕がすつかり下りきらなっければ明日の夜明けは来ないのだとも存じます　長野縣などは特に教育縣など潜〔ママ〕称してゐるだけに南信にしても郷軍同志會や養生正？會の代議士が日本に他にないのにこゝばかりは出して居るといふことが誇りでゞもある如く思つてゐる現状をどう見たらいゝでせうか　非常時／＼といひますが私たちの非常時はまさに我々の目のとゞくところの地方に存在するのだと思つてゐます
松本市などには何一つでも将来の見込みは立ちませぬ　物的には亡びてゐるのに人的に何もないのですからどうにも始末が悪いのです
御自愛を祈ります　三月十八日　胡桃澤勘内
橋浦大兄

〔一九三七年十一月一三日橋浦泰雄宛胡桃澤勘内書簡〕

〔封筒表〕

東京市杉並区
久我山三ノ一〇八
橋浦泰雄様侍史

〔封筒裏〕

十一月十三日朝出ス
松本市田町
胡桃澤勘内

〔本文〕

橋浦老兄侍史　　十一月十三日　　胡桃澤勘内

御懇書忝く拝見致しました　仰せの如く今年は未曾有の悪年でありましたが當地には大した影響もなく御蔭様に小生も常に爆弾を抱いて居るやうな病痾の脅迫観念にも狎れて先づ以て平凡無事の一日／＼を過ごして居ります　いろ／＼と御厚志による御心づかひは感謝の至りに存じます　小生の病状は別に寒暑の関係によつてどうといふことも無いやうですが何分にも血圧が百八十ミリ程度を下らず　左半身（主として下肢）に軽微ながら不随感が去らないので敏捷な運動の出来ないのに閉口して居ります　これに昨春よりは昨冬昨冬よりは今春、今春よりは此秋といふやうに比較して見ますと少しづゝでも恢復して居ますので突発的な衝動によつて悪化状態にならぬやうに用心して居たらば忘れるやうに健康回復の時があるものと気楽に考へて居ります。　此春池上隆祐君を逗子にたづねて雨の半日を鎌倉近郊一巡をしましたが其際の経験では無理をして鶴ヶ丘や圓覚寺あたりの〔石カ〕段の昇降をして見て足の力の自信を得たやうなこともあつて　少しづゝは歩き廻る方がいゝとは存じて居りますが　小生の目下の状況では轉地旅行などの自由が許されない事情にありますので尚しはらくはこの侭閉ぢこもつて居るより外ありませぬ。

今春小生が會社引退後のある會社も惨めな状況に陥りあとを引受けた人々の暴挙に近い経営ぶりは遂に収拾すべからざる事態になつたところで其主脳者も急死し御存知の杉村君の如きは今春遂に會社の事務も家庭をも捨てゝ逃亡今に行衛の知れぬやうなことでいつも御来松の際に御顔見知りの人々は今は一人も居ないやうなことになりました。こんな次第で小生の引退は全く醫師の勧告に依る勧告の為の圓満引退であつたに拘はらずあとを引受けた人々の暴挙の為に（これには他の力もあつたやうですが）小生の志も将来のために遺した建言も一つも容れられず却て其に逆行することになつてしまひましたので結局小生及小生と共にあの會社に働いて居た人々の全部は所謂裸で茨を背負つた形になつたのでありました。こんなわけで小生としては何十年かの過去をあきらめてしまへば却つて今はすが／＼しい心にもなつて居りますが、扨健康を恢復しても此老境をどうし

て過ごしてゆくかというふことに考へ及びますと暗澹たる気持ちにもなるのであります。かういふ中にあつて私には天災よりも地変よりもひし／＼と脅威を感じて居るものは昨年以来の人変であります。これはこんな事変がなくとも我々ぐらゐの年齢の者の當然遭遇すべきことではありますが、先輩同年輩の知己の次々と欠けてゆくことゝ後輩の離反（といふ程のものでなくて疎隔といふべきでせうか）とであります。今井武志君といふやうな人が上京してしまつて、もう此地には居ないといふやうなことにも深い淋しさを感ずることがあります。「話をきく會」も此頃はめつたに開かれず、矢ケ崎先生を中心として大成堂が斡旋してゐる二日會といふのがありますがこれも近頃はあるか無きかの會になりました。矢張かういふところにも事変色があるのでせう。

塚原氏其他の方々には未だ御来訪に接しませぬ、どういふ御用向かわかりませぬが、御期待にそふことが出来れば幸と存じて居ります。

當地今日も快晴、寒さは強くなりましたが、まだ菊は真盛りです　霜は一回あつたばかりです。乍末筆御自愛願上げます

追伸、別紙の手紙認め了つた時（夕刻）御三人の方々が見えましたので御来意は承はつておきました。大成堂に廻つて一先づ御かへりになりました。明日は北信へそれから又こちらへ廻られて帰京の御豫定とのことですが、畫の展観と申しても今の松本では無理かと存じます。殊に小生は昨春来（といふよりも一昨秋来）世間とは全く没交渉で居りますので近い世上の景況も不明で居りますが何れも時局柄の不況の上にそれからそれと寄附責めに遭つて居ますので絵画をすゝめるのには適當な時期とも思はれませぬので御期待に　ひ得るかどうかと存じて居ります　大成堂とも相談して見たいと思ひますがとにかくに小生としましては力及ばざることを汗顔に存じて居ります。

十一月十二日夜

〔一九三二年六月二三日橋浦泰雄宛池上隆祐書簡〕

〔封筒表〕北海道札幌市中島公園前
小谷様方　橋浦泰雄様

〔封筒裏〕六月二十三日
東京市外砧村喜多見三三三四
池上隆祐

〔消印〕昭和7年6月24日

〔本文〕

拝啓

有賀宛原稿と御手紙下され有難く存じます

新聞紙上に貴方も検挙された由報道されてゐたのでどうしたのかと心配してゐたところなので無事北海道に居らるゝ由を承は

り嬉しく存じます
私はそつちの方は素人で何も知りませんが新聞や東京の街の何か物々しい此の二三日の警戒で何となく物情騒然たる（一寸大袈裟ですが）気分が致します
成る可く長く北海道の方にゐられてこんなやかましい東京へは出来る丈け遅れて帰られることを切望してゐます　近来健康もあまり勝れないやうに思はれる貴方が検挙なぞされると死んでしまふかも知れません体を第一にされて出来る丈け長く生きて地味ないゝ仕事を沢山されることを希望してゐます
　実は中島郷史さんが信州から上京するといふことを聞いたのでその折に例のブドー園晩餐のことをも一度御きゝしてみやうと思つてゐます
「石」の号も大変立派なものが出来さうです
　口絵には石神問答の本の寫眞と柳田先生の三十六の時の金ピカの礼装の寫眞とを入れます
　先生も大変喜んでゐます　こんな金ピカ寫真なぞ何時もなら貸してくれませんが私が行つて先生の石神問答を書いた頃の寫眞がほしいと云つたら此の中から君の好きなのを持つてゆけと云つて此の奏任官の礼装の金ピカ姿となほし（多分なほしといふものでせう）に烏帽子ののとシルクハツトにフロツクののと三葉を見せてくれました　金ピカののが丁度四十三年の撮影で石神問答の出た年と同年な上に先生の金ピカ姿はめづらしいのでこれを御借りすることにしました　何しろ勲六等の勲章を胸にしてカイゼルヒゲを生やしてゐるので愉快です　先生もそれは珍品だよと云つてゐました
　寄稿子も七十人からあり総頁数も三百三四十頁にはなるしするので私の努力も少々酬いられました
　先生へ御あげする本人は執筆者で先生に縁の深い人々の署名をして記念することに致しました
　貴兄と早川君とには絵を描いて戴き度いと思ひます
　別便で鳥ノ子を御送りしますからあれへ二枚描いて下さい
　一枚は先生に御あげし一枚は私が記念にとつておき度いと思ひます　御送りした鳥ノ子は本の中へ綴ぢ込みますから縦横共に一寸位宛切りとりますから其の御積りで描いて下さい　尚綴ぢ込みますから右の方少しあけて置いて下さい
　お忙しいところを餘分な御願ひばかりして申し訳ありません
　石の原稿はもう来ないものと諦めその上何時御会ひ出来るかわからぬと悲観してゐましたところだつたので喜びは二重にも三重にも大きかつたのです
　御体呉々も御大切になさることを祈つてゐます
　私は相不変頑健にもなれず又病弱といふ程でもなくてゐますから何卒御安心下さい
　では今日はこれで失礼致します
草々　池上拝
橋浦泰雄様

〔欄外〕　私は夏は信州へ帰ります信州へ帰つたら御手紙上げますから御来遊下さい

〔一九三〇年一二月二七日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕

〔封筒表〕

東京府下野方町
新井五九二
橋浦泰雄様

〔封筒裏〕

長野県東筑摩郡和田村
矢ケ崎栄次郎
昭和五年十二月二七日

〔本文〕

其後ハ御無沙汰いたして申譯がありません　歳末も迫り、折可ら如何御過しなされますか御子様方も御変りハありませんか帰郷以来例により雑事に逐はれ極めて多忙に暮して居ります殊に十二月に入りて電燈會社と料金値下の争議の為老体を以て青年と伍し毎晩演説會に奔走して居ります　此争議ハ新年に継続することゝなり閉口して居ります　新年になりましたら信州の雪景や新年の行事を見な可ら遊びにお出下さいませんか　例によりて何のお構ひも出来ませんが御宿丈ケハいたします可ら心置きなく幾日でも御滞在を願ひます　私も一体　年末一度上京の積りでしたが前申す様な次第で遂に其意に任せずそれでも来月の中にハ出たいとおもひます

奥様によろしく

荊妻よりも呉々もよろしくと申〔て居カ〕ました

十二月廿七日

矢ケ崎

橋浦様机下

〔一九三三年九月七日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕

〔封筒表〕

東京市杉並区高円寺
五ノ八五七
橋浦泰雄様

〔封筒裏〕

長野県東筑摩郡和田村
矢ケ崎栄次郎
九月七日

〔本文〕

其後は一向に御無沙汰をして居まして申譯がございません、暑い／＼と申して降りました夏もいつしか移り行きましてめつきり秋らしくなりました

本年ハ米作が稀有の豊作であるやうです、〔二字判読不能〕の方もよろしいと申して居ります　社会情勢の動きがどうなつて行くかは随分心配でありますが農民などといふものは矢張り目先のことばかり考へて居るやうです、兎も角も一般の人気は幾分元気づいて居ります

先般柳田先生の入信の節画會の話しがありまして九月下旬か十月初旬頃成城で君の画會を開き度いからこちらにある好い画も出して見てハどうかと申して居りました此度も池上君に會ひました時に矢張画會の話しがありましたが、これが果して成功するかどうかといふことは少しく疑者しいやうに小生にハ考へられます、殊にそれが東京ではです、いろ／＼今日迄の思想関係もありますし、それが本當に柳田先生が直接の責任を持つてやつて呉れるならそれハ結構ですが、さうでなくて其為めに累を他に及ぼすことがあつてはそも存じますし、第一東京でさうした會に於て賣行のあるや否も頗る考へものだと思ひます、兼て印刷物をいたゞいてあるあの画會の方ハ私にも少しく閑になりましたから相談をして見まして三枚なり五枚なりこれから心配いたしますが東京の方のはよく御熟考下さつて場合によつては思ひ止まる方がよろしくはないかと存じます　十日過ぎになりましたら池上君も帰京することゝ思ひますから一應同君にも御相談下された方がよいと存じます

もう信州はそろ／＼栗の時節となります、前便に申越の出荷の事ですが、長薯の方も〔二字判読不能〕の人に話してありますが荷かどれ丈ケとなるか見當がつきません、それに人参とか牛蒡といふものはどうでせう、栗はどんな風にして送るやうにしたらばよいでせうか　此の二十日頃からそろ／＼出始めて月末が最盛期となります　若しよろしいやうならば今から手順をしておかないと間に合ひませんが其手続等をも承り度いと存じます、

私も近来頑健に過ごして居ります、どうも上京する機會がありませんので一度お目にかゝり度いと存じな可ら其機を得ないのを遺憾に存じます　秋晴の候一度御来遊出来ませんか、例のやうですが私の〔一字判読不能〕に御滞在下さつて少しも構ひません　奥様へもよろしく

昭和八年九月七日

栄

橋浦様机下

〔一九三三年一二月二九日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕

〔封筒表〕

東京市杉並區高円寺

五ノ八五七
橋浦泰雄様
親展

〔封筒裏〕
長野県東筑摩郡和田村
矢ケ崎栄次郎
昭和八年十二月廿九日

〔欄外〕
此品ハ御邪魔で申譯ありませんが〔三字判読不能〕迄お持を願ひ駅前の飛〔二字判読不能〕へでも御預け下されゝバ難有

〔本文〕
無事御帰京の御事と存じます、御来遊之節は一向にお構ひも出来ず申譯がありません、殊に又厄介な事をお願致し何とも申譯がありません、皆々様御無事の御事と存じます、緒一月四五日頃に入信の際かうした〔一字判読不能〕御願致し度
先頃御願ひしましたシヤツは御やめ下さいました、其代りにゴム長靴二足御購入下され度
一足は十文半（足袋十文）
一足は十一文（足袋十文半）
一、今度御出での節組合の御話を願ひ度それはこちらの壮年同盟のものを二三十人集めておきますから、
組合の組織　組合の精神　官製の組合の長短　実際の仕事及御経験上の所感
さうしたやうの事を一晩御願致し度　其日時を御都合下され御一報を願度幹部のものに話して通知をしておき度いと存じます、お出での節直にでもよろしく
御滞在中一局御都合を願ってもよろしく
右御願をいたします、
前記靴の代として五円丈ケ封入しておきました、

矢ケ崎老生

橋浦様
中神〔一字判読不能〕の件御面倒でもお出で迄に御願致します

〔一九三四年五月二九日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕
〔封筒表〕
東京市杉並區
高円寺町、五ノ八五七
橋浦泰雄様

〔封筒裏〕
長野県東筑摩郡
和田村

矢ケ崎栄次郎
昭和九年五月廿九日

〔本文〕
御滞在中は一向にお構ひも出来ず申譯がありませんでした　又
〔一字判読不能〕御子様の御病気どうも御心配の御事と存じます　其後の御経過ハ如何ですか荊妻も心配いたして居ります
採集手帖御送り下さいまして難有ございました　色々とかうして個条を立てゝ見ますと私達も何だか順序が立ちますので大変に好都合に存じます　これを利用して見たいと存じます
隆祐君も東京を出かけられたとの事三四日頃ハ松本へお帰りになるさうですから久し振りで色々と話しが出来ることと楽しんで居ります
御帰京後お忙しい事と存じます御序の節消費組合の時價表御送りを願ひます
御預りしました画も一二枚は賣れさうです　秦数馬が昨日来て三枚貸して呉れと云つて持つて行きました　二三日中に消息が分ります
再々御願して申譯がありませんが此前お出でになつた時に書いていたゞいた小切れの俳画様のもの　あのうち電柱のを句をかきそこなひました　今度ハ半切位なものへ電柱丈けでよろしいですから（町の中の電柱で夜の氣分）一枚御送りを願ひ度いものです　それへ私の句で

月更けて町を戻るや
　　ふところ手

といふ句を題してこれハ家に保存しておき度いと思ひます　同じものを箱山君に一枚送りたいと存じますから一枚いたゞけると尚有り難くございます
御令閨様へよろしく御傳へを願ひます
御子様の一日も早く御快方に向はれんことをお祈りいたします
昭和九年五月廿九日

矢ケ崎老生

橋浦様机下

〔一九三九年一二月七日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕
〔封筒表〕
東京市杉並區
久我山三ノ一〇八
橋浦泰雄様

〔封筒裏〕
長野県東筑摩郡和田村
矢ケ崎栄次郎
昭和十四年十二月七日

〔本文〕
物資欠乏之中に今年も暮れ近くなりました　生活の悩みハ田舎
迄も浸み込み食物に丈ケハ幸に本年ハ恵まれて居ますが向寒の
節に炭飢饉や薪の欠乏を訴へて居ります　東京は定めし御不便
勝とお察し申します　緒甚だ申譯がありませんが先般御願いた
しました事のある老妻還暦の兎の絵これハ小さな切れで結構で
すがそれと一寸したものでよいのですが一筆揮つていたゞけま
すまいか　実ハ還暦の年も餘すところ僅かになりましたので厚
顔しいお願をする譯です
私も来年ハ満古稀になりますが幸に頑健今年も例により少し百
姓の仕事をしまして糯米を取入れましたので其老人の作つた米
で少し餅でも春いて若年にハ差上度いと思つて居ります
昨日ハ長野へ行つて来ました
御令閨様へよろしく
勝手なお願ひをして相済みません
御容赦を乞
十二月七日　矢ケ崎老生
橋浦様机下
〔一九四〇年一二月二八日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕
〔封筒表〕
東京市杉並區久我山
三丁目一〇八
橋浦泰雄様
〔封筒裏〕
長野県東筑摩郡和田村
矢ケ崎栄次郎
昭和十五年十二月廿八日
〔欄外〕
別封「高原春秋」に小生の句碑のことが書いてありますので
御送り致しました　同誌の城西逸見〔一字判読不能〕といふの
も拙稿です〔二字判読不能〕は別として私も元気で居ること丈
け御安心御願します
〔本文〕
久しく御無沙汰をして居りました　お変りもありませんか私事
至つて頑健
緒御手紙を認めます譯ハ柳田先生の野鳥野草雑記を見ましてあ
の挿画が大変に面白かつたのも一つの動機であります　二三日
前漕田君の方で其評をしたのです、此頃廿五日ですが暮の餅搗
きをしまして老妻が「今年ハ橋浦さんの方へどうして送つたら
よいだらう」と申すのでこれには全く困つたころで何とも方法

がないのです　どうか御諒察を願ひます　こゝ迄来るも物資の欠乏と共に時局の問題も考へさせられます
此頃下胡桃澤君が脳溢血で寝て居りまして、さうです此頃と申しても十月の十九日で柳田先生が来松されたので夕方先生と共にお見舞ひに行つたのが初めです　来年七十に昨日も行つて居りましたが刻々に容態が悪くなつてとう／＼今朝五時に永眠されました今夜ハお通夜にと思ひましたが此二三日大した事ではないが私も少し胃腸を害したのと老体の故を以てそれ丈ケお許しを願つた譯明日午後四時に茶毘に附する事になりましたのでそれにハ参る筈です　歳末差し迫つたので葬儀ハ大体一月か中旬になる事と存じます　享年五十六どうも世の中のことハ人間ではどうにもなりません
私ハ三日の後七十二才を　へるのに
と申しますと私ハ此十月の五日が誕生日で満古稀といふので二日會の諸君が相謀つて松本市宮渕の勢伊多賀（セイタカ）神社の境内へ句碑を立てゝ呉れまして十二月の二日に除幕式をして下さいまして同夜「三好」で賀宴を開いて下さいました　其句碑の写真と私達老夫妻の写真とが出来ましたので大晦日の日位には御送りすることが出来ると存じます　御一笑を願ひます
東京へハ丁度十年御無沙汰をして居り候　来春ハどうしても出たいと存じます　それでも本年ハ三月末可ら四月へかけて二十日間阪神可ら四國の方へ参りましたし九月下旬から十月初旬再び京阪へ参りまして防空演習の頃ハ大阪に参りました　色々と申上げ度い事ハ澤山ありますが　来陽〔臨？〕の時に譲ります
御一家の皆様の御健勝に御越年なされん事を深く御祈りいたします
老妻可らも呉々も宜しくと申出ました
昭和十五年十二月廿八日夜
矢ケ崎老生
橋浦泰雄様〔机カ〕下

〔一九四二年三月三〇日橋浦泰雄宛矢ケ崎栄次郎書簡〕
〔封筒表〕
東京市杉並區
久我山三ノ一〇八
橋浦泰雄様

〔封筒裏〕
長野県東筑摩郡和田村
矢ケ崎栄次郎
昭和十七年三月三十一日

〔本文〕

久しく御無沙汰をいたして居りまして何可ら書いてよいやら一寸戸惑ひをして居ります　信州もやうやく春らしくなりまして梅の花が咲き初めまして例により百姓の仕事が忙しくなりました　私も七十三歳の老体にも拘らず不相変頑健毎日鍬をかたげて畑へ出て居ります　物資不足の折可らながら飯と野菜丈ケにハ恵まれて居ることをせめてもの慰めにして居ります　老子が「足ることを知るものは富む」といつた境界に満足して居なければなりません

物足りて春待つ今日の心かな

御一笑

皆様御変りもありませんか御子さん方も定めし御成人なされた事と存じます　先年お出で下さいました時にまだ尋常科の生徒でありました孫も本年中学校を卒業しまして此頃から芝の西應寺町にある東洋通信機株式會社へ入社させまして川崎市塚越なる同會社の工場で教習所の学科の方を勉強させて居ります　来月下旬か五月の初旬頃は一度様子を見ながら私も上京したいと思ひますから其節ハ御目にかゝります　実は昨年の六月一寸出京しましたが二泊で帰りました　十一月中旬にも上京しまして其節は約二十日許り滞在して居りましたのに色々の事情で遂に御無沙汰致してしまひました、宣戦の詔勅のすぐ前に帰郷しました

一昨年来妙な縁故で関西の方へは度々参りました　一昨年の正月から四月にかけて阪神及び伊豫へ二十日間十月に京阪神へ十日間、昨年は四月に十六日間京阪神へ参り吉野嵐山志貴(ママ)奈良等の〔二字判読不能〕の旅、十月に又一週間程阪神へ参りましたやうな譯でそれで昨年は十年振りで東京へ出たのでありましたそれで御尋ねしなかつた事を遺憾に存じます　今度は必ず御尋ねいたし度いと存じます　上京すれば渋谷の羽澤町九二、有賀といふ家に滞在いたします　これは老妻の弟の家であります老妻のことを申しますとこれも時々神経痛で悩まされますが此節は幸に健康で働いて居ります　時々御噂さはいたして居ります今度も此手紙を書いて居りますとどうか呉々もよろしく申して呉れと申して居ります

色々と書きますが一昨年の十二月二日でありました、私しが十度満古稀になりましたので松本の諸君がお祝いに句碑を建てゝ呉れまして同日除幕式を行ひました　其節作りました絵葉書がまだ手元にありましたので餘り後ればせながら別封にて御送りいたします　御令閨様にも御笑覧に供していたゞき度此絵葉書の写真は少し老体過ぎると皆が申して呉れますが実物はそれ程ではありません　句は池上喜作君が選んで呉れたので餘りよい句ではありません

かりそめに若菜摘みけり二三片

といふので句碑の場所は松本の宮渕町勢伊多賀神社境内であります　あの赤穂といふ陶器屋の手前のところの丘陵の上です御記憶がおありでせうか、その赤穂も疾くに他界の人となり

除幕式の頃は胡桃澤君も病床にありそれも疾くに幽冥境を異にしてしまひ人生誠に落葉の感に堪へません　幸にかうして丈夫に暮らして居りますが私の丈夫の中に一度御来遊下さいませんか　例の陋屋でありますが御宿だけはいつでもいたします老妻もさう申して上げて呉れとの事であります

近頃池上隆祐君〔一字判読不能〕多く松本へ帰られて居り時々面會いたします色々と政界などに立交通られて居るようでありますが私はもう老境に立至りさうした方面丈ケは全く無交渉で百姓の仕事に専念して居ります　晴耕雨讀では無く晴耕雨耕の方であります　先日の雪の降りました際に

縁に出て雪の景色をながめけり

といふ句が出来ましたがまあこれが近来の実況と御諒察を願ひます

色々と書きたいことは澤山ありますが、今日は一日畑の仕事をして居りまして急に何だか君のことを思出したので筆を執つて見ましたが疲れて少々眠くなりましたので今度はこれ丈ケで失礼いたします

昭和十七年三月三十日夜

矢ケ崎老生

橋浦泰雄様

近来の御揮毫色紙大位な屏風の貼り変位のものを一枚下さいませんが少々厚顔の至りなれども

御自愛を祈ります

四銭切手の最後の日